

四国横断自動車道建設に伴う  
**埋蔵文化財発掘調査報告**

第四十八冊

大山遺跡

中谷遺跡

楠谷遺跡

2004.1

香川県教育委員会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団

四国横断自動車道建設に伴う  
**埋蔵文化財発掘調査報告**

第四十八冊

大山遺跡

中谷遺跡

楠谷遺跡

2004.1

香川県教育委員会  
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
日本道路公団



大山遺跡遠景（南より）



大山遺跡空中写真（真上より、上が南）

## 序 文

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、四国横断自動車道・高松東道路の建設、高松空港跡地やサンポート高松の整備など、大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行の業務を香川県教育委員会の委託を受けて実施しております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十八冊 大山遺跡・中谷遺跡・楠谷遺跡」として刊行いたしますのは、平成8年度に調査を実施しましたさぬき市津田町に所在する大山遺跡と中谷遺跡および平成9年度に調査を実施しました東かがわ市に所在する楠谷遺跡についてであります。大山遺跡では、弥生時代後期の溝と中世の集落跡を確認しており、なかでも五輪塔を埋納した土坑墓は注目すべき発見となりました。遺跡の背後に所在する鶴羽山には中世寺院があり、遺跡周辺からは金銅仏の発見や層塔・五輪塔・石仏といった石造物が集中する箇所が確認できます。古くから大山遺跡周辺は「寺尾千軒」と称されておりまして、大山遺跡ではその一端を解明するという成果を挙げております。また、中谷遺跡は丘陵の先端部に狭い平坦地を造成し、そこに集落を形成するという特異な立地をもっております。中世以降、香川県東部の主要な港であった「鶴羽」港を前面に望むというロケーションに中谷遺跡の性格が反映するものと評価できます。楠谷遺跡では弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけての集落を確認し、山間部に位置する集落の様子の一端を明らかにすことができました。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成16年1月

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター  
所長 中村 仁

## 例　　言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴い平成8年度に実施した香川県さぬき市鶴羽に所在する大山遺跡と中谷遺跡、平成9年度に実施した東かがわ市水主に所在する楠谷遺跡の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、発掘業務を財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが受託して実施した。
3. 発掘調査は平成8年10月1日から平成9年9月30日まで実施した。発掘調査の担当は以下の通りである。

(大山遺跡・中谷遺跡)

期間　　平成8年10月1日～平成9年1月31日

担当　　(財)香川県埋蔵文化財調査センター　中西　昇・松本和彦・福西由実子

(楠谷遺跡)

期間　　平成9年7月1日～9月30日

担当　　(財)香川県埋蔵文化財調査センター　樋本　清輝・香西　亮・糸山　晋

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

香川県土木部道路建設課、香川県長尾土木事務所、津田町建設課横断道対策室、津田町教育委員会、地元各自治体、地元各水利組合

5. 本書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施し、執筆・編集は山元素子・松本和彦が担当した。執筆担当は以下のとおりである。

大山遺跡・中谷遺跡　　松本和彦

楠谷遺跡　　山元素子

6. 本書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

阿河銳二、大久保徹也、大山兼一、柏微哉、片桐孝浩、佐藤亞聖、佐藤竜馬、塩崎誠司、橋本久和、松田朝由、山田隆一

7. 本書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、「日本測地系」を用いた。

標高はT.P.を基準としている。

8. 挿図の一部に国土地理院作成の1/25,000地形図「高松南部」・「讃岐津田」・「三本松」を用いた。

9. 本書で用いる遺構略号は以下の基準に従っている。

S D : 溝状遺構　S K : 土坑（墓）　S P : 柱穴　S X : 不明遺構

10. 挿図及び土器觀察表の色調表現は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1994年度版』に準拠した。

11. 引用文献は文末に一括して掲載した。

12. 大山遺跡と中谷遺跡は近接し、調査・整理年度も等しく、第1章は共通の内容となるため、大山遺跡の冒頭に一括して報告した。

## 本文目次

序文

例言

### 大山遺跡

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
1. 調査の経過	1
2. 発掘調査及び整理作業の体制	2

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	9

第3章 調査の成果

第1節 調査区	12
第2節 基本層序	12
第3節 遺構・遺物	
1. 縄文時代	20
2. 弥生時代	21
3. 中世	24

第4章 まとめ

第1節 遺構変遷	59
第2節 中世土器產地別組成について	64
第3節 大山遺跡出土の土師質土器碗について	73
第4節 大山遺跡と寺尾千軒	78

### 中谷遺跡

第5章 遺跡の地理的環境

第6章 調査の成果

第1節 調査区	87
第2節 基本層序	87
第3節 遺構・遺物	93

第7章 まとめ

註釈

引用文献・主要参考文献

### 楠谷遺跡

第8章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	103
第2節 調査の経過	
1. 調査の経過	103

2. 発掘調査および整理作業の体制	104
第9章 遺跡の立地と環境	
第1節 地理的環境	105
第2節 歴史的環境	105
第10章 調査の成果	
第1節 予備調査	110
第2節 調査区	110
第3節 基本層序	117
第4節 遺構・遺物	
1. 弥生時代～古墳時代	118
2. 近世	123
3. I・II区包含層、その他	124
4. III区の遺構・遺物	126
第11章 まとめ	128
大山遺跡観察表	129
中谷遺跡観察表	143
楠谷遺跡観察表	147
遺構・遺物図版	
付図	

## 挿図目次

第1図 四国横断自動車道(津田~引田) 埋蔵文化財包蔵地 (遺跡名番号) ······	3	第34図 S K35平・断面図 ······	38
第2図 遺跡位置図1 ······	5	第35図 S K36平・断面図 ······	38
第3図 遺跡位置図2 ······	6	第36図 S D02断面図及び出土遺物 ······	39
第4図 遺跡位置図3 ······	7	第37図 S D03・04断面図 ······	39
第5図 遺跡位置図4 ······	8	第38図 S D05・06断面図 ······	40
第6図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 ······	11	第39図 S D07・08断面図及びS D07出土遺物 ······	
第7図 調査区分割及びグリッド図 ······	14	第40図 S D09・10断面図及び出土遺物 ······	43
第8図 基本層序概念図 ······	15~16	第41図 S D11断面図及び出土遺物 ······	43
第9図 セクションベルト1・I区北壁面図 ······	17	第42図 S D12断面図及び出土遺物 ······	43
第10図 セクションベルト2・III区西及び北壁面図 ······	18	第43図 S D13断面図及び出土遺物 ······	44
第11図 遺構検出面コンター図 ······	19	第44図 S D14断面図 ······	44
第12図 断割トレンチ壁面図及び出土遺物 ······	20	第45図 S D15~17平・断面図 及びS D15出土遺物 ······	45
第13図 S D01平・断面図及び出土遺物 1 ······	22	第46図 S D18・20平・断面図 ······	46
第14図 S D01出土遺物 2 ······	23	第47図 S X01平・断面図及び出土遺物 ······	47
第15図 大山遺跡中世遺構分布図 ······	25	第48図 S X02・03平・断面図 ······	48
第16図 大山遺跡柱穴平・断面図 ······	27	第49図 S X04平・断面図 ······	49
第17図 大山遺跡柱穴出土遺物 ······	28	第50図 S X05平・断面図 ······	51
第18図 S K01平・断面図、 人骨検出状況及び出土遺物 ······	29	第51図 S X06平・断面図及び出土遺物 ······	51
第19図 S K02~10平・断面図 ······	31	第52図 S X07・08平・断面図 ······	51
第20図 S K11・12平・断面図 ······	32	第53図 I区包含層 (基本層序第Ⅲ層) 出土遺物 ······	53
第21図 S K13平・断面図及び出土遺物 ······	32	第54図 II区包含層 (基本層序第Ⅲ層) 出土遺物 1 ······	55
第22図 S K14~16平・断面図 ······	32	第55図 II区包含層 (基本層序第Ⅲ層) 出土遺物 2 ······	57
第23図 S K17平・断面図及び出土遺物 ······	33	第56図 III区包含層出土遺物 ······	58
第24図 S K18平・断面図及び出土遺物 ······	33	第57図 I・II区包含層出土土錐 ······	58
第25図 S K19平・断面図 ······	34	第58図 撫乱ほか出土遺物 ······	58
第26図 S K20~26平・断面図 ······	35	第59図 大山遺跡遺構変遷図 1 ······	61
第27図 S K27・28平・断面図 ······	35	第60図 大山遺跡遺構変遷図 2 ······	62
第28図 S K29平・断面図 ······	35	第61図 大山遺跡遺構変遷図 3 ······	63
第29図 S K30平・断面図 ······	36	第62図 中世土器組成を積算した 遺跡分布図 ······	70
第30図 S K31平・断面図及び出土遺物 ······	36	第63図 県内遺跡中世土器組成図 ······	71
第31図 S K32平・断面図及び出土遺物 ······	37	第64図 「寛永10年讚岐國絵図」 ······	72
第32図 S K33平・断面図及び出土遺物 ······	37		
第33図 S K34平・断面図及び出土遺物 ······	38		

第65図 大山遺跡出土土師質土器 坏・椀分類図	75	第95図 Ⅲ区北壁、東壁土層図	116
		第96図 S B01平・断面図、出土遺物	118
		第97図 S B02平・断面図	118
第66図 土師質土器椀成形推定模式図	76	第98図 造構配置図	119
第67図 松並・中所遺跡出土土師質土器椀	77	第99図 S D01・02出土遺物①	121
第68図 大山遺跡周辺寺院関連 内容分布図1	83	第100図 S D01・02断面図	122
第69図 大山遺跡周辺寺院関連 内容分布図2	85	第101図 S D01・02出土遺物②	122
第70図 馬糞般音堂裏山中世墓1出土遺物	80	第102図 S D03断面図、出土遺物	123
第71図 大山遺跡周辺の 寺院関連内容の概念図	84	第103図 暗渠01・02平・断面図、出土遺物	124
第72図 大山遺跡周辺の 寺院関連内容の模式図	84	第104図 I・Ⅱ区灰褐色砂混シルト層出土遺物	125
第73図 遺跡位置図1	88	第105図 I・Ⅱ区上面精査・側溝出土遺物	126
第74図 遺跡位置図2	89	第106図 Ⅲ区S R01断面図	127
第75図 調査区南壁面図及び 南半遺構配置図	90	第107図 Ⅲ区S R01、S K02・04出土遺物	
第76図 中谷遺跡遺構平面図	91	第108図	127
第77図 S B01平面図及び出土遺物	93		
第78図 S B02平面図及び出土遺物	94		
第79図 S B03平・立面図及び出土遺物	95		
第80図 S P94遺物出土状況	96		
第81図 柱穴出土遺物	96		
第82図 S K01平・断面図及び出土遺物	97		
第83図 S K02平・断面図及び出土遺物	97		
第84図 S K03平・断面図及び出土遺物	98		
第85図 包含層ないし機械掘削出土遺物	98		
第86図 遺跡位置図1	103		
第87図 遺跡位置図2	106		
第88図 遺跡位置図3	107		
第89図 周辺の遺跡	109		
第90図 予備調査トレンド位置図	111		
第91図 調査区割図、土層位置図	112		
第92図 I～Ⅲ区南壁土層図	113		
第93図 Ⅱ区北壁、Ⅰ区東壁土層図	114		
第94図 Ⅱ区東壁、Ⅰ区北壁、西壁土層図			

## 写真図版

### 巻頭図版

大山遺跡遠景（南より）  
大山遺跡空中写真（真上より、上が南）

図版1 打伏の鼻遠景（北より）

大山遺跡全景（北より）

図版2 大山遺跡空中写真（真上より、上が南）

調査前風景（南より）

I区遺構検出状況（東より）

図版3 II区遺構検出状況（南西より）

III区遺構検出状況（南より）

遺構完掘状況（真上より、上が北）

図版4 I区遺構完掘状況（北西より）

II区遺構完掘状況（南西より）

図版5 II区遺構完掘状況（北西より）

II区遺構完掘状況（南より）

図版6 III区遺構完掘状況（南より）

III区遺構完掘状況（北より）

図版7 S D01完掘全景（北東より）

S D01A-A' 土層堆積状況（北東より）

S D01B-B' 土層堆積状況（北東より）

S D01C-C' 土層堆積状況（北東より）

S D01遺物出土状況（西より）

図版8 S D01遺物出土状況（北東より）

S D01遺物出土状況（南西より）

図版9 S D01遺物出土状況（南西より）

S D01遺物出土状況（西より）

S D01遺物出土状況（南西より）

S D01遺物出土状況（南西より）

図版10 S K01人骨検出状況（南より）

S K01人骨検出状況（南より）

S K01完掘状況（北より）

II区S P90遺物出土状況（北東より）

S K01土層堆積状況（北より、手前に頭骨）

図版11 S K05土層堆積状況（北東より）

S K06土層堆積状況（北東より）

S K07完掘状況（北より）

S K08完掘状況（北東より）

S K09土層堆積状況（北より）

S K10土層堆積状況（北東より）

S K17遺物出土状況（北東より）

S K18土層堆積状況（北東より）

図版12 S K19土層堆積状況（南より）

S K25土層堆積状況（北より）

S K31土層堆積状況（北東より）

S D02完掘状況（南西より）

S D03完掘状況（北東より）

S D05完掘状況（北東より）

S D07完掘状況（北より）

S D09土層堆積状況（北より）

図版13 S X02完掘状況（北東より）

S X06土層堆積状況（北より）

S X04完掘状況（北より）

S X08土層堆積状況（北より）

III区北端部完掘状況

（西より、S D15~17他）

図版14~26 大山遺跡出土遺物写真

図版27 中谷遺跡遠景（北より）

中谷遺跡近景（東より）

図版28 遺構完掘状況（北より）

遺構完掘状況（東より）

図版29 テラス状遺構全景（北東より）

南西壁面（北東より）

図版30 中谷遺跡出土遺物写真

図版31 大山遺跡周辺寺院関連分布状況（上が北）

図版32 第6表5（石仏集積地点）遠景、左端の祠内

石仏集積地点近景

石仏全景

石仏近景

第6表6 a（大山神社外縁）石造物全景

宝塔全景

宝塔笠部

宝塔・層塔相輪

図版33	層塔屋根・五輪塔水輪	第6表12' 地点五輪塔
	第6表6 b (大山神社境内) 五輪塔全景	打伏の鼻から青木海岸(脇元漁港)を望む
	第6表7・8 地点遠景	打伏の鼻から馬猿漁港を望む
	(墓地の手前がテラヤシキ、奥がワカミヤ)	
	第6表9 (馬猿観音堂) 遠景	図版38 第6図28 (西教寺) 境内の石仏全景
	(手前が旧、奥が新観音堂)	石仏ディテール
	第6表9 a (馬猿観音堂内) 石仏全景	石仏ディテール
図版34	石仏近景 (厨子なし)	石仏ディテール
	石仏近景 (厨子入り)	第6図28 (西教寺) 五輪塔全景
	石仏ディテール (厨子なし)	図版39 調査地遠景 (南から)
	石仏ディテール (厨子入り)	調査地全景 (下が北)
	第6表9 b (馬猿観音堂境内) 石造物全景	図版40 S B01・S D01・02全景 (南から)
	第6表9 b (馬猿観音堂境内) 石造物全景	S B02全景 (東から)
	層塔設置個所 (階段脇の方形区画内)	図版41 II区全景 (西から)
	第6表9 ~11遠景	III区全景 (南から)
図版35	第6表10・11	図版42 I区西壁土層
	(夏木新池・馬猿観音堂裏山中世墓) 遠景	I区南壁土層
	第6表11 (馬猿観音堂裏山中世墓) 全景	III区西壁土層
図版36	第6表11 (馬猿観音堂裏山中世墓) 全景	図版43 S B01-1断面 (東から)
	中世墓1ディテール (真上、五輪塔水輪含む)	S D01 (B-C間) 断面 (南から)
	中世墓近景	S D02 (A-B間) 断面 (南から)
	(奥が中世墓1、手前右側が中世墓2)	暗渠01断面 (東から)
	中世墓1ディテール (斜め)	暗渠02断面 (北から)
	中世墓?ディテール	S R01断面 (南から)
	(五輪塔の残骸、須恵器出土)	図版44 S D01出土遺物
	第6表10' (夏木新池出土六地蔵石幢) 全景	S D02出土遺物
	第6表10' (夏木新池出土六地蔵石幢) ディテール	図版45 S D01・02出土遺物
図版37	第6表12' (ヤクシドウから移動・奉納された石造物) 全景	図版46 暗渠02出土遺物
	石輪近景	包含層出土遺物
		図版47 I・II区上面精査・側溝出土遺物
		III区出土遺物

## 表 目 次

第1表	発掘調査及び整理作業の体制	2	第5表	県内遺跡中世土器組成表2	70
第2表	四国横断自動車道 (津田~引田) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧	4	第6表	大山遺跡周辺寺院関連一覧	78
第3表	大山遺跡出土遺物产地別器種組成表	69	第7表	発掘調査および整理作業の体制	
第4表	県内遺跡中世土器組成表1	69			104

# 大山遺跡

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

四国横断自動車道は徳島阿南市から香川県及び高知県高知市・須崎市を経て、愛媛県大洲市に至るまでの、四国を S 字状に横断する延長462 kmで、国土開発幹線自動車道建設法に基づいて計画されている。平成 8 年度から開始された高松市内区間及び津田～引田間建設工事に伴う埋蔵文化財保護については、平成 4 年度から県教育委員会と日本道路公团とで事前協議が開始された。

平成 5 年度には両区間に建設の施工命令が出され、平成 6 年度には中心杭の打設が行われた。このような動きを受けて、県教育委員会は平成 7 年 6・7 月に分布調査を実施し、その結果に基づき、津田～引田間は 22 区画、高松市内区間 7 区画について埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公团に通知した。

日本道路公团は、県教育委員会の意見を踏まえ、平成 7 年 10 月文化庁と協議を行い、平成 8 年 1 月文化庁より「工事の施工に先立って発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより平成 4 年度からの事前協議は終了し、平成 8 年 4 月、県教育委員会と日本道路公团とで埋蔵文化財発掘調査について委託契約が締結され、さらに県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとで発掘調査の委託契約が締結され、平成 8 年度の発掘調査が開始されることになった。

### 第2節 調査の経過

#### 1. 調査の経過

発掘調査は平成 8 年 10 月 1 日から平成 9 年 1 月 31 日まで実施し、調査面積は大山遺跡が 2,113m<sup>2</sup>、中谷遺跡が 518m<sup>2</sup> を測る。以下、調査日誌抄に基づきその経過について概観する。

10 月中旬に地元各自治体・水利組合並びに津田町建設課に発掘調査を実施する旨伝え、事務所の設置や安全策打設といった調査準備に着手し、11 月より機械掘削を開始した。遺構検出面が谷部への二次堆積土上面であり、トレチ調査により下層の状況を確認しながら掘り下げたため、当初進捗状況は芳しくなかった。しかし、土層堆積状況の把握後には機械掘削もスムーズに進展し、調査も軌道に乗ることになる。12 月 6 日にはⅢ区機械掘削中に火山産五輪塔笠部が出土し、1 月 8 日にはその直下から土坑墓の検出に成功した。墓と五輪塔のセット関係は大山遺跡周辺が「寺尾千軒」と呼ばれ、中世寺院との関連が指摘されている状況に合致し、調査員は興奮を隠しきれない状況がしばらく継続した。その後、頭位を北に向け、西に向いた屈葬であることが判明した。12 月にはおおむね遺跡の全体像が明らかになり、13 世紀前半の柱穴・土坑・溝状遺構が主体を占め、やや時期が下る五輪塔を伴う土坑墓が存在する状況を確認した。さらに、1 月 7 日にはⅡ区において弥生時代後期の溝状遺構を検出した。1 月 20 日には遺構検出面である二次堆積土中より縄文時代後期に属する土器を検出し、基盤層の形成時期が確定した。なお、1 月 10 日に航空測量を実施し、1 月下旬に埋め戻しを終え、調査を終了した。

大山遺跡の調査に平行して、近接する中谷遺跡の調査を実施した。1 月 9 日より機械掘削を開始し、1 月 31 日に埋め戻しを行った。

整理作業は平成 14 年 12 月 1 日より開始し、平成 15 年 3 月 31 日に終了した。

## 2. 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制は、第1表のとおりである。

平成8年度			
香川県教育委員会 文化行政課			(財)香川県埋蔵文化財調査センター
埋 蔵	総 括	課 長	藤原 章夫
	課長補佐	高木 一義	所 長 大森 忠彦
	課長補佐	北原 和利	次 長 小野 善範
	係 長	山崎 隆	務 参事(土木) 別枝 義昭
	主 査	星加 宏明	係 長 前田 和也
	主 事	國方 秀子	主 査 西村 厚二
	主 事	打越 和美	主任主事 西川 大
	副 主 幹	渡部 明夫	主 事 佐々木 隆司
	文化財専門員	木下 晴一	参 事 近藤 和史
	技 師	塙崎 誠司	主任文化財専門員 大山 真充
平成14年度			
香川県教育委員会 文化行政課			(財)香川県埋蔵文化財調査センター
芸術文化グループ	総 括	課 長	北原 和利
	課長補佐	渡邊 勇人	所 長 小原 克己
	主 任	香川 浩章	次 長 渡部 明夫
	主任主事	亀田 幸一	務 副主幹 野保 昌弘
	副 主 幹	大山 真充	係 長 多田 敏弘
	主 任	片桐 孝浩	調査 主任文化財専門員 藤好 史郎
	文化財専門員	古野 徳久	主任文化財専門員 真鍋 昌宏
	文化財専門員	佐藤 竜馬	主任技師 松本 和彦
	文化財専門員		
	文化財専門員		

第1表 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査（平成8年度）に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員 渡辺富美江

普通作業員 荒川義行、入倉一郎、岡村好美、上西 弘、砂川正澄、多田 勝、富岡晴美、富田孝則、中川弘美、中川幸男、間嶋健吉、松本一郎、三宅 強、山坂浩樹、山田 肇

軽作業員 上西キミ子、塙カネ子、多田弘子、多田芳江、立石サカエ、細川レイ子

整理調査（平成14年度）に携わった方々は以下のとおりである。

整理補助員 合田和子、小林里美

整理作業員 久保真由美、北濱敦子、塙崎宏美、陶山仁美、辻悦子、高橋牧子

第1図 四国横断自転車道（津田～引田）埋蔵文化財保護地（運営名番号）（1/50,000）



調査名	地区名	所在地	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	遺構	遺物	備考
1 中谷遺跡	中谷	さぬき市津田町鶴羽羽	516	8.10.1~9.1.31	中世：柱穴	瓦器、土師器	本書
2 大山遺跡	大山	さぬき市津田町鶴羽羽	2,113	8.10.1~9.1.31	弥生：溝、中世：柱穴・土 坑、溝・土壤基	弥生土器、瓦器、土師器	本書
3 馬塚	大川郡大内町馬塚		620	9.7.1~9.8.31	(予備調査)		
4 小砂	大川郡大内町小砂		100	9.6.1~9.6.30	(予備調査)		平成9年度概報で 報告完了
5 津井遺跡	中山	大川郡大内町中山	6,556	10.9.1~11.3.31	奈良：掘立柱建物跡	刻印須恵器、土師器、黑色 土器	横断道報告第40号
			135	11.7.1~11.7.31	(予備調査)		
6 三殿出口遺跡	三殿	大川郡大内町三殿	3,670	11.4.1~11.6.30	近世：砂利墓	弥生土器、須恵器、土師器	平成15年度整理
				11.11.1~11.11.30			
7 司田	大川郡大内町司田		69	10.9.1~10.9.30	(予備調査)		平成9年度概報で 報告完了
8 桃谷遺跡	桃谷A	大川郡大内町水主桃谷	1,000	11.3.1~11.3.31	(予備調査)		平成11年度概報で 報告完了
	桃谷B			1,578	8.7.1~9.9.30		
	桃谷C			460	8.12.1~8.12.31		
9 高原	高原	大川郡大内町水主高原	11	9.9.1~9.9.30	(予備調査)		平成9年度概報で 報告完了
10 金武羅山遺跡	下屋敷	大川郡大内町水主下屋敷	446	8.11.1~8.11.30	(予備調査)		横断道報告第36号
				100	10.3.1~10.3.31		
				3,600	10.4.1~10.8.31		
				1,300	11.12.1~11.12.31		
11 痒の山南浦跡	別所	大川郡大内町痒の山南浦	15	9.9.1~9.9.30	(予備調査)		横断道報告第36号
			1,300	11.1.1~11.3.26	弥生：堆基層	弥生土器、土師器	横断道報告第36号
12 西谷遺跡	杖の塚	大川郡大内町川東西谷	2,092	9.5.1~10.3.31	弥生：溝、中世：掘立柱建 物跡	弥生土器、土師器	平成9年度概報で 報告完了
13 原間遺跡	原間	大川郡大内町川東原間	19,254	9.4.1~10.3.31	弥生：竪穴住居跡・掘立柱	弥生土器、須恵器、土師器	横断道報告第39号
			24,243	10.4.1~11.3.31	建物跡、古墳		第39、42号
14 植崎遺跡	植崎	大川郡白鳥町西植崎	3,590	10.12.1~11.3.31	弥生：填埋、古墳	弥生土器、須恵器、耳環、 銅鏡、青銅鏡	横断道報告第43号
			1,647	11.9.1~11.10.31			
			1,500	9.2.1~9.2.28	(予備調査)		
15 戒童遺跡	戒童	大川郡白鳥町白鳥	14,650	9.4.1~10.3.31	弥生：接石遺構・方形周溝 墓・竪穴住居跡・土壙、古 墳・竪穴住居跡・古墳、古 墳・掘立柱建物跡、中世：	弥生土器、石器、土師器、 銅鏡、耳環、玉類、陶器	平成14年度・ 15年度整理
				6,543	10.4.1~11.3.31		
				4,192	11.5.1~12.3.31		
				111	10.7.1~10.7.31		
16 谷遺跡	谷	大川郡白鳥町白鳥	2,741	11.9.1~12.3.31	中世：掘立柱建物跡、近 世：陶器窯		平成15年度整理
				900	12.4.1~12.8.31		
17 善門池遺跡	池の島	大川郡白鳥町白鳥	3,566	9.11.17~10.3.31	弥生：竪穴住居跡、古墳、 中世：掘立柱建物跡、中世： 掘立柱建物跡	弥生土器、石器、須恵器、 土師器、鐵器、耳環、玉類、陶器	平成15年度整理
				2,500	10.4.1~11.3.31		
				1,050	11.7.1~11.8.31		
18 池の島遺跡	池の島	大川郡白鳥町白鳥	8,700	10.6.1~11.3.26	弥生：竪穴住居跡、土壙	弥生土器、石器、磨製石器	横断道報告第40号
19 法月	法月	大川郡白鳥町法月	510	10.1.1~10.1.31	(予備調査)		平成9年度概報で 報告完了
20 天王谷遺跡	塩屋	大川郡引田町引田	1,200	11.1.22~11.3.24	中世：掘立柱建物跡、瓦	土師器、瓦	横断道報告第45号
21 川北遺跡	塩屋	大川郡引田町小海	1,475	11.7.1~11.8.31	奈良：掘立柱建物跡	土師器、須恵器	平成15年度整理
22 逸田石碑遺跡	逸田	大川郡引田町引田	554	10.4.1~10.5.31	(予備調査)		
23 逸田谷川下池遺跡	逸田	大川郡引田町引田	2,300	11.4.1~11.6.30	中世：掘立柱建物跡	土師器、陶器	横断道報告第44号
			1,450	10.12.1~11.1.29	弥生：竪穴住居跡	弥生土器、石器	横断道報告第44号
			310	9.7.1~9.10.31	(予備調査)		
24 麗庭遺跡	麗庭	大川郡引田町吉田	3,900	10.4.8~10.8.31	弥生：土壙、中世：掘立柱 建物跡	弥生土器、石器、須恵器、 土師器	横断道報告第44号
				3,978	9.10.1~10.3.31		
合計			145,724				横断道報告第36号

\*「横断道報告」は「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」の略で、書数は善通寺～豊島間からの通算の書数である。

第2表 四国横断自動車道（津田～引田）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧

## 第2章 遺跡の立地と環境

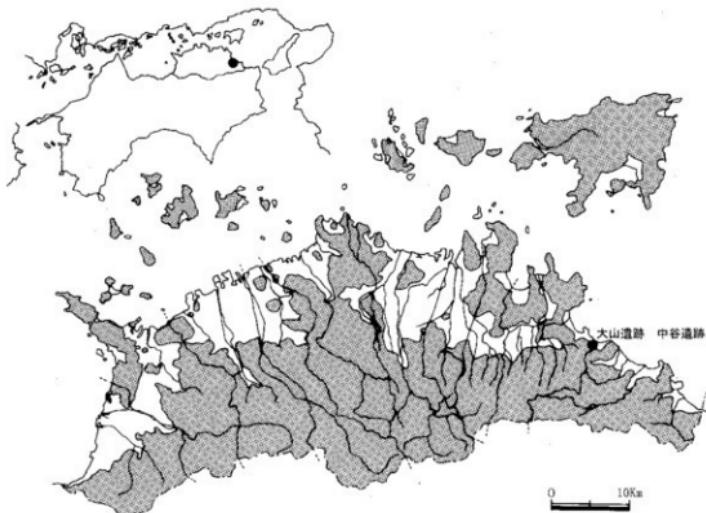
### 第1節 地理的環境

大山遺跡・中谷遺跡は香川県さぬき市津田町鶴羽に所在する（第2・3図）。両遺跡は津田湾沿岸に位置し、現在の海岸線からの直線距離は大山遺跡が約550m、中谷遺跡が約400mとなり、海浜集落である状況が容易に窺える。遺跡から海への眺望は優れ、海から吹き上げる風には潮の香りが漂う。

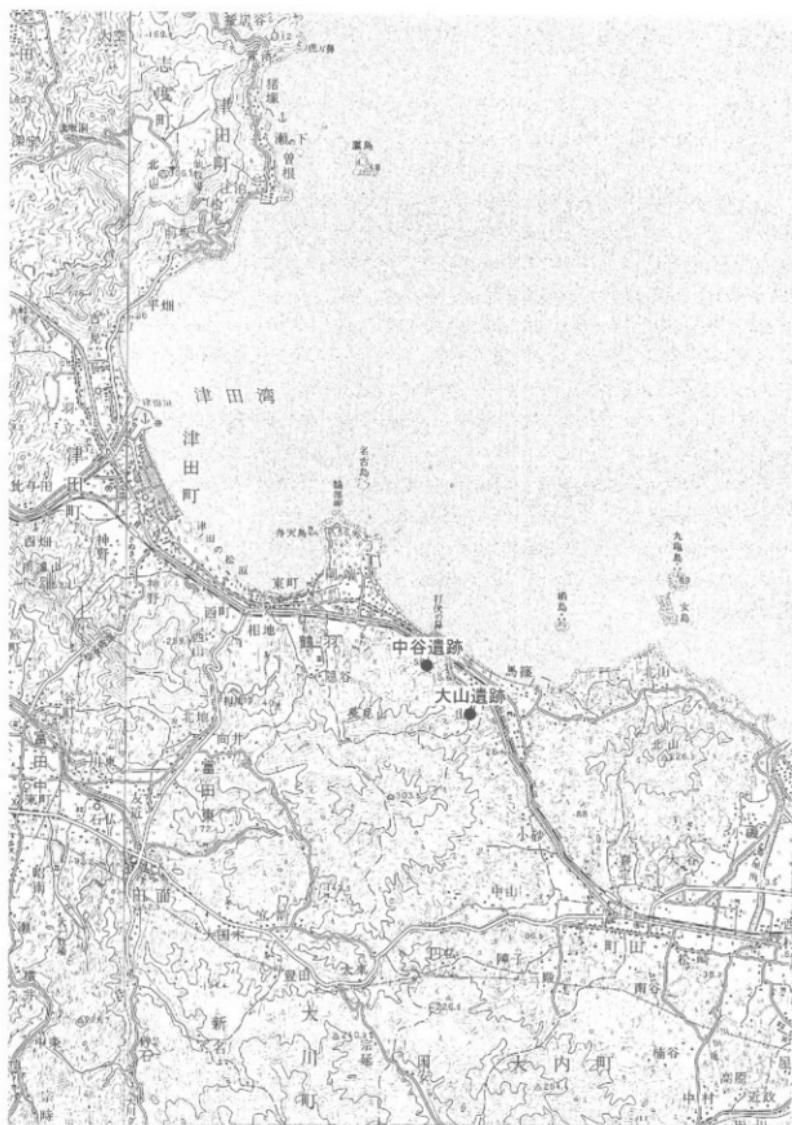
大山遺跡は鶴羽山（長見山、標高303m）から蜘蛛手状に延びる尾根の先端付近に位置し、その西側斜面部に立地する（第4・5図）。現状では棚田状に開墾されているが、元来は大山神社（大山八幡宮）に連続する北北東方向に細長く延びる尾根であったと推定される。西側は狭く深い谷部を介在して丘陵が西に張り出し、遺跡は谷筋より東の東側尾根の斜面部に立地する。旧地形の復元を行うと、大山遺跡は東側尾根と西から張り出す丘陵の間隔が最も狭い箇所に位置し、図示し得ていないが周辺用水は谷部を堰き止めたいわゆる「谷池」であり、大山遺跡が立地する箇所に集水する状況も窺える。尾根と丘陵の間隔は総じて狭いが、大山遺跡の南側においてわずかに開けた状況となる。

調査所見を踏まえると、西側丘陵と東側尾根がなす谷部には縄文時代後期に埋積した二次堆積土を認め、その上面で弥生時代と中世の遺構を検出した。二次堆積土は後述する基本層序第II層に該当し、拳大から1m以上の花崗岩塊石を包含する。調査区東端部では北北東へ延びる尾根を削平した状況が確認できる（明黄褐色粘質土＝基本層序第I層）。近隣は現在も土石流危険地帯であり、周辺の古老の話では、近年まで鉄砲水のように土砂が流れ込んでいたようである。

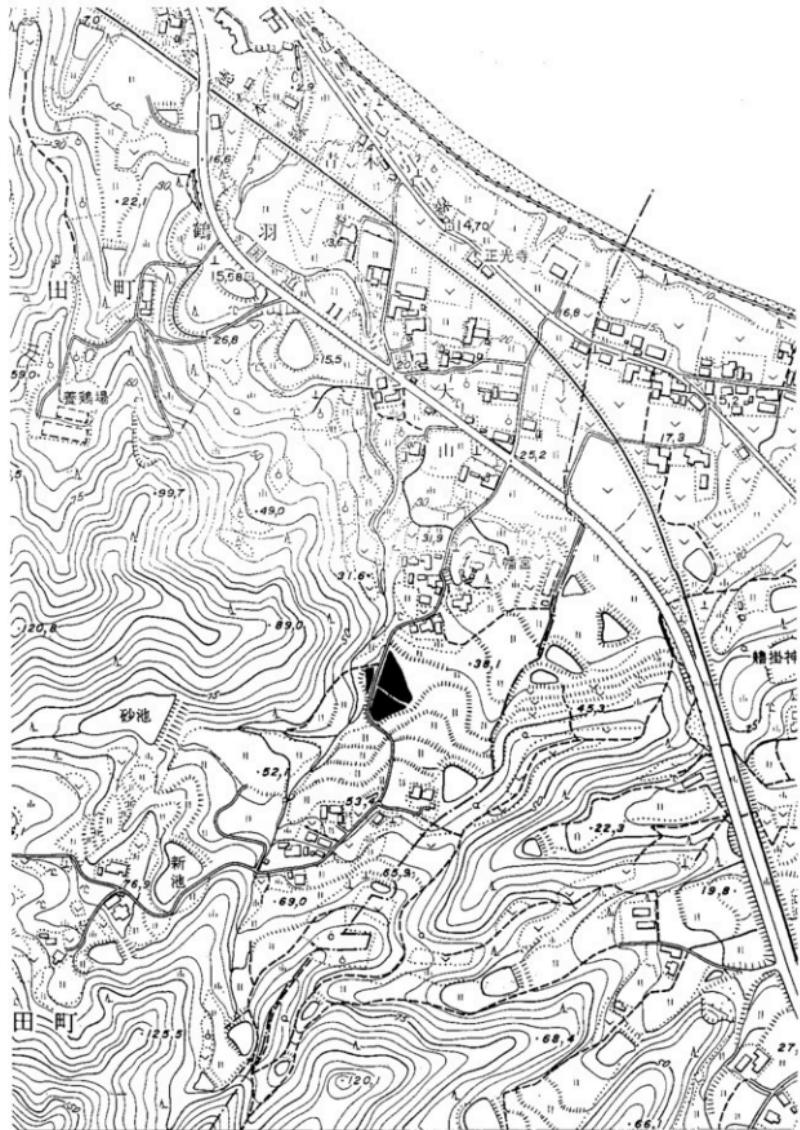
なお、現地表面の標高は大山遺跡Ⅰ区南端部が42.8m、Ⅱ区北端部が39.8mを測り、調査前の状況は階段状の棚田である。



第2図 遺跡位置図1



第3図 遺跡位置図2 (S = 1 / 50,000)



第4図 道跡位置図3 (S = 1 / 5,000)



第5図 漏跡位置図4 ( $S = 1/2,000$ )

## 第2節 歴史的環境

大山遺跡・中谷遺跡は津田湾沿岸の東方に位置し、現在の海岸線からの直線距離は大山遺跡が約550m、中谷遺跡が約400mを測る。今まで両遺跡周辺では縄文時代・弥生時代の周知の遺跡は稀薄であるが、古墳時代前期には津田湾沿岸において多数の古墳が築造される。

鵜部山古墳が最も古く位置付けられ、古墳時代初頭に築かれる（第6図22、以下番号のみ記載）。当時は島であった可能性が高い鵜部半島の基部に位置する（標高12m）。積石塚であるが、使用石材は当地域の積石塚で普遍的に確認できる安山岩ではなく、砂岩・花崗岩といった近隣で採掘できる石材が用いられる。後円部は正円を指向し、低平な前方部は後円部から直線的に延びた後、撥形に開く。これに後続する古墳は津田湾沿岸では確認できないが、火山の南麓に後円部のみ積石を施し、撥形に開く低平な土盛りの前方部を認める川東古墳が所在する。前方後円墳集成編年2期に該当する（広瀬1992）。

津田湾沿岸で古墳の築造が増加するのは集成3期である。火山産凝灰岩製の割竹形石棺を3基内包し、墳長約50mに復元できる前方後円墳が火山の北東に登場する（赤山古墳、21）。火山産石材を用いた最古の石棺が南北主軸の埋葬方位で認められ、副葬品として石製腕輪類（石釧）を有する等、讃岐地域においては畿内色の強い古墳と評価できる。瀬戸内海の海上交通の要衝である津田湾沿岸を掌握した在地勢力の首長墳と考えられ、畿内政権との緊密な関係を保持したものと理解できる。その後の首長墓系譜は岩崎山4号墳（18の一部、集成4期前半）、けば山古墳と続き（23、集成4期後半）、安定した首長墓系列を形成する。岩崎山4号墳は全長49mを測る前方後円墳で、後円部に墳丘主軸に直交する埋葬方位で火山産凝灰岩を用いた割竹形石棺を収める。石棺（身）の両小口には造り付けの石枕を認め、棺蓋上面には帯状の格子を浮き彫りしており、前者は奈良県洪谷向山古墳出土とされる石枕の意匠に共通し、後者は奈良県燈籠山古墳出土の割竹形埴質棺ないし埴質枕に密接な関連を認める（今尾1994）。副葬品にも石製腕輪類を認め（石釧・車輪石）、多様な形象埴輪構成は奈良県佐紀陵山古墳に通ずるという指摘もある。なお、佐紀陵山古墳の堅穴式石槨直上に配置された屋根形天井石は火山産凝灰岩の可能性もあり、埋葬施設・埴輪といった古墳諸属性に関連性を認める。けば山古墳は全長57mの前方後円墳である。後円部に繩掛突起を有する堅穴式石槨の天井石を認め、その材質は火山産凝灰岩となる。上記したように、首長墓系譜は前方後円墳という墳形を採用し、火山産凝灰岩製の石棺や天井石を用い、さらに畿内、なかでも大和南部・北部地域との密接な関連を指摘することができる。また、火山産石材を用いた石棺は岡山県鶴山丸山古墳（集成4期）、徳島県鳴門市大代古墳（集成4期）、大阪府岸和田市久米田貝吹山古墳、白鳥町大日山古墳（伝長持形石棺内包）で確認できる。畿内勢力との密接な関連のみならず、香川県東部と岡山県南部、香川県東部・徳島県鳴門市を経て、大阪府南部に至る航路に沿った分布を示し、地域の枠を越えた内海航路を基軸とした広域同盟関係も窺える。また、津田湾沿岸地域では首長墓クラスに従属する小型円墳が集成4～5期にかけて散見できる。なかでも集成4期後半に位置付けられる龍王山古墳は直径20m前後の円墳で、安山岩板石を用いた長大な堅穴式石槨を内部主体とする（17）。讃岐地域では埴輪頭位が東西主軸を指向するが、津田湾沿岸に所在する古墳は南北主軸が主体を占め、龍王山古墳も南北を指向しており、畿内中枢部との関連が指摘できる。なお、前方後円墳においても埋葬施設が墳丘主軸に平行ないし直交し、かつ南北主軸を指向する例を多く認め、畿内の古墳と評される。

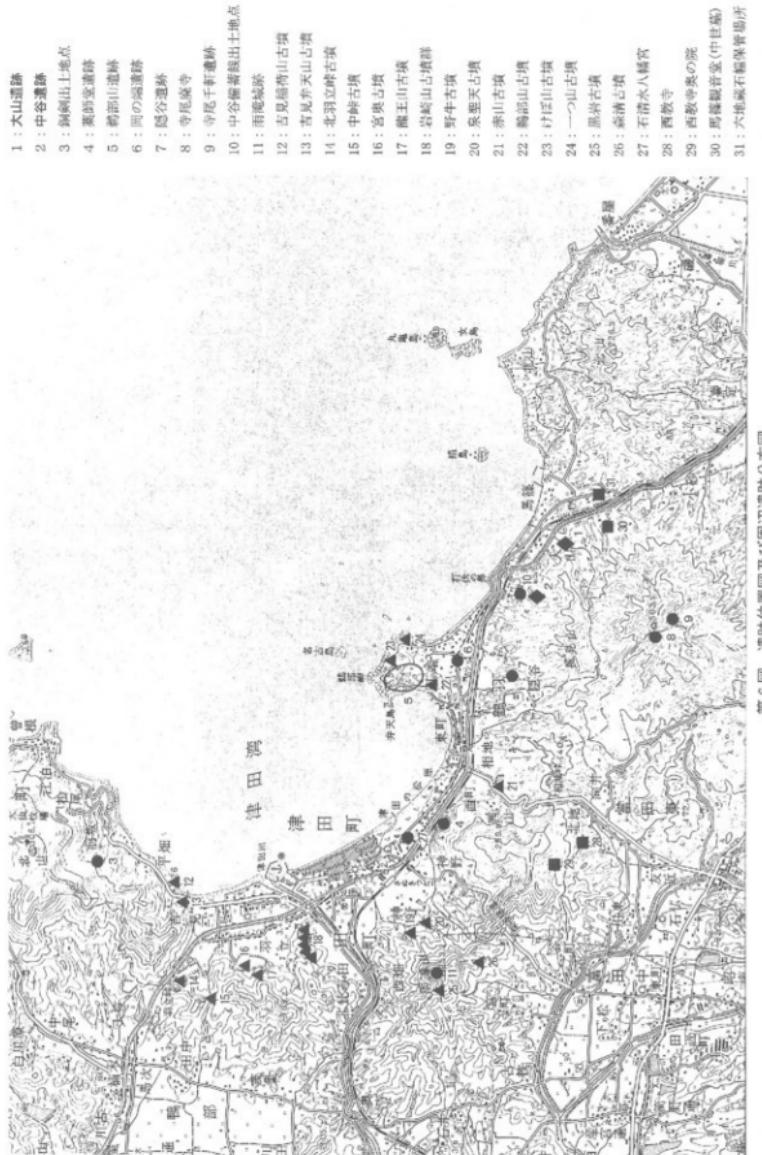
古墳時代前期～中期初頭における津田湾沿岸勢力は海上交通の要衝に位置し、畿内のみならず鳴門・紀淡海峽の航路を掌握し、安定的な首長墓系譜を認めたが、集成5期には古墳の築造を停止し、首長墓系譜は途絶える。集成5期は讃岐地域のはば全域で古墳の築造数が激減する。集成5期の代表的な古墳

として、津田湾の背後に所在する雨滝山ないし火山の南部、さぬき市大川町に所在する富田茶臼山古墳が挙げられる。丘陵に直交した墳丘主軸の邊地、三段築成の墳丘と盾形周溝、陪塚の完備といった諸属性において、前期段階に認められた積石塚、在地産石材を用いた埋葬施設、後円部を尾根の低い側に配置した邊地、東西主軸の埋葬頭位といった地域性の証拠を認める。その背景には畿内勢力による古墳築造階層の淘汰・再編を見取ることができる。富田茶臼山古墳の被葬者像については在地勢力の結集と中枢部から派遣された人物という見解が可能であるが、その墳丘プランが奈良県北部に所在する五社神古墳と相似といった指摘もあり（國木1997・大久保1999）、津田湾沿岸を含めた香川県東部地域勢力の結集と理解したい。なお、後期古墳の内容としては、宮奥古墳が唯一の横穴式石室を内部主体とする古墳となるが（16）、内容は判然としない。

古代の遺跡としては、包蔵地として離谷遺跡が知られるのみである（7）。文献では安元2（1176）年の八条院領目録の京都蓮華心院領に「鶴羽」と記載され、その寺領となる鶴羽荘が皇室領莊園として設置されたことが窺える。蓮華心院とは鳥羽上皇の皇女八条院璋子内親王が承安4（1174）年に京都仁和寺に建立した寺院である。その後、建暦元年（1221）に後鳥羽上皇の皇女春華門院、さらに同年、順徳上皇に伝わり、後鳥羽上皇が管領することになる。承久の乱により後鳥羽上皇の諸荘は全て幕府に没収されたが、承久3（1221）年に高倉院守貞親王へ返還される。貞応2（1223）年の高倉院守貞親王の死去に伴い、安嘉門院邦子内親王に移譲され、鶴羽荘は安嘉門院領となつた。その後も同荘は転々と管領者が変化するが、南北朝期には文献から姿を消す（津田町史編集委員会1986）。

中世には大山遺跡・中谷遺跡周辺には寺院に関連した内容を豊富に認める。詳細に関しては第4章第4節において検討するが、ここでは周知の内容について記す。その中核として、寺尾山山頂に所在する寺尾廃寺が挙げられる（9）。中世山岳寺院と考えられるが、実態は不明である。また、遺跡台帳上は寺尾山山頂部からわずかに下った地点に寺尾千軒遺跡がプロットされるが、周辺住民からの聞き取り調査では、さぬき市津田町大山から大内町馬籠付近が寺尾千軒とされており（『新撰玉藻集』にも「寺尾山、田面鶴羽の境に旧寺あり。今廃れ寺号知らず。遺跡存す。』とある）、石仏・五輪塔・層塔といった石造物が色濃く分布する。いずれも火山産凝灰岩を用いられ、その石切場は火山南麓に所在する西教寺奥の院周辺とされる（29・柏・松田2002）。隣接する西教寺境内にも火山産凝灰岩製の五輪塔や石仏を認める（28）。また、寺尾千軒を示すように大山遺跡Ⅲ区西の畑から、高さ18.5cm、直径6cm、蓬台高4.5cmの金銅仏が出土している（津田町史編集委員会1986）。鎌倉時代の所産とされ、大山遺跡Ⅲ区で検出した土葬墓とそれに伴う五輪塔との関連が注目できる。

こうした寺院関連とは異なる側面として、港湾都市としての性格が挙げられる。文安2（1445）年の正月～同3年正月にかけての兵庫北関での入船に対する關稅部賦課の記録である「兵庫北関入船納帳」に「鶴箸」と記載された船籍地があり、鶴羽に所在した港を示す。鶴羽とは津田湾東端から大山遺跡が所在する周辺の大字であり、津田湾東端部ないし打伏の鼻周辺の内湾気味に入り組んだ海岸の一部に港が設置されていた可能性が高い。『香川県の地名』には「鶴部岬基部の地層から中世の陶器・輸入磁器などが出土している」と記載されるが（平凡社1989）、その実態は明らかではない。これに関連した内容として、中谷遺跡に近接した備蓄錢が挙げられる（森下1995）。隣接道路工事の最中に地元有志によって掘り出され、新設した祠に奉納された備蓄錢が平成6年に発見された。備前焼甕に漢代～元までの中国錢7,431枚を埋納したもので、縁錢の状態で收められていた。備前焼甕と最新錢の年代観より、14世紀後半頃に推定されており、「兵庫北関入船納帳」の前段階の内容を示すものとして注目できる。



第6図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 調査区

調査を実施した範囲は南北長約70m、東西長約58m、調査面積2,113m<sup>2</sup>を測る。調査対象地は発掘調査着手前は棚田であり、ほぼ中央を町道が縱断する。調査区は町道より東については、比高差のある棚田により二分し、それぞれⅠ・Ⅱ区とし、土層観察用のセクション畦に転用した。町道の西は小規模な三角形地となり、Ⅲ区とした。

グリットは正方位を指向した10mメッシュにより、南北方向を8分割、東西方向を6分割した（第7図）。また、遺構名については、土坑・溝状遺構・不明遺構については新遺構名を貼付し、ピットに関しては調査時の遺構名を踏襲した。

### 第2節 基本層序

調査対象地は丘陵の斜面部に位置し、北へ階段状に傾斜する棚田である。現地形におけるⅠ区最南端とⅡ区最北端の比高差は3m、遺構検出面における比高差は2.8mを測る。調査区東西方向ではⅠ・Ⅱ区東端において、削平された尾根の構成土を認め、西に向けて緩やかに傾斜する状況を確認した。さらに、調査区外西側において、深く狭い谷筋が所在する。

調査では、弥生時代後期と中世前半期の遺構を同一遺構面で検出し、その後の再検討により、中世後半期に属する遺構が検出面より高いレベルから開削されていることを確認した。遺構検出面は谷部に埋積した二次堆積土上面に該当し、その形成年代は出土遺物の年代観より縄文時代後期前葉であったと考えられる（報文番号1・2）。

以下、各層序の性格や形成時期について報告する（第8図）。基本層序作成ポイントについては、南北方向は●印、東西方向は■印で示した。さらに、遺構検出面には▲印を付した。なお、壁面図は天地1/40、左右1/160のスケールで提示した（第9・10図）。

**第Ⅰ層 基盤層。**遺跡の東側に位置する北北東へ延びる尾根の構成土である。第9図セクションベルト1では10層、Ⅰ区北壁面では20層に該当する。形成時期は不明。上位は黄色系の粘土ないし粘質土であるが、下位は風化が進行していない花崗岩からなる。出土遺物は確認できない。調査区東部で検出したSD02~03以東の検出面となり、これらの溝状遺構が傾斜の変換点に開削されたことが看取できる。溝以西では後述する第Ⅱ層の下位へ潜り込む。Ⅰ区南端中央部においても一部確認できるが、Ⅰ区中央では確認できず、大山遺跡の旧地形として、北北東へ延びる尾根の西斜面部に位置し、西へ傾斜するのみならず、北にも傾斜することが窺える。

**第Ⅱ層** 第Ⅰ層が形成する旧地形の尾根斜面部から谷部に埋積した二次堆積土を一括した。第9図セクションベルト1では9層、Ⅰ区北壁面では16~19層、第10図セクションベルト2では7層、Ⅲ区壁面では10層がそれぞれ第Ⅱ層に該当する。にぶい黄橙色混砂粘質土を主要埋土とし、拳大~人頭大、さらには1mを越える規模の花崗岩を含有する。東西方向の基本層序が示すように、その上面はわずかに中央部が窪むもののは水平面を認め、Ⅲ区においてわずかに西へ傾斜する。南北方向では後世の棚田化によりその上面は水平面を認めるが、元来は約20°をもって緩やかに傾斜していたと考えられる。第Ⅱ層

上面は遺構検出面となり、弥生時代後期と中世の遺構を検出した。その形成時期は断削調査により報文番号1・2として図化した縄文時代後期前葉に位置付けられる土器を確認しており、第Ⅱ層の形成時期が看取できる。なお、周辺は現在も土石流危険地帯に位置付けられる。

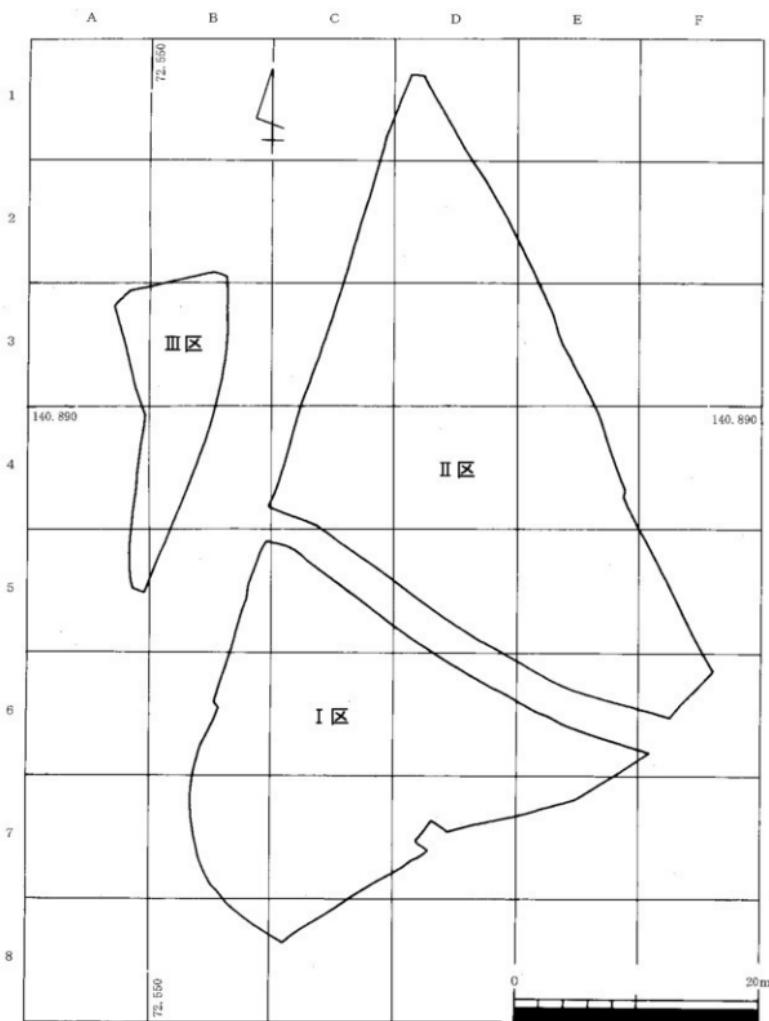
**第Ⅲ層** 遺構検出面である第Ⅰ・Ⅱ層直上で検出した包含層である。第9図セクションベルト1では7層、I区北壁面では14・15層、第10図セクションベルト2では6層がそれぞれ第Ⅲ層に該当する。黒褐色混砂粘質土を主体とし、比較的濃密な遺物の出土を認める。南北方向のセクションでは、第Ⅱ層上面に沿って約20°の傾斜角度で形成され、東西方向も第Ⅱ層に呼応してわずかに中央に崖みを認める堆積状況を示す。Ⅲ区では、第Ⅲ層に対応する包含層は確認できず、第Ⅱ層直上には第Ⅵ層とした現代耕作土ないし第Ⅳ層が堆積する。I・Ⅱ区において検出した第Ⅲ層出土遺物は報文番号144~280として図化したが、その主たる時期は13世紀前葉となる。但し、後述する第V層からの混入と判断した15~16世紀代の土師質土器足釜・壺、備前系陶器（押鉢・壺）や18世紀代の陶胎染付碗を検出している。

**第Ⅳ層** Ⅲ区でのみ検出した層位である。調査段階には、第Ⅲ層とはほぼ同一層位の包含層と判断していたが、層位の連続性や遺構掘り込み面の再検討の結果、第Ⅲ層から分離させた層位である。第10図Ⅲ区壁面図9層が該当する。灰黄色砂質土で構成され、粗い花崗土ないし花崗砂が主体を占める。Ⅲ区のほぼ中央から北及び西へ傾斜する第Ⅱ層に沿って形成され、調査段階では確認できなかったがその上面は遺構検出面となり、20・21層に遺構埋土を認める。埋土中には骨片を認め、Ⅲ区中央で検出した土坑墓（SK01）に酷似した内容を示す。SK01の年代的位置付けは困難であるが、その上位より出土した五輪塔笠部の年代観より、15世紀中葉~16世紀代の所産と判断した。第10図20・21層埋土で構成される遺構も土坑墓の可能性が高く、SK01と同時期の所産と考えたい。よって、第Ⅳ層の形成年代は第Ⅲ層以降、SK01構築以前となり、ここでは13世紀中葉以降、15世紀中葉~16世紀代と判断しておきたい。

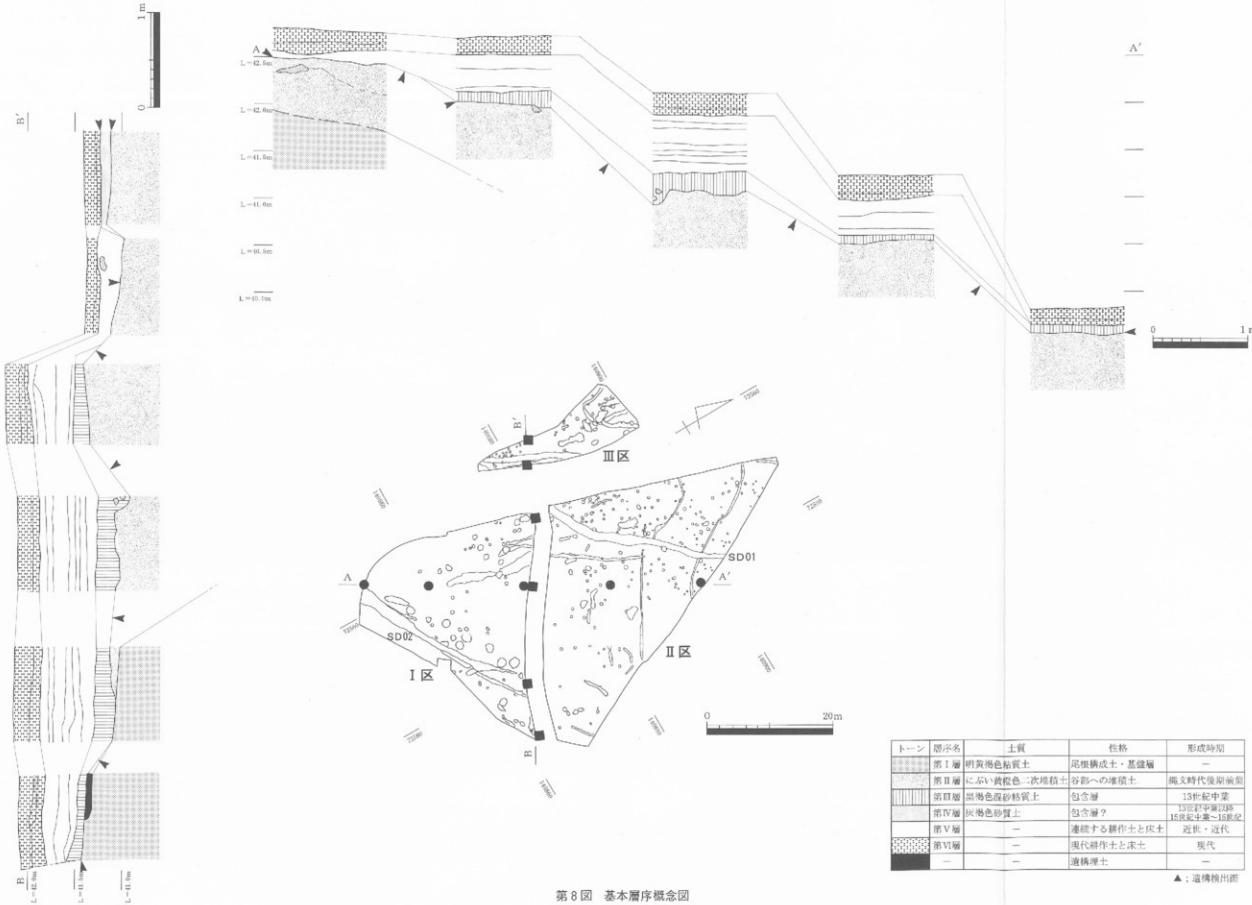
**第V層** 第Ⅵ層直下に堆積した連続する耕作土・床土を一括した。正確な所属時期は明らかではないが、第Ⅳ層より上層に堆積した可能性が高く、第Ⅳ層以降の形成年代を想定することができる。ここでは、近世ないし近代の所産と理解したい。

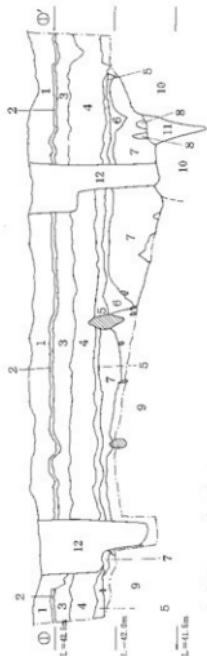
**第VI層** 現代耕作土と床土を一括した。調査着手前は北に傾斜する棚田であり、I区は2筆、II区は4筆、Ⅲ区は畑地であった。I区では第Ⅵ層直下に第V・II層を経て、遺構検出面に至るが（第ⅠないしⅡ層）、II区では第I層直下に遺構検出面を確認し、検出面は調査着手前の棚田を反映した起伏を形成する。

なお、第11図に遺構検出面の20cmセンター図を示した。同図には主要遺構も配置したが、基本層序図と対比すると、第I層と第II層の境にSD02が位置し、丘陵の裾部に開削された溝であることが窺える。



第7図 調査区割及びグリッド図 ( $S = 1/400$ )



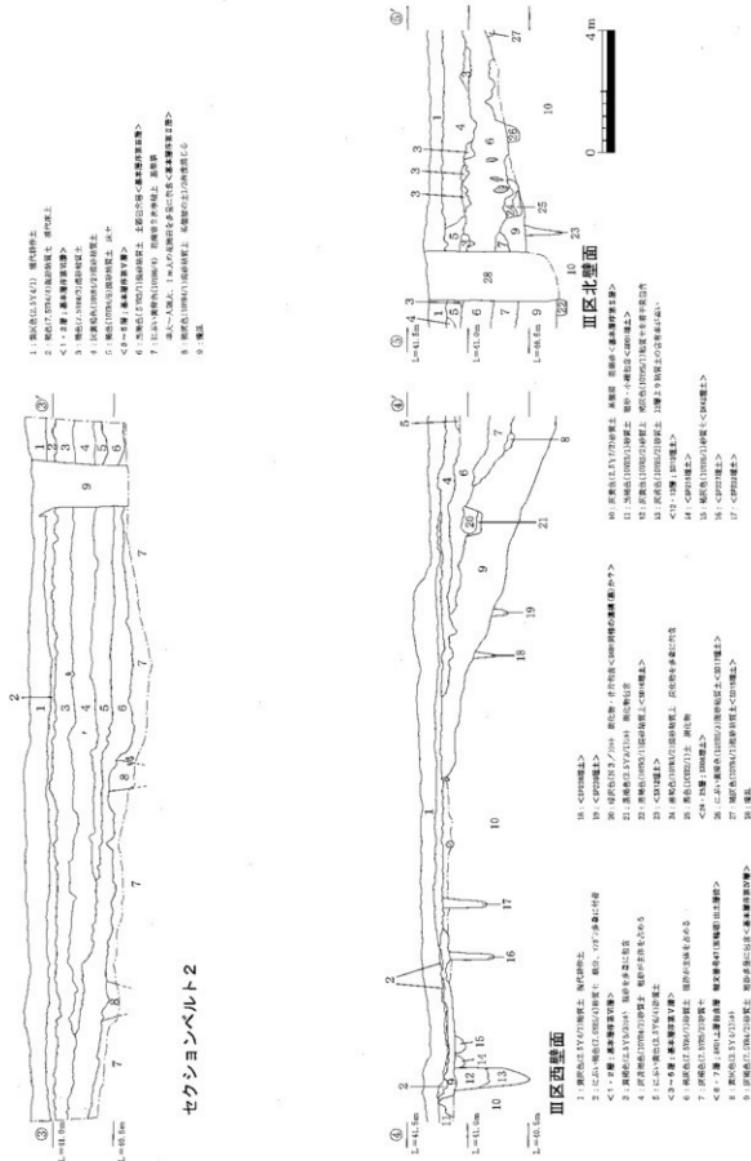


セクシヨンベルト 1

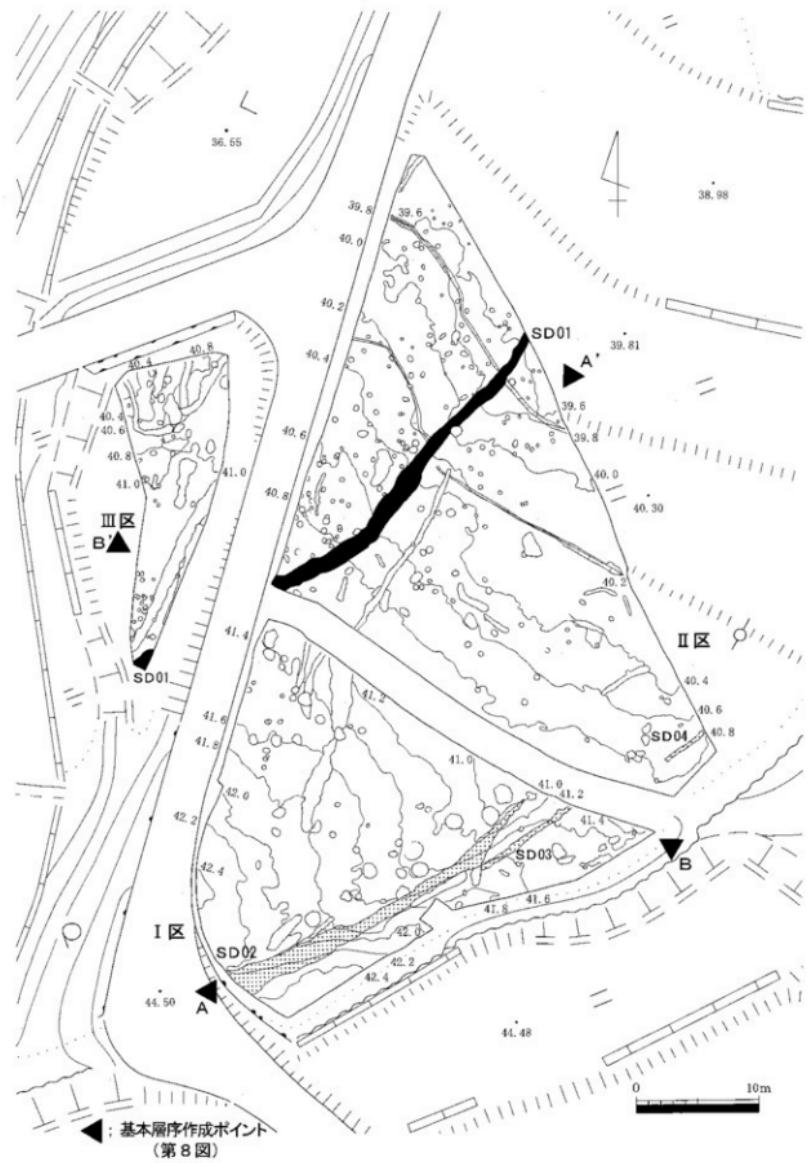


I 区北壁面

第9図 セクシヨンベルト 1・I区北壁面図 (左右 S = 1 / 160、天地 S = 1 / 40)



第10図 セクションベルト2・Ⅲ区西及び北壁面図（左右S=1/160、天地S=1/40）



第11図 遷構検出面コンター図 ( $S = 1/40$ 、20cmコンター)

### 第3節 遺構・遺物

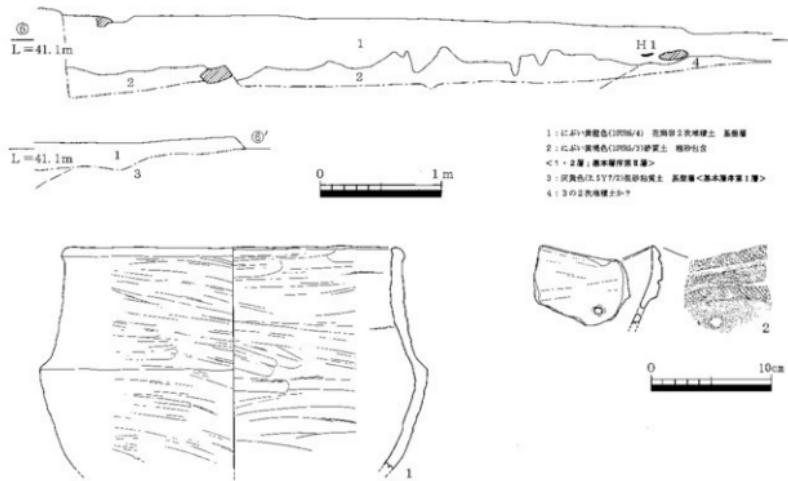
#### 1. 繩文時代

当該期に属する遺構は確認できないが、谷部に埋積した二次堆積土（基本層序第Ⅱ層）より繩文時代後期前葉に属する土器を検出した。大山遺跡ではこの上面において弥生時代後期と13世紀前葉～中葉、15世紀中葉～16世紀代に属する遺構・遺物を確認しており、基本層序第Ⅱ層の形成年代が当該期となる。

#### 断割トレーニチ（第12図）

I区中央部やや北よりに東西方向の断割トレーニチを設定し、基本層序第Ⅱ層の下位構造、出土遺物の有無を確認したが、掘削深度の関係から検出面より1.2mの深度の確認に留まる。第12図に断割トレーニチ断面図を示した。上面は遺構検出面、1層は基本層序第Ⅱ層となる。同質・同色の埋土は検出面より0.5m前後下位まで認め、それより下位にはにぶい黄褐色砂質土が堆積する（2層）。1層には拳大～人頭大、さらには1mの規模を測る花崗岩を包含するが、2層では確認できず、粗砂を主体として構成される。さらに下位には基本層序第Ⅰ層を認め、東から西へ傾斜する状況を確認した。

1・2は断割トレーニチ1層出土遺物である。基本層序第Ⅱ層に合致し、その形成時期を示す。いずれも繩文土器深鉢である。1は口縁部と体部境に明瞭な屈曲点を認め、口縁部は小さく内傾した後、直立する。外面には条痕文、内面にはナデ調整を施す。2は細片であるため傾きに問題を残すが、口縁部は波状口縁を呈する。口縁部外面には文様帯を創出し、磨消繩文による施文を行い、文様帯下位には穿孔を認める。いずれも永井Ⅱ式に該当し、繩文時代後期前葉に位置付けられる（渡部1990、註1）。



第12図 断割トレーニチ壁面図及び出土遺物 ( $S=1/40$ 、 $S=1/4$ )

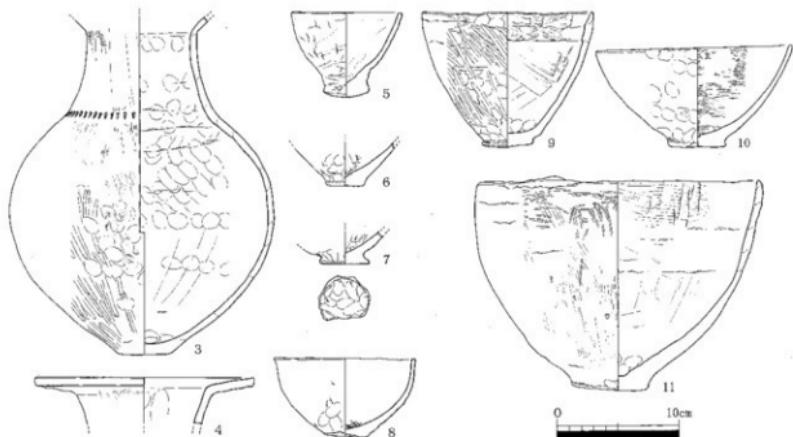
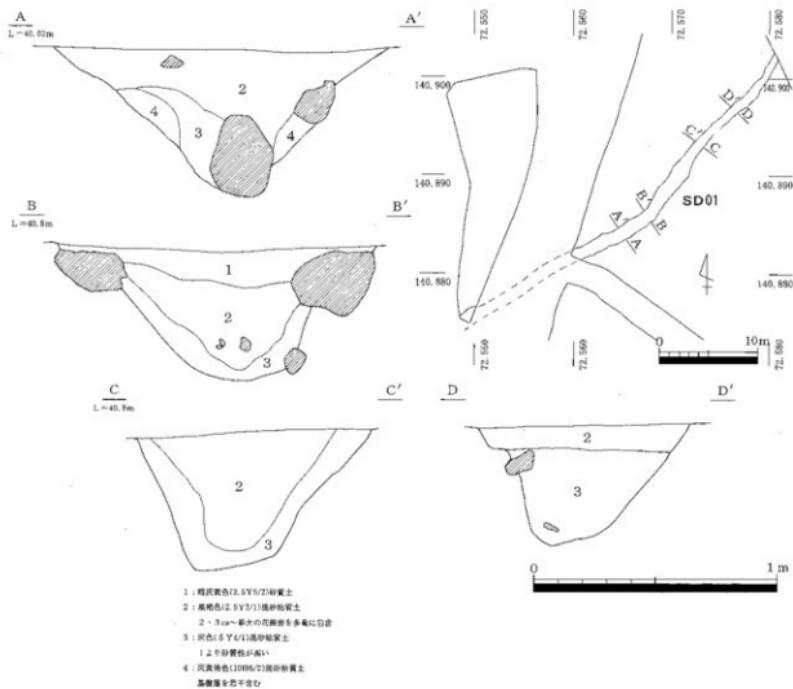
## 2. 弥生時代

当該期に属する遺構はⅡ～Ⅲ区で検出した S D01の確認に留まる。竪穴住居壁溝の可能性が残る S D18も弥生時代の所産となる可能性も否定できないが、積極的に評価することは困難である。ここでは S D01のみ報告し、S D18については後述する。

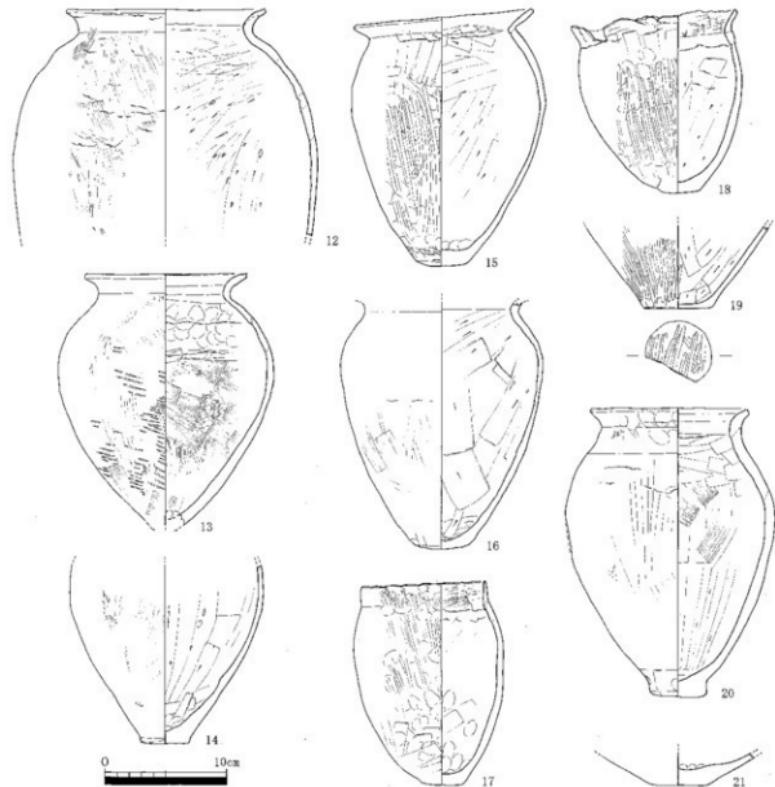
### S D01（第13・14図）

Ⅱ～Ⅲ区にかけて検出した溝状遺構である。遺構検出面における地形に対しては直交する主軸方位を示すが（第13図、付図）、周辺地形に対しては鶴羽山から蜘蛛手状に細長く延びる尾根の主軸方位に合致する。検出長42m、検出最大溝幅1.8m、平均溝幅1.4mを測る。検出面からの深度はⅡ区南側では0.6m、Ⅱ区北壁では0.4mを測り、溝底レベルは周辺地形に沿って緩やかに北へ傾斜する。U字形ないしV字形の断面形状を呈し、埋土は大きく3層に大別できる。下層埋土は底面ないし掘方形状に沿って堆積した基盤層（基本層序第Ⅱ層）<sup>1</sup>ブロックを若干量含有する灰黄褐色混砂粘質土、中層には3層を抉り込むように堆積した灰色混砂粘質土（2層）、上層はB-B'間セクションでのみ確認できる暗灰黄色砂質土（1層）をそれぞれ認める。問題は再掘削後に堆積した埋土とも評価できる2層の評価であるが、3層とは土質に差異は確認できず、元来同一埋土であった可能性が高いと考える。なお、底面付近では流水及び滲水状態を示す埋土はみられず、比較的短期間に埋没した状況が復元できる。遺物は2層埋土上位でのみ確認でき（図版8・9）、一括投棄された状況を示す。

出土遺物の器種構成は弥生土器鉢・甕の多寡と壺の稀少性、さらに高坏の欠落という特徴を有し、廢棄状況ないし所属時期に起因したものと考える。なお、石製品は剥片を含めても確認できず、わずかに13世紀前葉に位置付けられる S D10より無茎式石鏃を確認するに留まる。3～21は S D01出土遺物である。3・4は広口壺である。3は直口壺Cの系譜を引く広口壺Eに該当する（大久保1995）。底部は突出した平底形態を留め、体部は球形を呈し、肩部の張りは認められない。頸部は内傾し、比較的長く延び、口縁部は大きく開く。体部と頸部境には列点文を配し、体部下半にはヘラミガキを認める。4は直線的に外傾する頸部から口縁部は大きく開き、端部を四角く收める。5～11は鉢である。5は底部の突出度合いが極めて強く、厚みを有する。6も突出した平底形態を呈する。7は底部外縁を横方向に拡張し、脚状を呈する。底面には顕著な指押さえを認める。8は小さいながら平底形態を留め、体部は内傾気味に開き、口縁部は直立する。9は不安定な平底形態を呈し、体部はかすかに内傾気味に開き、口縁部に至る。粘土紐巻き上げ後の接合が甘く、隨所に粘土紐繰ぎ目を認める。外面には上半を中心にヘラミガキを施す。10は安定した平底形態を呈し、体部は内湾気味に開き、口縁部に至る。内面には入念な板ナデ調整を認める。11は口径23.6cm、器高17.6cmを測る大形鉢である。底部は突出した平底形態を呈し、口縁部は短く直立する。口縁部外面には横方向のヘラミガキを認め、内面の板ナデ調整も口縁部のみ横方向に施す。外面には顕著な被熱痕を認め、赤変する。12～20は甕である。12はなで肩状の肩部から強く屈曲し、痕跡的な頸部を経て、口縁部は外反気味に短く開く。口縁部内外面には粘土紐繰ぎ目痕跡を認め、端部に再度粘土紐を貼付し、口縁部を形成したことが窺える。内面のヘラ削り調整は卓越し、頸部付近まで及ぶ。13はいわゆる叩き甕である（畿内五様式甕）。胴部最大径は中位より上方に位置し、張りの弱い肩部から口縁部は大きく外反する。体部外面には左上がりの平行叩きを螺旋状に施し、後出する板ナデ調整を認める。内面下半は縱方向、中位には横方向の板ナデ調整、上半には入念な指押さえをそれぞれ認める。底部は遺存しない。体部最大径より2～3cm下位に完周する煤の付着を認め



第13図 SD01平・断面図 ( $S=1/500 \cdot 1/20$ ) 及び出土遺物 1 ( $S=1/4$ )



第14図 SD01出土遺物2 (S=1/4)

る。通常、畿内の叩き甕は右上がりであるが、13は左上がりとなり、丁寧な端部調整といった点からも畿内からの搬入品とは断言できない。15・16は丸底気味の小さな底部から直線的に開き、張りの弱い肩部から口縁部は強く屈曲する。外面調整に差異を認めるが、内面のヘラ削り調整は卓越し、上半まで及ぶ。俯瞰的には正円形をなさず、歪な形状を呈する。17・18は矮小化した底部から紡錘状の体部を経て、口縁部が短く直立しない直線的に外傾する。肩部の張りではなく、胴部最大径は中位よりわずかに上方に位置する。15・16と同様に歪な形状を呈し、上面観は円形をなさず、口縁端部も波打つ。外面にはヘラミガキを施し、17は口縁部まで及ぶ。19は安定した平底形態を呈する底部片である。外面及び底面には入念なヘラミガキ、内面にはヘラ削り調整を認める。胎土はSD01から出土した弥生土器のなかでは最も精良な素地が選択される。20は紡錘状の体部から口縁部は強く屈曲し、短く外反する。底部は突出した平底形態を呈するが、小さく矮小化する。内面のヘラ削りないし板ナゲ調整が卓越し、口縁部付近まで及ぶ。胎土中には多量の石英・長石を含有し、焼成も悪い。21は底部片である。壺である可能性が高い。

い。

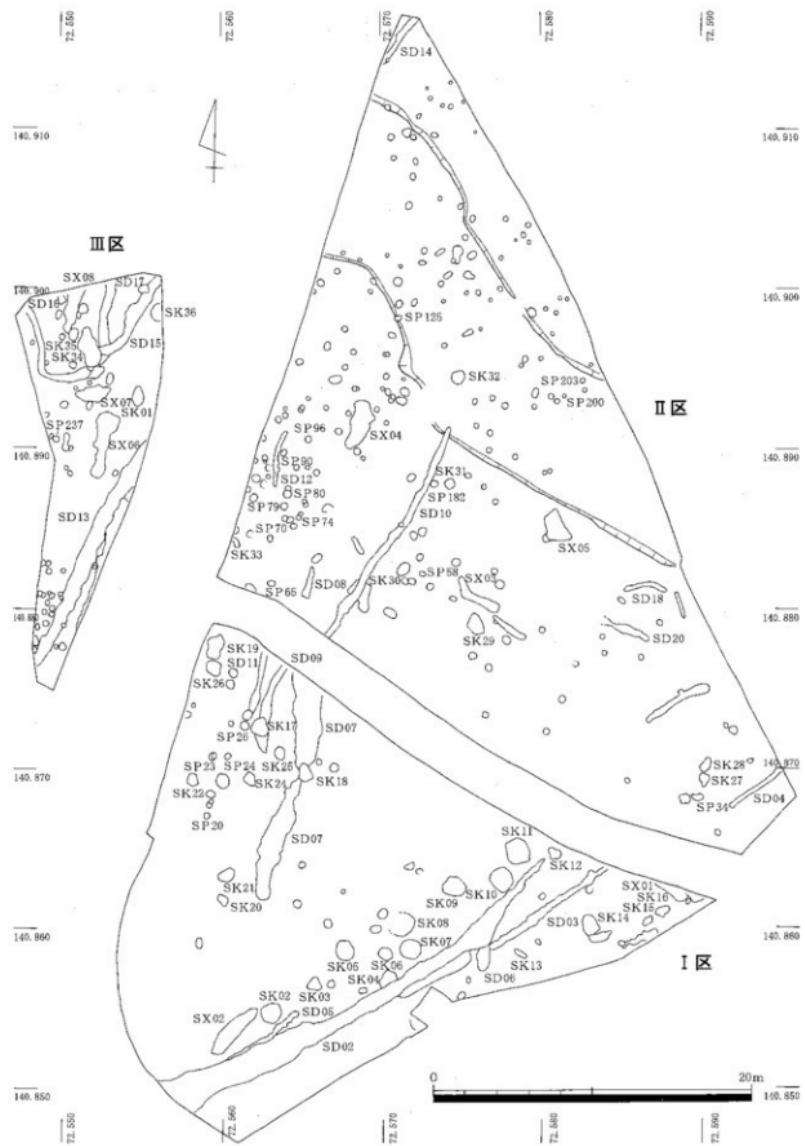
以上、S D01出土遺物は小型鉢が一定量の組成を占め、かつその形態も突出気味の平底形態を留める。同様に壺の底部も平底形態を呈し、口縁端部を拡張する個体は確認できない。さらに直口壺Cの系譜を引く広口壺Eの存在を考慮すると、後期後半の古段階に位置付けることができ、大久保編年では下川津I式に相当すると考える(大久保1990)。なお、下川津B類土器は一切確認できず、結晶片岩の含有を認める胎土も存在しない。一方、9・15~18は歪な形態を呈する上面觀や粘土繊維目が明瞭に遺存する稚拙な製作技術という特徴を有し、堅縁に焼き締まる焼成やにぶい赤褐色を呈する色調、胎土といった点においても共通する。胎土・色調・焼成に加え、頸部付近までヘラ削り調整が及ぶ特徴から12も共通性を認める。積極的に在地產土器と評価することはできないが、ここではその特徴のみを指摘しておきたい。また、13は典型的な畿内の叩き壺(五様式壺)とは異なるため直接的な搬入品とは判断できない。しかし、前記した特徴的な胎土の一群とは明らかに異なる精良な胎土が選択されており、畿内五様式壺の影響を受けた地域からの搬入品と理解したい。

### 3. 中世

大山遺跡で検出した大多数の遺構は当該期に属する(第15図)。検出面は基本層序第Ⅲ層除去後に確認した基本層序第Ⅰ層ないし第Ⅱ層上面と考えていたが、その後の再検討の結果、Ⅲ区では基本層序第Ⅱ層上面と斜面地に堆積した基本層序第Ⅳ層上面の2面に遺構検出面が存在する蓋然性が高いことが判明した。大多数の遺構はおむね13世紀前葉～中葉に属し、五輪塔を伴う可能性が高い土坑墓(S K01)は15世紀中葉～16世紀代の所産と考え、掘り込み面を同じくするS X08も後者の時期に該当する。大山遺跡が所在する鶴羽山(寺尾山)最頂部には寺尾庵寺と呼ばれる中世山岳寺院が存在し、寺尾山周辺は「寺尾千軒」と称される。第4章第4節において大山遺跡周辺の状況について検討するが、五輪塔・層塔・宝塔といった石造物や中世墓の可能性のある遺跡、中世に属する金銅仏の出土といった寺に関連した内容を濃厚に認めるエリアであり、土葬墓であるS K01とそれに伴う五輪塔の存在は意義深い。

また、大山遺跡は13世紀前葉～中葉に最盛期を迎えて、検出遺構数や出土遺物量は群を抜く。検出遺構は柱穴・土坑・溝状遺構が主体を占め、掘立柱建物は復元できないが、柱穴数は200基を上回る。出土遺物の特徴として瓦器碗の多寡が指摘でき(第4章第2節)、一部には香川県では検出例が限られる東海系山茶碗の出土も認める。遺跡が所在する鶴羽は15世紀中葉の兵庫北関での入船に対する關稅賦課の記録である『兵庫北關入船納帳』に記載された「鶴箸」港に該当し(林屋編1981)、他地域からの搬入品を多く認めるといった現象は港湾都市としての性格を反映する可能性も想起することができる。少量ではあるが、一定量の組成を占める土師質土器土錘も注目すべき遺物である。形状・規模(重量)にばらつきを認め、網の規模や方法に起因した状況を示す。専業的な在り方を示すとは考えないが、大山遺跡の集落の一側面を窺わせるものとして注目できる。

以下、柱穴・土坑墓・土坑・溝状遺構・不明遺構・包含層の順に従い、遺構・遺物の内容について記述する。なお、提示に際しては、13世紀前葉～中葉、15世紀中葉～16世紀代に属する遺構・遺物を一括して紹介し、可能な限り各遺構の最後に所属時期を明記する。



第15図 大山遺跡中世遺構分布図 (S = 1/300)

### 柱穴（第16・17図）

掘立柱建物の復元は困難であり、ここでは図化可能な遺物が出土した柱穴を中心に報告する。なお、柱穴規模が小さいため、提示した断面図に土層堆積状況は明記できないことをお断りしておきたい。

S P 20 I区グリットB 6で検出した柱穴である。22はS P 20から出土した土師質土器小皿である。口縁部は回転ナデ調整後に指押さえ、底面には回転ヘラ切り痕を認める。13世紀前葉前後の所産か（土師質土器に関しては、器種や所属時期を含めて、佐藤2000a・片桐1994を参考とした）。

S P 23 I区グリットB 5で検出した柱穴である。23～26はS P 23出土遺物である。23は土師質土器小皿である。24・25は土師質土器坏である。24は口径13.8cmを測り、口縁部は比較的短く直線的に開く。26は土師質土器足釜である。脚部上位に該当し、外面には体部との接合痕跡を示すナデ調整を認める。

以上、S P 23出土遺物は、土師質土器坏の器形や法量から12世紀後半～13世紀中葉に位置付けることができ、足釜の存在から13世紀以降の所産となる。脚部のみで正確な所属時期を特定することは困難であるが、大山遺跡から出土した足釜口縁部はI区包含層出土181のみに留まる。口縁部は小型化し、三角形の断面形状を呈し、14世紀末葉～16世紀前半に位置付けられる（佐藤1995）。しかし、坏の存在を重視し、S P 23の所属時期を13世紀中葉に位置付けておきたい。

S P 24 I区グリットC 5で検出した柱穴である。27・28はS P 24出土遺物である。27は土師質土器小皿である。口縁部は短く外反する。28は土師質土器坏である。口径12.1cm、器高3.3cmを測り、口縁部は直線的に外傾する。底面には回転ヘラ切り痕・板状圧痕を認める。以上、S P 24出土遺物は口縁部が矮小化した小皿や小型化した坏の存在から、13世紀中葉前後に位置付けておきたい。

S P 26 I区グリットC 5で検出した柱穴である。29は土師質土器碗である。高台径は6.9cmを測る。吉備系土師器碗の可能性も残る（山本1993、以下吉備系土師器碗に関しては同書に依拠する）。

S P 34 II区グリットE 6で検出した柱穴である。30はS P 34から出土した土師質土器鍋である。口縁部は「く」字形に屈曲し、端部下端を横方向に小さく引き出す。内面には顕著な板ナデ調整を認め、胎土中には少量の角閃石を含有するといった特徴から、吉備系土師器鍋の可能性が高いと考える。山本編年III-1期頃の所産か（山本1998、以下吉備系土師器鍋に関しては同書に依拠する）。

S P 58 II区グリットD 4で検出した柱穴である。31はS P 58から出土した土師質土器碗である。口径14.6cmを測り、口縁部下1.5cm前後が最も肥厚し、端部は先細る。正確な所属時期は明らかではない。

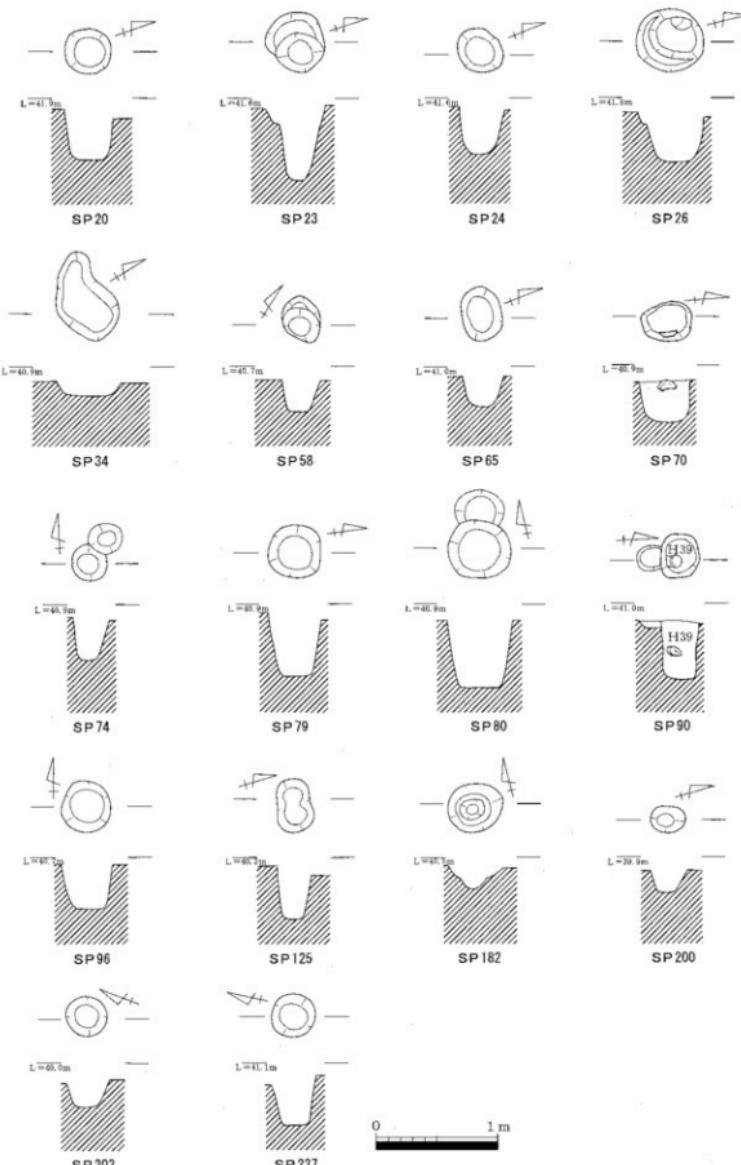
S P 65 II区グリットC 4で検出した柱穴である。32・33はS P 65出土遺物である。32は土師質土器小皿である。口縁部は短く矮小化し、底面には回転ヘラ切り調整に伴う粘土塊が付着する。胎土中には多量の雲母粒を含み、大山遺跡から出土した土師質土器のなかでは異質な存在である。33は土師質土器鍋ないし甕である。口縁部は「く」字形に屈曲し、内面には明瞭な稜線を認める。以上、S P 65出土遺物は矮小化した土師質土器小皿の存在から、13世紀中葉前後に位置付けておきたい。

S P 70 II区グリットC 4で検出した柱穴である。

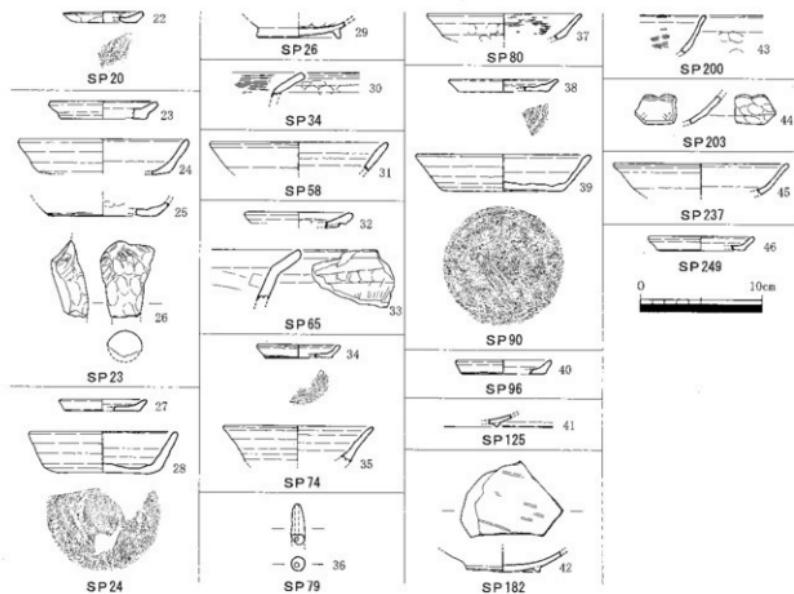
S P 74 II区グリットC 4で検出した柱穴である。34は土師質土器小皿である。口径6.8cmを測り、口縁部は外反気味に開く。35は土師質土器坏である。口径12.2cmに復元できる。口縁部は比較的長く外反し、端部に向けて漸次先細る。以上、出土遺物の年代観はおおむね13世紀前半に位置付けておきたい。

S P 79 II区グリットC 4で検出した柱穴である。36はS P 79から出土した管状土錐である。

S P 80 II区グリットC 4で検出した柱穴である。37は和泉型瓦器碗である。細片であるため、傾き・径復元に問題を残すが、外面にヘラミガキは確認できない。尾上編年III-3期の所産となる（尾上1983



第16図 大山遺跡柱穴平・断面図 ( $S = 1/40$ )



第17図 大山遺跡柱穴出土遺物 (S=1/4)

・尾上・森島・近江1995・森島1992、以下瓦器柾の記載に関しては同書に依拠する)。

S P 90 II区グリットC 4で検出した柱穴である。38は土師質土器小皿である。口径9 cmを測り、口縁部は短く外反する。39は土師質土器壺である。口径14.4 cmを測り、口縁部は大きく開く。底面には回転ヘラ切り痕→板状圧痕を認める。以上、S P 90出土遺物は13世紀前葉に位置付けておきたい。

S P 96 II区グリットC 3で検出した柱穴である。40はS P 96から出土した土師質土器小皿である。口径7.8 cmを測り、口縁部は短く外反する。13世紀前葉前後の所産か。

S P 125 II区グリットD 3で検出した柱穴である。41は瓦器柾である。高台断面形状は三角形を呈し、矮小化が著しい。調整は不明であるが、おおむね13世紀前葉に位置付けられる。

S P 182 II区グリットD 4で検出した柱穴である。42は瓦器柾である。見込みには平行線状ヘラミガキを認め、底部は高台疊付より下方へ突出する。12世紀末~13世紀前葉前後の所産と考えたい。

S P 200 II区グリットE 3で検出した柱穴である。43は和泉型瓦器柾である。内面にはヘラミガキを認めるが、外面上にはヘラミガキは確認できない。尾上編年III-2ないしIII-3期の所産であろう。

S P 203 II区グリットE 3で検出した柱穴である。44はS P 203から出土した瓦器柾である。口縁部にはヘラミガキ、見込みには連結輪状ヘラミガキを認め、外面上には指押さえのみ確認できる。

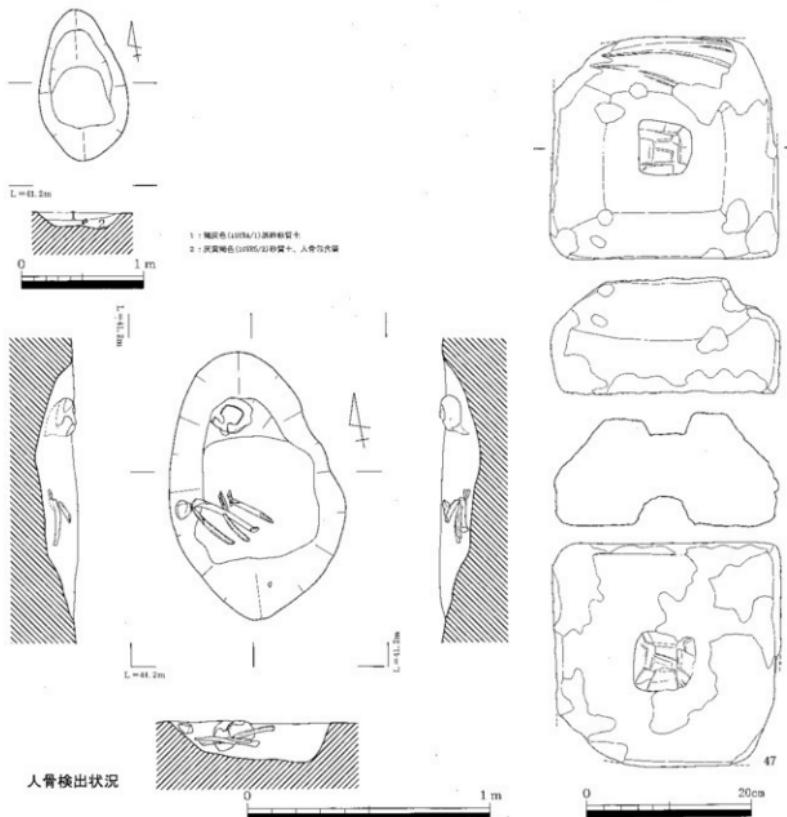
S P 237 III区グリットA 3で検出した柱穴である。45はS P 237から出土した土師質土器柾である。口径14.4 cmを測る。正確な所属時期は不明である。

S P 249 III区グリットB 3で検出した柱穴である。46はS P 249から出土した土師質土器小皿である。口径8.7 cmを測り、口縁部は短く外反する。

## 土坑墓

### S K01 (第18図)

Ⅲ区グリットB 3で検出した土坑墓である。平面形は卵形を呈し、長軸長1.1m、短軸幅0.7m、遺構検出面からの深度は0.16mを測り、主軸方位をほぼ南北にとる。断面形状は横断面が箱形、縦断面が浅い舟底状を呈する。埋土は下層に灰黄褐色砂質土、上層に褐灰色混沙粘質土がそれぞれ堆積し、下層埋土を中心として人骨を検出した。頭骨は北側に位置し、傾斜する掘方形状に沿ってわずかに傾く。掘方中央南西部からは左右一対の大脚骨及び胫骨が重なる状況で検出し、左が上位に位置する。棺痕跡や鉄釘は確認できないため、土葬墓であると判断でき、人骨の検出状況から埋葬頭位を北に向け、西に向いた屈葬である可能性が高い。北枕西横臥屈葬は西打遣跡でも確認でき（山下・信里編2002）、讃岐地域では比較的多く認める埋葬頭位ないし埋葬姿勢である。



第18図 S K01平・断面図、人骨検出状況 ( $S = 1/40 \cdot 1/20$ ) 及び出土遺物 ( $S = 1/6$ )

S K01埋土から副葬品は確認できないが、直上に堆積した包含層（第10図下段6・7層）から五輪塔笠部（火輪）が出土している（報文番号47）。下辺長27~28cm、上辺長15cmを測り、底面には水平面を有し、わずかに軒反りを認める。軒隅は高さ6cm前後を測り、屋根の勾配は緩やかである。上下端面には水輪ないし風輪との組み合わせに伴う方形の削り込み（だぼ穴）を有する。削り込みには各辺から幅4cm前後を測るノミ状工具の痕跡を認める。石材は白色シルトを主体とし、黒色ガラス・軽石・ざくろ石等を一定量含有する火山産の角礫凝灰岩である。その石切場はさぬき市大川富田東に所在する西教寺奥の院に想定されている（柏・松田2002）。五輪塔笠部は15世紀中葉～16世紀代の所産と考えられる（註2）。

なお、第10図下段に示したⅢ区西壁面20・21層は調査時には認識できなかったが、骨片を有し、土坑状の掘方を認める。S K01とは3~4mと近接した位置関係を呈し、同様構造、同時期の土葬墓である可能性が極めて高い。その想定が正しければ、20・21層は遺構検出面である基本層序第Ⅱ層直上に堆積した第Ⅳ層を掘り込み面としており、大山遺跡で検出した大多数の遺構が13世紀前葉前後に位置付けられるという年代差も解消することができる。また、第Ⅳ層直上に堆積した第10図下段6・7層が五輪塔笠部出土層位となり、S K01ないし20・21層の所属時期以降の形成年代を付与することができる。

#### 土坑

土坑は計45基確認したが、遺物を伴うものは少なく、基本層序第Ⅱ層の性格上、しみや含有ブロックを遺構として認識したものを含む可能性が高い。しかし、調査時の判断に従い、本報告では土坑として報告する。

#### S K02~12（第19・20図）

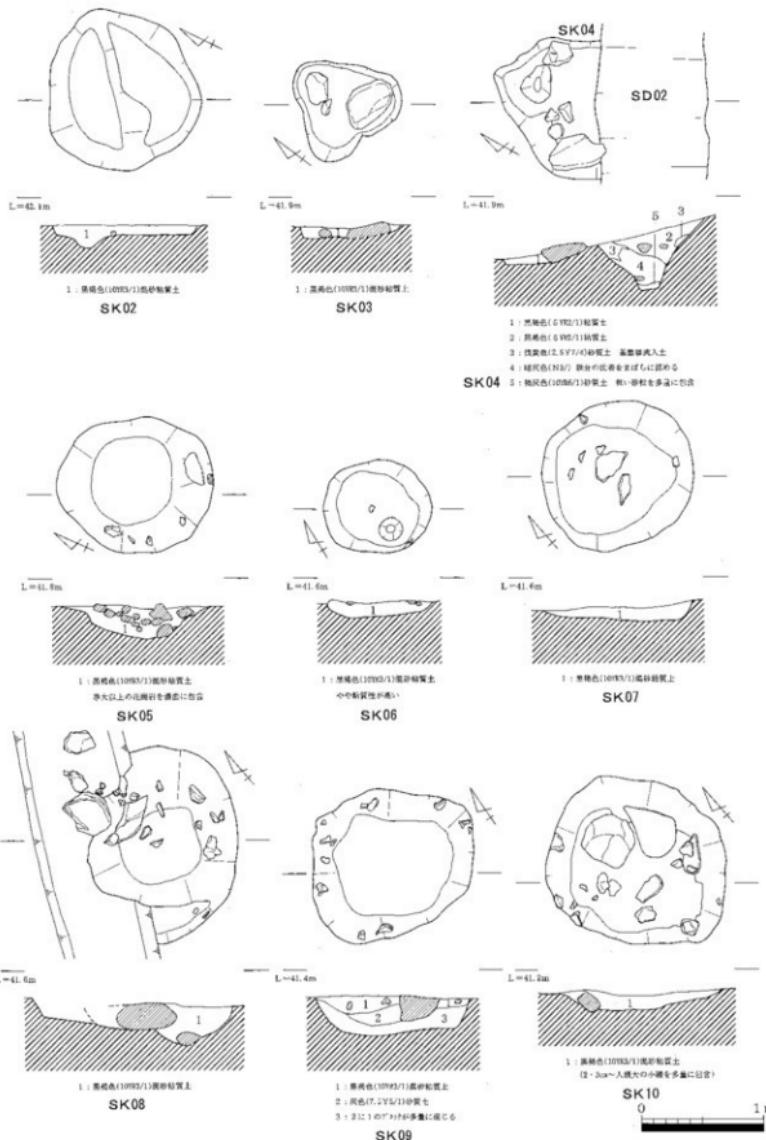
I区東部において不規則ながらほぼ一直線上に並ぶ土坑群である。遺物の出土が確認できないため、ここでは一括した。個別の記述は避け、群として捉えた上で報告する。平面形は円形指向（S K02・05~08）、隅丸方形（S K09~11）、不整形（S K03・04・12）に大別できる。埋土は黒褐色ないし灰褐色混砂粘質土の單一層で構成されるものが大多数を占め、遺構検出面からの深度も0.1~0.2m前後と極めて浅い。断面形状は逆台形ないし浅い舟底状を呈する。S K09のみ検出面からの深度が0.3mを越え、埋土は上層に黒褐色混砂粘質土、中層に灰色砂質土、下層に中層埋土をベースとし、上層埋土ブロックを包含する層位を認める。上層埋土は他の土坑に共通する。

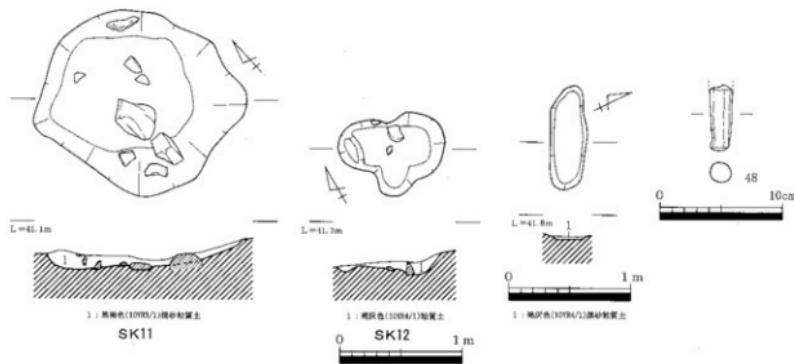
出土遺物は確認できず、その性格についても不明な点が多い。類例の確認は行えていない。敢えて所属時期について言及すると、遺構検出面が基本層序第Ⅱ層となり、後述するS D02より西側に位置することから、13世紀前葉を中心とした時期に位置付けておきたい。

#### S K13（第21図）

I区東端部、グリットD 7で検出した土坑である。検出面は基本層序第Ⅰ層となる。平面形は長楕円形を呈し、長軸長0.9m、短軸幅0.3mを測る。遺構検出面からの深度は極めて浅く、褐灰色混砂粘質土の單一埋土で構成される。48はS K13から出土した土師質土器足釜脚端部である。断面形状は円形を呈する。

以上、S K13は正確な所属時期は不明であるが、足釜の存在から13世紀以降の所産であることは明白であり、層序の堆積状況やS K01の所属時期から、15世紀中葉～16世紀代の所産と理解しておきたい。





第20図 SK11・12平・断面図 (S = 1/40)

第21図 SK13平・断面図 (S = 1/40)  
及び出土遺物 (S = 1/4)

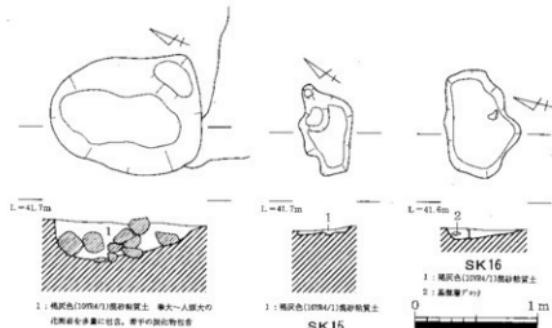
#### S K14~16 (第22図)

I区北東隅、グリットE 6で検出した土坑である。SK14は不整形の平面プランを呈し、南北長1.2m、東西長0.9mを測る。断面形状は北側の立ち上がりが強く、南側が緩やかな形状を示し、検出面からの深度は0.3mを測る。埋土は拳大から人頭大の花崗岩を多量に含有する褐灰色混砂粘質土の単層で構成される。SK15・16は歪な平面形を呈し、SK15は直軸長0.8m、短軸幅0.4m、SK16は長軸長0.9m、短軸幅0.6mを測る。検出面からの深度も極めて浅く、埋土は褐灰色混砂粘質土の単層で構成される。前述したSK13に酷似した内容を示し、その検出位置も極めて近い。

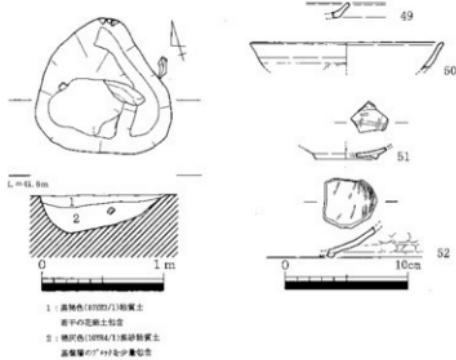
検出面は基本層序第I層となり、ここでは15世紀中葉～16世紀代の所産と理解したい。

#### S K17 (第23図)

I区北西隅、グリットC 5で検出した土坑である。南北長・東西長1.1mを測り、隅丸三角形の平面プランを呈する。断面形状は西側の立ち上がりがやや急な舟底状を呈し、東側には幅の狭いテラス状の平坦面を有する。埋土は下層に基本層序第II層のブロックを少量包含する褐灰色混砂粘質土、上層に黒褐色粘質土がそれぞれ堆積する。



第22図 SK14~16平・断面図 (S = 1/40)



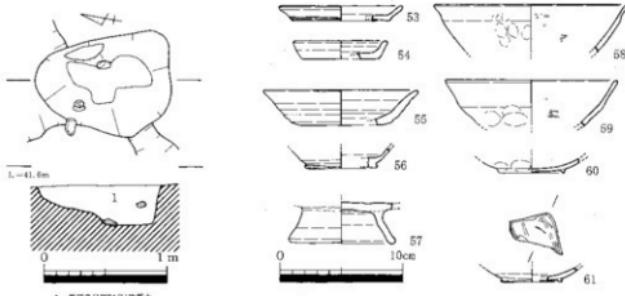
第23図 SK 17平・断面図 (S = 1/40)  
及び出土遺物 (S = 1/4)

#### S K 18 (第24図)

I区北西隅、グリットC 6で検出した土坑である。SD 07に後出する重複関係を有するが、SD 07が途切れる箇所に位置し、SD 07の一部である可能性も否定できない。それを示すように、出土遺物が土坑のなかでは突出した出土量を示す。平面形は不整形を呈し、南北長1.1m、東西長0.9mを測る。断面形状は南側が直に立ち上がり、北側はスロープ状を呈し、埋土は褐灰色砂質土の單一層で構成される。

53~61はSK 18出土遺物である。53~54は土師質土器小皿である。53は口径10cmを測り、口縁部は長く外反する。54は口径7.8cmを測り、口縁部は比較的長く直立する。55~56は土師質土器壺である。55は口径12.6cmを測り、口縁部は中位が最も肥厚し、端部手前で強く外反する。56は底部厚が極めて厚く、0.8cm前後を測る。57は台付壺である。台部の高さは2.6cmを測り、残存部位による限り壺部に立ち上がりは確認できない。底面には回転ヘラ切り痕→板状圧痕を認める。58~61は瓦器碗である。器表面の摩滅が著しいが、いずれも外面にはヘラミガキは確認できない。口縁部内面にはヘラミガキを認め、61の見込みには平行線状ヘラミガキを施す。高台断面形状は三角形を呈し、矮小化が顕著である。

以上、SK 18出土遺物は瓦器碗がおおむね13世紀前葉に位置付けられ、法量の小型化がわずかに進行する土師質土器壺(55~56)の存在から、13世紀第2四半期の所産と理解したい。



第24図 SK 18平・断面図 (S = 1/40) 及び出土遺物 (S = 1/4)

49~52はSK 17出土遺物である。49は土師質土器小皿である。口縁部は比較的長く伸び、小さく外反する。50~52は瓦器碗である。50は口縁端部外面に強い回転ナデ調整を加え、体部外面には指押さえのみ確認できる。和泉型瓦器碗。51~52は矮小化した断面三角形の高台を呈し、見込みに平行線状ヘラミガキを認める。いずれも外面調整は指押さえのみで、ヘラミガキは確認できない。

以上、SK 17出土遺物は瓦器碗が尾上編年III~III期の所産となり、13世紀前葉の年代観を付与することができ、造構の所属時期も13世紀前葉に求められる。

### S K 19 (第25図)

I 区北西隅、グリット B 5 で検出した土坑である。平面形は歪ながら長方形を呈し、南北長 1.6m、東西長 1m 前後を測る。逆台形の断面形状を呈し、検出面からの深度は 0.3m を測る。埋土は下層に灰黄褐色混砂粘質土、上層に黒褐色混砂粘質土がそれぞれ堆積し、上層埋土を中心として拳大～人頭大の花崗岩を一定量包含する。その検出状況に規則性は看取できず、遺構検出面である基本層序第 II 層を構成する花崗岩と想定できる。遺構の性格を反映すると考えるが、結論は導き出せていない。また、西側掘方に沿って、流入したと考えられる褐灰色混砂粘質土を認める（3 層）。

以上、S K 19 は出土遺物は確認できず、正確な所属時期は不明である。周辺遺構の状況から 13 世紀前葉ないし 15 世紀中葉～16 世紀代の所産となる蓋然性が高く、ここでは 13 世紀前葉前後の所産と理解したい。

### S K 20～26 (第26図)

I 区西部を中心に確認した土坑である。平面形は円形を指向し、径 0.6m 前後、検出面からの深度は 0.2m 前後を測る。おおむね舟底状の断面形状を呈し、褐灰色混砂粘質土の単一層で構成される。S K 02～12 に酷似した内容を示しており、一括して提示した。遺物の出土は確認できず、検出面である基本層序第 II 層を構成するブロック土を遺構として認識した可能性も否定できないが、調査時の判断に従い、土坑として報告した。

以上、S K 20～26 の正確な所属時期は不明であるが、周辺遺構の状況や埋土の特徴から、13 世紀前葉を中心とした時期に位置付けておきたい。

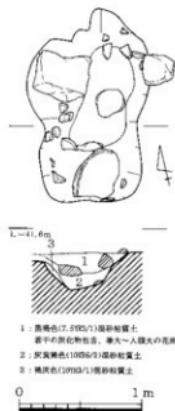
### S K 27・28 (第27図)

II 区南東隅、グリット F 6 で検出した土坑である。2 基の土坑が直線的に並び、埋土の特徴や出土遺物が確認できない点から一括して報告する。S K 27 は一边 0.5m の隅丸方形の平面プランを呈し、北側のみ舌状に張り出す。浅い U 字形の断面形状を呈し、埋土は下層に灰褐色砂質土、上層に灰褐色混砂粘質土がそれぞれ堆積する。底面に径 0.2m の扁平な石材を検出したが、機能は不明である。S K 28 は不整形の平面プランを呈し、長軸長 0.9m、短軸幅 0.6m を測る。埋土は下層に黒褐色粘質土、上層に褐灰色混砂粘質土が堆積し、下層埋土のみ箱形の断面形状となり、上層埋土はそれを超過した浅い皿状を呈する。北側には小さなテラス面を有し、径 0.1m の柱穴を認める。

以上、S K 27・28 は出土遺物が確認できず、正確な所属時期は不明であるが、遺構検出面が基本層序第 II 層となり、前述した S K 02～12 の延長線上に位置することから、13 世紀前葉を中心とした時期と考えておきたい。

### S K 29 (第28図)

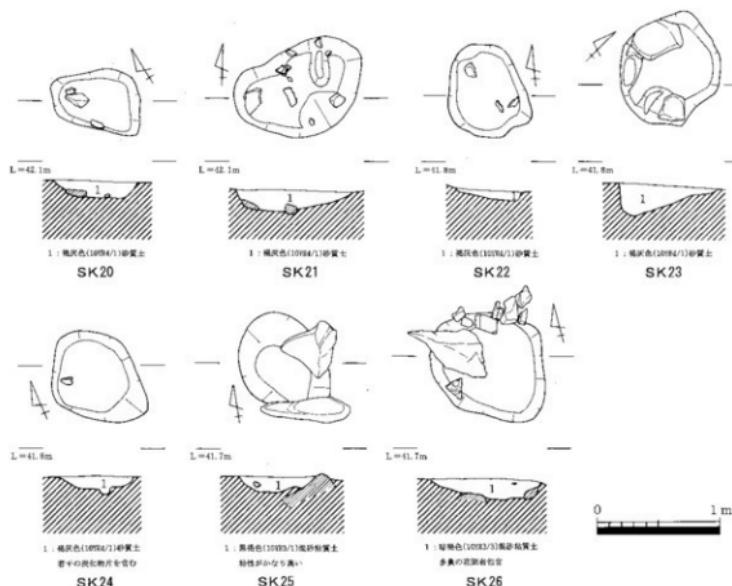
II 区中央部南寄り、グリット D 5 で検出した土坑である。不整形の平面プランを呈し、長軸長 1.3m、短軸幅 0.9m を測る。埋土は 3 層に大別でき、下層埋土は底面で検出した落ち込みに堆積する（黄灰色混砂粘質土）。中層には褐灰色混砂粘質土、上層には黒褐色混砂粘質土がそれぞれ堆積し、中層埋土は上層



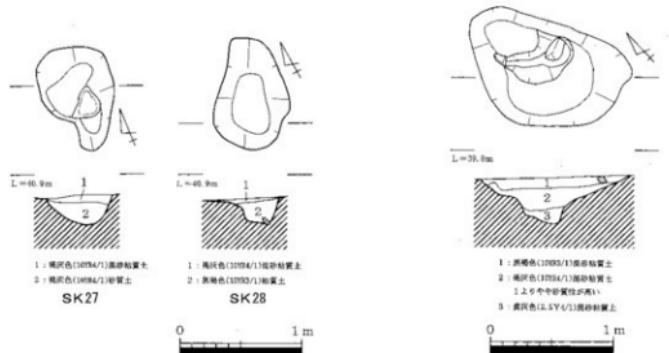
第25図 S K 19 平・断面図  
(S = 1/40)

より砂質性が高い。

以上、SK29は出土遺物が確認できず、その所属時期は明らかではないが、周辺遺構の状況や遺構埋土から、おおむね13世紀前葉を中心とした時期の所産と理解したい。



第26図 SK 20~26平・断面図 (S = 1/40)



第27図 SK 27・28平・断面図 (S = 1/40)

第28図 SK 29平・断面図 (S = 1/40)

### S K 30 (第29図)

II区中央部南寄り、グリットD 4で検出した土坑である。卵形の平面形を呈し、長軸長0.8m、短軸幅0.65mを測る。箱形ないし逆台形状の断面形を呈し、埋土は下層に黒褐色混砂粘質土、にぶい黄褐色砂質土を介在して、上層に褐灰色混砂粘質土が堆積する。

以上、S K30は出土遺物が確認できず、正確な所属時期は不明であるが、底面に水平面を認める点から、墓である可能性も払拭できない。前述したS K01が15世紀中葉～16世紀代に位置付けられる点を考慮すると、周辺遺構の状況から13世紀前葉の所産であると即断することはできず、ここでは中世段階の所産と理解しておきたい。

### S K 31 (第30図)

II区中央、グリットD 4で検出した土坑である。一辺0.5mの隅丸方形の平面プランを呈し、検出面からの深度は0.1mを測る。逆台形状の断面形状を呈し、基本層序第II層のブロック土を多量に含有する黒褐色混砂粘質土を埋土とする。

62・66はS K31出土遺物である。62・63は土師質土器小皿である。62は口径7.7cmを測り、口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面ほぼ全面に煤の付着を認め、灯明具としての使用が想定できる。63は口径8.4cmを測り、口縁部は小さく外反する。64・65は土師質土器碗とした。64の内面にはこて当ての痕跡を認め。66は和泉型瓦器碗である。器表面の摩滅が激しく、内面のヘラミガキは消失気味である。外面にはヘラミガキは確認できない。尾上編年Ⅲ-3期。

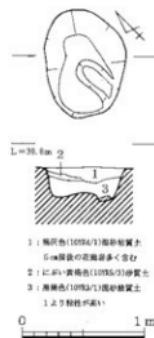
以上、S K31は出土遺物の年代観より、13世紀前葉に位置付けられる。

### S K 32 (第31図)

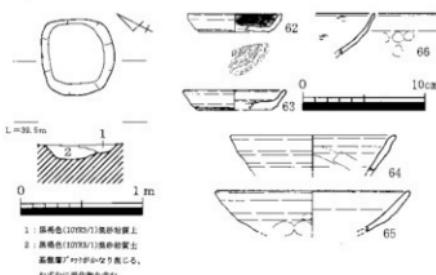
II区中央北寄り、グリットD 3で検出した土坑である。西側は攪乱により失われる。径0.8m前後の正円形の平面プランを呈し、浅い舟底状の断面形状を示す。埋土は褐灰色混砂粘質土の單一層で構成され、炭化物を少量包含する。

67・68はS K32出土遺物である。67は土師質土器杯である。底径6.2cmを測り、突出した底部形態を呈する。底部外縁には底面の回転ヘラ切りに連続するヘラ切り痕跡を認める。68は瓦器皿である。器表面の摩滅は著しく、内面ヘラミガキの有無は確認できない。

以上、S K32は出土遺物の年代観から、おおむね13世紀前葉に位置付けておきたい。



第29図 S K 30平・断面図 (S = 1/40)



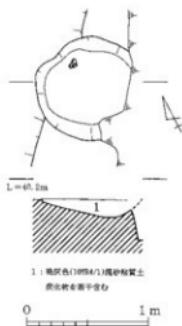
第30図 S K 31平・断面図 (S = 1/40)  
及び出土遺物 (S = 1/4)

### S K 33 (第32図)

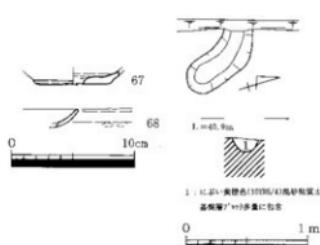
II区南西隅、グリットC 4で検出した土坑である。3基の柱穴が重複する可能性も残るが、調査時の判断に従い、土坑として報告する。西縁は町道下へ連続するため、全容は明らかではないが、長軸長0.6m、短軸幅0.3mを測る。断面形状は浅いU字形を呈し、基本層序第II層のブロック土を包含するぶい黄橙色混砂粘質土の単一層で構成される。

69~71はS K 33出土遺物である。69・70は土師質土器底底部片である。前者は底径8.7cmを測り、口縁部境は明瞭に屈曲する。70は見込みがわずかに盛り上がり、口縁部との境が極めて不明瞭な形態を呈する。底面には回転ヘラ切りに後出する板状圧痕を認める。71は管状土錐である。

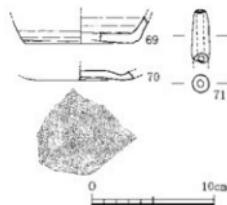
以上、S K 33は出土遺物の年代観から、13世紀前葉を中心とした時期の所産と理解しておきたい。



第31図 S K 32平・断面図 ( $S = 1/40$ ) 及び  
出土遺物 ( $S = 1/4$ )



1 : 地盤色(0.004/1) 黄砂粘質土  
底面被覆層厚1cm



第32図 S K 33平・断面図 ( $S = 1/40$ ) 及び  
出土遺物 ( $S = 1/4$ )

### S K 34 (第33図)

III区北寄り、グリットB 3で検出した土坑である。長側辺の中央部が窪み、雪達磨形の平面プランを呈し、長軸長2m、短軸幅1.2mを測る。舟底状の断面形状を呈し、埋土は灰黄褐色混砂粘質土の互層で構成される。

72~78はS K 34出土遺物である。72は瓦器皿である。器表面の摩滅は著しく、内面ヘラミガキの有無は確認できない。73は土師質土器輪である。口径12.2cmを測り、口縁部は直線的に外傾し、縁部は小さく肥厚する。外面調整は回転ナデ調整によって生じた凹凸の凸部に回転ヘラミガキを施す。吉備系土師器輪の可能性も考慮する必要がある。74・75は瓦器輪である。74の口縁部外面にはヘラミガキは確認できない。75は高台の矮小化が著しく、見込みには平行線状ヘラミガキを認める。尾上編年III-3期の所産である。76は須恵器輪体部片である。外面には回転ナデ調整を認め、遺存する限り回転ヘラミガキは確認できない。西村窯産須恵器輪の可能性が高いと考える（佐藤2000 b、以下西村窯産須恵器輪に関しては同書に依拠する）。77・78は中国産青磁碗である。77は口縁部が輪花をなし、口縁縫部下及び見込み周縁にはそれぞれ沈線を認める。横田・森田分類龍泉窯系青磁碗I-4 b類に該当する（横田・森田1978、以下中国産磁器に関しては同書に依拠する）。78は底部片である。底部は肉厚で、外面は露胎となる。見込み周縁には沈線を認めるが、中央部に印花は確認できない。

以上、S K 34は出土遺物の年代観により、13世紀前葉に位置付けられる。

### S K 35 (第34図)

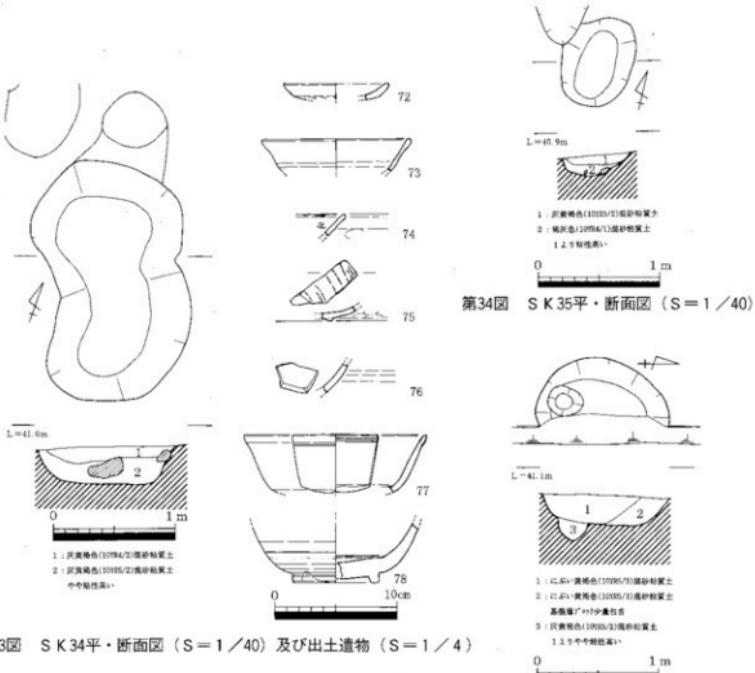
Ⅲ区北寄り、グリットB 3で検出した土坑である。前述したS K34に近接し、S X08に先行する重複関係を有する。椭円形の平面形を呈し、長軸幅0.8m、短軸幅0.6m、検出面からの深度は0.2mを測る。埋土は下層に褐灰色混砂粘質土、上層に灰黄褐色混砂粘質土が堆積し、下層は上層より粘性が高い。

以上、S K35は出土遺物が確認できず、正確な所属時期は不明であるが、S X08に先行する重複関係や周辺遺構の状況から、13世紀前葉を中心とした時期に位置付けておきたい。

### S K 36 (第35図)

Ⅲ区北東隅、グリットB 3で検出した土坑である。東半は町道下へ延長するため全容は不明であるが、検出した限りでは円形を呈し、南北長1.1m、東西検出長0.6mを測る。検出面からの深度は0.25mを測り、にぶい黄褐色混砂粘質土で構成され、基本層序第II層ブロックの有無により細分できる。土坑底面には柱穴を認めるが、S K36に伴うものか、先行する柱穴かは判断できない。

以上、S K36は出土遺物による年代決定は困難であるが、基盤層ブロックを含有する点を重視すると、南接する土坑墓（S K01）との関連も考慮しなければならない。ここでは、13世紀前葉ないし15世紀中葉～16世紀代のいずれかの時期の所産と理解したい。



第33図 S K 34平・断面図 ( $S = 1/40$ ) 及び出土遺物 ( $S = 1/4$ )

第35図 S K 35平・断面図 ( $S = 1/40$ )

## 溝状遺構

### S D02 (第36図)

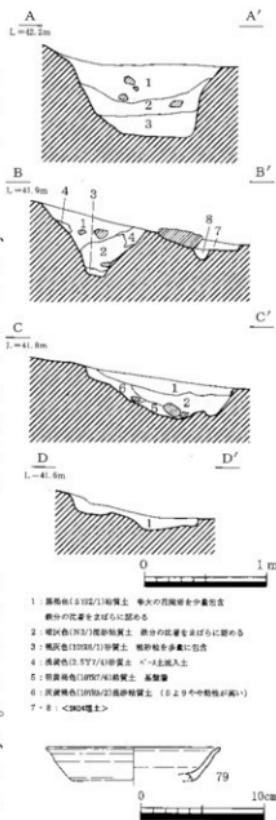
I区東部で検出した溝状遺構である。主軸方位はN63°Eを測り、北端部手前で小さく屈曲する。検出面は基本層序第I層と第II層の境となり、大山神社に連続する尾根とほぼ主軸方位を揃えることから、尾根の縁部に沿って開削された溝状遺構と判断できる。検出長28m、検出最大幅2.2m、平均溝幅1.2m前後を測る。検出面からの深度はI区南端部で1.2m、溝中央部で0.9mを数え、現地形である棚田化に伴う削平によりI区内で消失する。断面形状はA-A'セクションでは逆台形、B-B'ではV字状を呈する。埋土は3層に大別でき、S D02南部では下層に褐灰色砂質土(3層)、中層に暗灰色混砂粘質土(2層)、上層に拳大の花崗岩を少量包含する黒褐色粘質土がそれぞれ堆積する。地形の低い方=北側に下るに従い、下層は確認できず(C-C'セクション)、北端付近では上層埋土のみとなる(D-D'セクション)。下層埋土はある程度の流水を示すものと理解でき、上層埋土において漏水状態となり、最終的に埋没した状況が復元できる。

出土遺物は稀薄で、小袋1袋の出土に留まる。79はS D02から出土した土師質土器壺である。口径14.2cmを測り、口縁部は直線的に外傾し、端部のみ小さく外反する。提示した出土遺物の年代観はおむね13世紀前葉後年の所産となる。しかし、S D02以東の基本層序第I層上面において検出した遺構は15世紀中葉～16世紀代に位置付けられ、尾根の削平に伴う現地形の形成時期を示す。問題は尾根の縁部に沿って開削されたS D02の所属時期であるが、現地形の形成時期以前であることは疑いなく、周辺遺構や基本層序から、13世紀中葉以降、15世紀中葉～16世紀代に開削された溝状遺構と考えておきたい。

### S D03・04 (第37図)

S D03はI区北東隅、グリットE6、S D04はII区東端部、グリットF6で検出した溝状遺構である。主軸方位をN58°Eの同一線上に揃え、同一遺構であった可能性が極めて高い。南端部はS D02が屈曲する箇所に合致し、S D02に連続ないし関連した遺構であることが窺える。検出長はS D03が約9m、S D04が約3.8mを測り、平均溝幅はいずれも0.3m前後となる。検出面からの深度は0.1m前後を測り、断面形状はS D03が逆台形、S D04が半円形を呈する。埋土はS D03が褐灰色砂質土、S D04が灰黄褐色混砂粘質土となり、前者はS D02下層埋土に酷似する。

出土遺物は確認できないが、その検出位置はS D02に連続しており、13世紀中葉以降、15世紀中葉～16世紀代に開削された溝状遺構と考えておきたい。



第36図 S D02断面図 (S = 1/40)  
及び出土遺物 (S = 1/4)

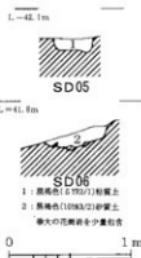


第37図 S D03・04  
断面図 (S = 1/40)

### S D05・06 (第38図)

S D05はI区南東隅、グリットC 7で検出した溝状遺構である。S D02に先行する重複関係を示すが、埋土を共有すると表現した方が妥当である。検出長は約5mを測り、主軸方位をN51°Eにとる。溝幅は0.3~0.4mを測り、検出面からの深度は浅い。箱形の断面形状を呈し、埋土はS D01上層埋土と同じく、黒褐色粘質土となる。出土遺物は確認できないが、S D02との関連性から、13世紀中葉以降、15世紀中葉~16世紀代に開削された溝状遺構と考えておきたい。

S D06はI区東部、グリットD 7で検出した溝状遺構である。S D02に先行する重複関係を示すが、埋土を共有すると表現した方が妥当である。検出長は約1.4mを測り、主軸方位をほぼ南北にとる。溝幅は0.8m前後、検出面からの深度は0.1mを測る。浅い皿状の断面形状を呈し、埋土はS D01上層埋土と同じく、黒褐色粘質土となる。出土遺物は確認できないが、S D02との関連性から、13世紀中葉以降、15世紀中葉~16世紀代に開削された溝状遺構と考えておきたい。



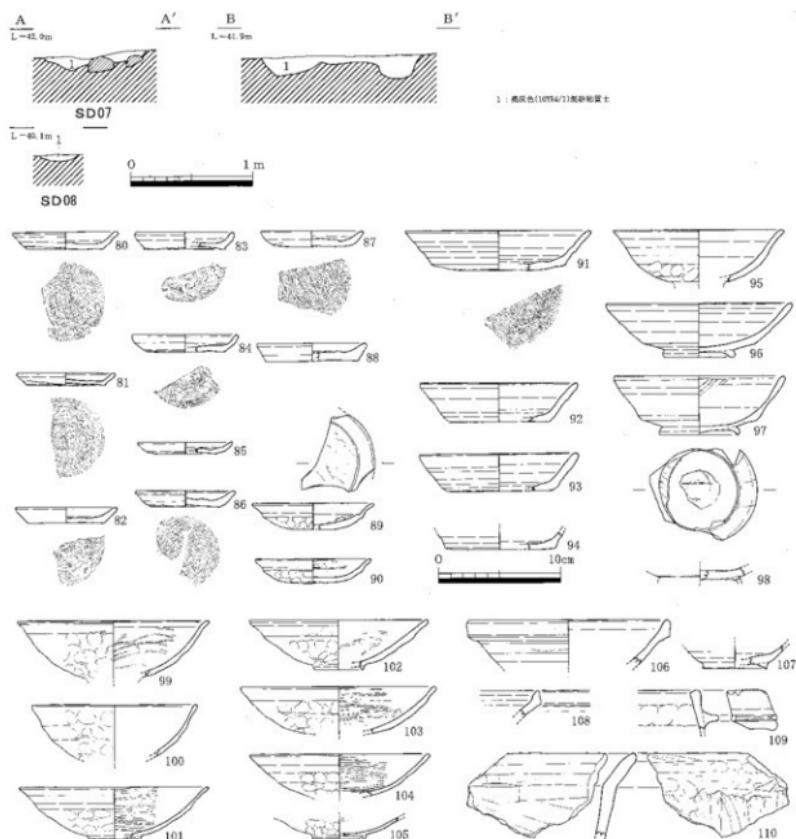
第38図 S D05・06  
断面図(S=1/40)

### S D07・08 (第39図)

S D07はI区中央西よりグリットC 5~6で検出した溝状遺構である。検出長約14mを測り、主軸方位をN10°Eにとる。検出最大幅1.8m、平均溝幅約1.4mを測る。検出面からの深度は浅く、皿状の断面形状を呈する。埋土は褐色混砂粘質土の単一層である。

80~110はS D07出土遺物である。80~88は土師質土器小皿である。器形は口縁部が直線的に外傾ないし小さく外反する80~82と底部が小さく突出し、内湾気味に立ち上がる83~86、底口縁部境が不明瞭な87、口縁部が短く、直線的に外傾する88に大別できる。口径は8cm代が主体を占め、85のみ7.8cmを測る。底部切り離しはいずれも回転ヘラ切り調整となり、回転糸切り調整は認められない。89~90は瓦器皿である。口縁部と底部境に明瞭な屈曲点を認め、底部外面には顕著な指押さえ、内面にはヘラミガキを施す。89の見込みには平行線状ヘラミガキも確認できる。91~94は土師質土器壺である。91は口径15.1cmを測り、口縁部は比較的長く延び、小さく外反する。92~93は口径13cm前後を測り、前者の口縁部にはロクロ成形によるアクセントを認め、口縁部はかすかに外反する。93は口縁部が直線的に外傾し、底径が92より大きいため、器高は総じて低くなる。底部にはいずれも回転ヘラ切り痕を認める。95~98は土師質土器碗である。95は腰部に丸味を有し、口縁部は明瞭に外反する。外面下半に指押さえを認め、比較的精良な胎土が選択されている点から、吉備系土師器碗の可能性も残る。96~97は壺部の底部と口縁部境に屈折点を有し、97の底部には回転ヘラ切り痕及びそれに後出す板状圧痕を認める。口径14~15cmを測り、前述した土師質土器壺(91)の法量に酷似する。さらに、96~97の特徴として、高台断面形状が挙げられる。通常、土師質土器碗は断面三角形の高台を貼付するが、96~97の高台は蛇の目凹形高台状を呈し、その側面形も丸味を有する。98の高台形状もこれに近似しており、同一系統と理解できる。こうした形態の土師質土器碗は大山遺跡では、報文番号125-228~233等で確認できる。91として図化した土師質土器壺に特異な高台を貼付した可能性が高く、大山遺跡における在地土師質土器を考える上では看過できない存在である。これに関しては、第4章第3節において検討したい。99~105は瓦器碗である。99~100は器高が高く、かろうじて深碗を指向する傾向が窺え、101~104は口縁部が直線的

に外傾し、口径に対して器高が低い形態を呈する。その差異に呼応して、前者の外面にはわずかにヘラミガキを認めるが、後者は指揮さえのみとなる。いずれも和泉型瓦器碗であり、前者は尾上編年Ⅲ-1ないし2期、後者はⅢ-3期の所産となる。106は中国産白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈し、横田・森田分類白磁碗IV類に該当する。107は東海系山茶椀底部片である。高台は径5.2cmを測り、三角形の断面形状を呈する貼付高台である。見込みには自然釉の降灰を認める。北部系山茶椀-東濃系山茶椀7型式（明和窯）の所産となる（藤澤1997、註3）。108は東播系須恵器鉢である。口縁端部を上方へ折り返し、端面を創出する。森田編年第Ⅱ期第2段階の所産となる（森田1995、以下東播系須恵器鉢に関して同書に依拠する）。109は瓦質羽釜である。口縁部は直線的に内傾し、外端部は丸味を有する。110は土師質土器甕とした。体部は直線的に立ち上がり、「く」字形に屈曲し、口縁端部を小さく摘み上げる。



第39図 SD07・08断面図 ( $S = 1/40$ ) 及びSD07出土遺物 ( $S = 1/4$ )

S D08はⅡ区南西隅、グリットC 4で検出した溝状遺構である。S D07と同一線上に位置し、元来連続していた遺構と考えたい。検出長約2m、平均溝幅0.4m前後を測り、検出面からの深度は0.05mと極めて浅い。断面形状は浅い舟底状を呈し、埋土はS D07と同じく、褐灰色混砂粘質土の単層である。

以上、S D07出土遺物は、尾上編年Ⅲ-1ないし2期の所産となる和泉型瓦器碗も認めるが（12世紀後葉～13世紀初頭）、大多数はⅢ-3期の所産となる（13世紀前葉）。東播系須恵器鉢も12世紀末葉～13世紀初頭に位置付けられる。よって、13世紀前葉の年代観を付与することができ、土師質土器小皿・壺の年代観も矛盾はない。しかし、東海系山茶椀は13世紀中葉前後の所産となり（報文番号107）、ここでは13世紀第2四半期の所産と理解しておきたい。S D08は出土遺物は確認できないが、S D07との連続性から、13世紀第2四半期に位置付けておきたい。

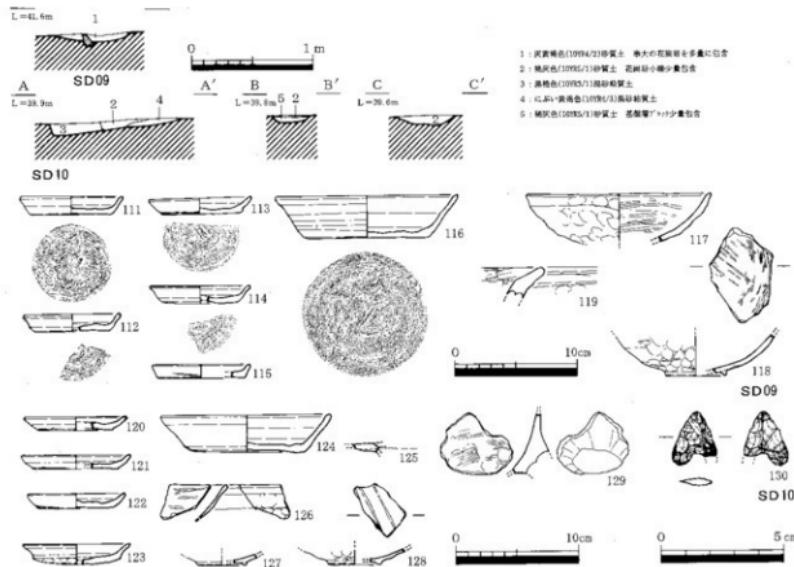
#### S D09・10（第40図）

S D09はⅠ区北西隅、グリットC 5、S D10はⅡ区西部グリットC 5～D 3で検出した溝状遺構である。Ⅰ・Ⅱ区間に設定したセクションベルトを介在して同一線上に位置する一連の遺構である。検出長はS D09が約5.5m、S D10が約15mを測り、主軸方位をN35°Eにとる。両者の平均溝幅は約0.5mを測り、検出面からの深度は極めて浅い。断面形状は浅い皿状ないし舟底状を呈する。埋土はS D09が拳大的花崗岩の包含を多量に認める灰黄褐色砂質土、S D10が褐灰色砂質土が主体を占め（2層）、3～5層を非連続的に認める。

111～119はS D09出土遺物である。111～115は土師質土器小皿である。口縁部が比較的長く延び、かすかに外反する111～114と短く直立する115に大別でき、いずれも口径8cm前後を測る。底部切り離しは回転ヘラ切りにより、113には板状压痕を認める。116は土師質土器壺である。口径15cmを測り、口縁部は直線的に外傾し、中位からわずかに外反する。底面には回転ヘラ切り痕及び板状压痕を認める。117・118は瓦器碗である。117は口径14.8cmを測り、口縁部は内湾気味に立ち上がる。外面には指押さえ、内面にはヘラミガキを認める。尾上編年Ⅲ-2ないし3期の所産となる。118は底部片である。外面には散漫なヘラミガキ、内面にはヘラミガキ、見込みには平行線状ヘラミガキをそれぞれ認める。119は土師質土器壺である。

120～130はS D10出土遺物である。120～122は土師質土器小皿である。いずれも口縁部は内湾気味に立ち上がるが、122の底部には突出傾向は確認できない。123は瓦器皿である。124は土師質土器壺である。口径13.9cmを測り、口縁部は直線的に外傾する。125は土師質土器碗である。S D07から出土した壺に特異な形態の高台を貼付した碗（報文番号96～98）に酷似した高台痕跡を認める。126～128は瓦器碗である。器壁厚は薄く、高台の矮小化が顕著である。尾上編年Ⅲ-3期の所産か。129は土師質土器足釜である。130は打製石鎌である。無茎式。近接する弥生時代後期後半の古段階に位置付けたS D01ないし遺構検出面である基本層序第Ⅱ層からの混入品である。

以上、S D09・10は出土遺物の年代観から、おおむね13世紀前葉に位置付けたいが、土師質土器足釜が問題となる（129）。足釜は13世紀代には存在するが、普遍化するのは14世紀以降であり、その年代的位置付けには問題を残す。ここでは13世紀代の所産と理解し、S D09・10に13世紀前葉の所属時期を付与しておきたい。

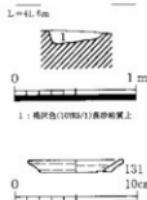


第40図 SD 09・10断面図 (S = 1/40) 及び出土遺物 (S = 1/4)

#### S D11 (第41図)

I区北西隅、グリットC 5で検出した溝状造構である。検出した限りでは直線的に延長し、主軸方位をN 9°E にとる。検出長3.8m、平均溝幅0.5m前後、検出面からの深度は0.1mを測り、逆台形状の断面形状を呈する。埋土は褐色混砂粘質土の單一層である。131はSD 11から出土した土師質土器小皿である。口径7.9cmを測り、口縁部は小さく外反する。

以上、SD 11は出土遺物の年代観や周辺造構の状況から、13世紀世紀前葉を中心とした時期に位置付けておきたい。



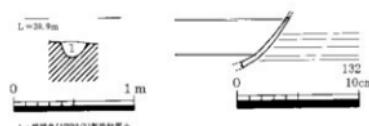
第41図 SD 11断面図 (S = 1/40)  
及び出土遺物 (S = 1/4)

#### S D12 (第42図)

II区南西部、グリットC 4で検出した溝状造構である。検出長3.5m、溝幅0.2m前後、検出面からの深度は0.1mを測る。U字形の断面形状を呈し、埋土は暗褐色混砂粘質土の單一層である。

132はSD 12から出土した中国産白磁碗である。見込み周縁と口縁部下内面に沈線を認め、横田・森田分類白磁碗V-4類に該当する可能性が高い。

以上、SD 12は出土遺物の年代観や周辺造構の状況から、13世紀前葉を中心とした時期に位置付けておきたい。



第42図 SD 12断面図 (S = 1/40) 及び  
出土遺物 (S = 1/4)

### S D13 (第43図)

Ⅲ区南端部から東壁面に沿って検出した溝状遺構である。検出長約15.5mを測り、主軸方位をN27°Eにとる。平均溝幅約1m、検出面からの深度は南端部で0.6m、中央部で0.55m、北寄りで0.6mを測るが、底面レベルは旧地形に沿って北へ傾斜する状況が窺える。埋土は中央部では大きく3層に大別でき(A-A'セクション)、下層に褐灰色粘質土(3層)、中層に検出面ベース土である基本層序第II層に酷似した灰黄褐色混砂粘質土(2層)、上層に灰黄色混砂粘質土がそれぞれ堆積する。一方、北寄りに設定したB-B'セクションでは1層上位に褐灰色砂質土を認め(4層)、中層は確認できず、下位には下層が堆積する(3層)。

下層埋土に砂質土は確認できず、顕著な流水状況を想定することは困難である。なお、Ⅱ区北端部で検出したS D14に連続する可能性を考慮したいが、約28mを越える未調査箇所があり、判然としない。

133~136はS D13出土遺物である。133・134は土師質土器小皿である。133は口径8cmを測り、口縁部は短く外反する。134は口径が小さく(6.9cm)、口縁部は短く外傾し、端部にかけて三角形状に細くなる。135は瓦器皿である。見込みには平行線状ヘラミガキを認める。136は土師質土器羽釜とした。口縁部は内湾気味に立ち上がり、外面には半截竹管状を呈する2条の凹線を施す。貼付による鉢部を認めるが、破損する。

以上、S D13は出土遺物の年代観から、おおむね13世紀前葉～中葉の所産と理解できる。

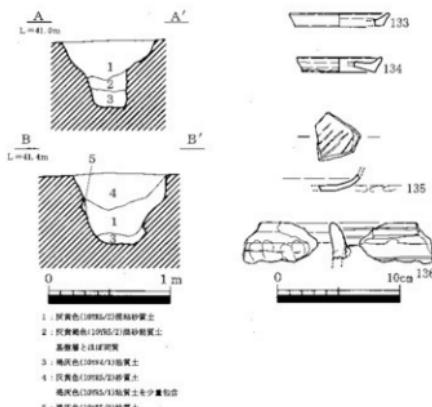
### S D14 (第44図)

Ⅱ区北西隅、グリットD1で検出した溝状遺構である。検出長3.5m、溝幅0.25mを測り、検出面からの深度は極めて浅い。断面形状は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色砂質土の単層となる。その検出位置はⅢ区S D13を北に延伸した箇所に位置し、元来同一の遺構であった可能性を考慮しておく必要がある。

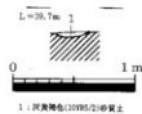
出土遺物は確認できず、正確な所属時期は明らかではないが、S D13との関連から、13世紀前葉～中葉の所産と理解したい。

### S D15~17 (第45図)

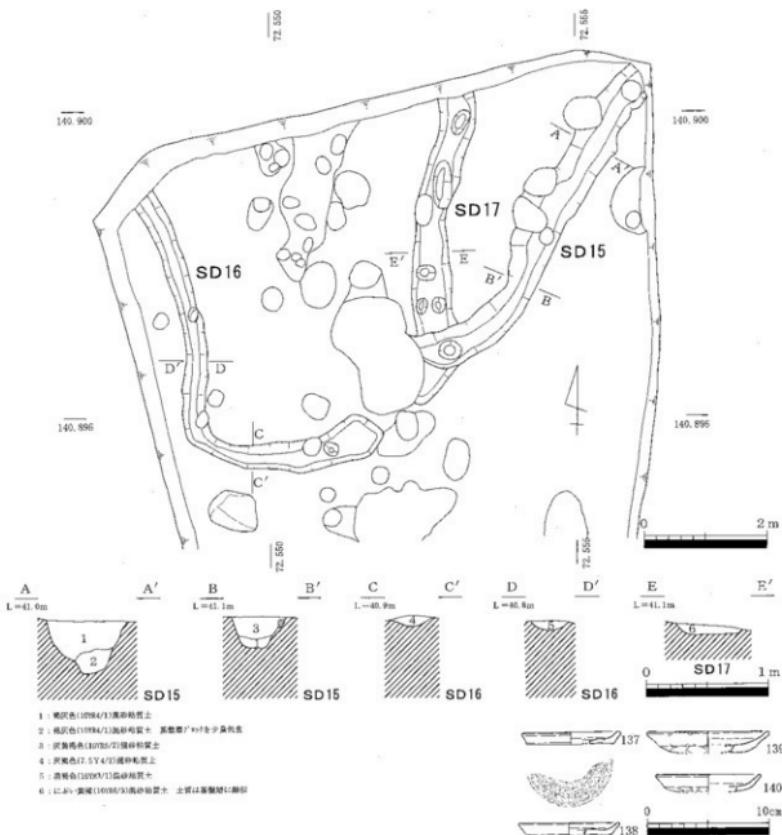
Ⅲ区北端部で検出した溝状遺構群である。連続性や重複関係から、S D16とS D17は同一遺構である可能性が高い。S D15はⅢ区北東隅からS D16・17がなす南東隅角にかけてほぼ直線的に延びる。検出長約6mを測り、主軸方位をN33°Eにとる。平均溝幅0.6m前後、検出面からの深度は0.3~0.6mを測り、溝底は北東へ傾斜する状況が窺える。舟底状の断面形状を呈する。



第43図 S D13断面図(S=1/40)及び出土遺物(S=1/4)



第44図 S D14断面図  
(S=1/40)



第45図 SD 15~17平・断面図 ( $S = 1/80 \cdot 1/40$ ) 及び SD 15出土遺物 ( $S = 1/4$ )

137~140はSD 15出土遺物である。137・138は土師質土器小皿である。いずれも口径8cm前後を測り、前者はわずかに外反気味に開き、後者は直立ないし内湾気味に立ち上がり、底口縁部境がやや不明瞭である。139・140は瓦器皿である。底部外面には指押さえを認めるが、内面のヘラミガキは消失する。

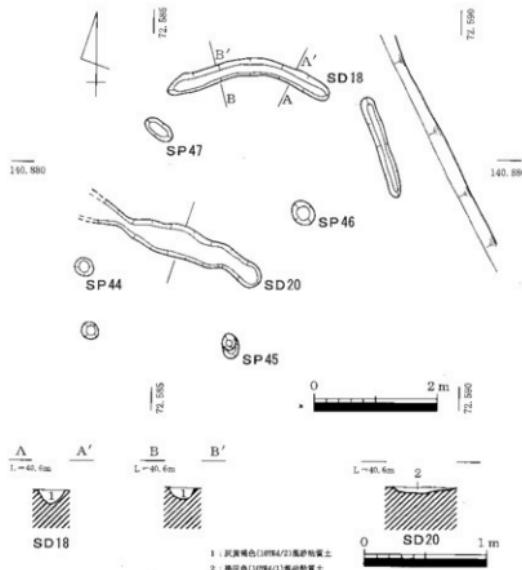
一方、連続性を認めるSD 16・17は、北端部が調査区外へ延長するため全容は不明であるが、コ字形の平面形を呈し、東西長5m、南北検出長6.4m前後を測る。調査区外北側は深い谷部に向けて急激に傾斜しており、北側へ延長してもその範囲は限られる。平均溝幅0.4m前後を測り、検出面からの深度はいずれも0.1m前後を測る。遺構の性格として方形周溝墓の可能性ものがあるが、区画内にはSX08を除き、土坑状の遺構は確認できない。SX08は第10図Ⅲ区北壁面図では24・25層に該当し、その掘り込み面は基本層序第II層（第10図10層）ないしその上位に認める包含層（基本層序第III層）の直上に堆積した基

本層序第IV層となる(第10図9層)。23層がSD16、26層がSD17埋土となるため、その開削面が異なることは明白である。また、こうした層序堆積状況やSD16・17の深度が一様であることを考慮すると、緩やかに傾斜する旧地形に沿って、ほぼ同じ深度の溝を開削したことになり、溝底レベルを描えるとといった造作はなされていないことが看取できる。

以上、SD15は出土遺物の年代観から、13世紀前葉前後の所産と理解できる。また、SD16・17は出土遺物は確認できないが、第10図が示すようにその検出面は基本層序第II層直上である。SD15とは同一遺構となり、それに先行する重複関係を認める。よって、SD16・17の所属時期をSD15以前に求めることができ、ここでは13世紀前葉前後の所産と理解したい。

### SD18・20(第46図)

II区東部、グリットE4~5で検出した溝状遺構である。緩やかな円弧を描く検出状況を示し、検出長約2.6m、溝幅0.2mを測る。U字形の断面形状を呈し、検出面からの深度は浅い。出土遺物は確認できず、時期決定には問題を残す。さらに、SD18が描く弧の内側には柱穴がほぼ正方形に並ぶ(SP44~47)。柱穴間隔は約2.6mを測り、その中央部に東西主軸の溝状遺構を認める(SD20)。中央土坑と冠することは困難であるが(埋土に炭化物や焼土は一切確認できない)、四本主柱穴の竪穴住居の可能性も考慮しておく必要がある。いずれも出土遺物は確認できず、正確な所属時期や遺構の性格は不明であるが、ここ



第46図 SD18・20平・断面図 ( $S = 1/80 \cdot 1/40$ )

では竪穴住居の可能性も残る遺構という指摘のみに留める。また、その指摘が正しければ、II区西部に位置するSD01の所属時期から、弥生時代後期後半の古段階という所属時期を付与することもできる。

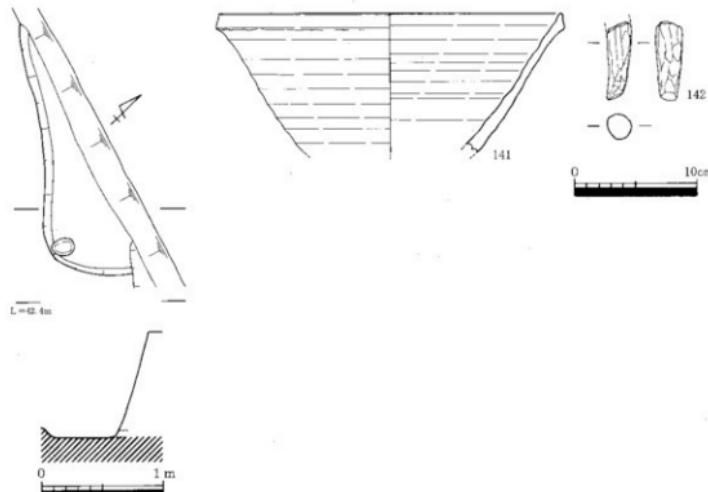
## 不明遺構

### S X01 (第47図)

I区北東隅、グリットE 6で検出した土坑である。I・II区间に設定したセクションベルトの下位へ連続するため全容は不明である。検出した限りでは短軸検出長約0.8m、長軸検出長約2mを測り、隅丸方形の平面プランに復元できる。検出面からの深度は浅く、0.1mにも満たない。上面埋土は灰白色混砂粘質土となる。

141・142はS X01出土遺物である。141は東播系須恵器鉢である。口縁部は直線的に外傾し、端部を上方へ強く引き出し、外端面を創出する。端面外面のみ色調が異なり、堅緻に焼き締まる。森田編年第三期第1段階の所産となる。142は土師質土器足釜脚端部である。

以上、S X01は出土遺物の年代観から、13世紀後半以降の年代が付与できる。しかし、その検出位置は尾根縁部に開削されたS D02の東側に位置し、検出面は基本層序第I層となる。よって、ここでは大山跡跡で検出した13世紀中葉以降の遺構の年代を代替し、15世紀中葉～16世紀代まで下る可能性を示唆しておきたい。



第47図 S X01平・断面図 ( $S = 1/40$ ) 及び出土遺物 ( $S = 1/4$ )

### S X02 (第48図)

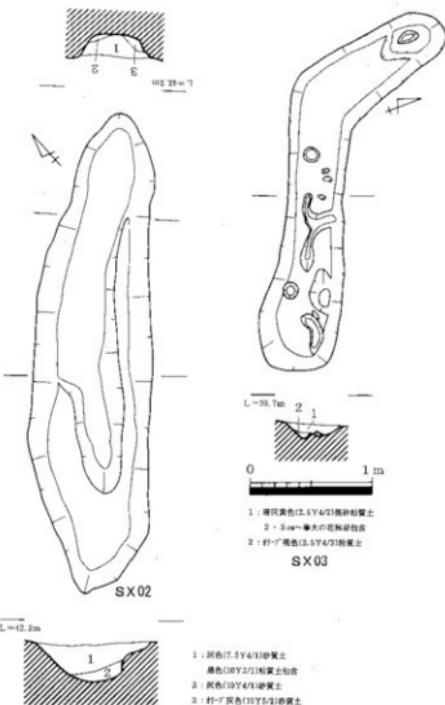
I区南端部、グリットB～C 7で検出した不明遺構である。長軸長4m、短軸幅1mを測り、紡錘状の平面プランを呈する。断面形状は南西側では舟底状を呈し、中位に狭いテラス面を有し、再度同形状で落ち込み、北東側では逆台形状となる。埋土は灰色砂質土で構成され、隣接するS K02～11埋土に酷似する黒色粘質土ブロックを含有する。

出土遺物が確認できないため、正確な所属時期は不明であるが、ここでは埋土の特徴やS D02以西の基本層序第II層上面で検出した点を考慮して、13世紀前葉を中心とした時期に位置付けておきたい。

### S X03 (第48図)

II区中央部、グリットD 4で検出した不明遺構である。「く」字形に屈曲する平面プランを呈し、幅0.5~0.7m前後を測る。浅い皿状の断面形状を呈し、埋土は2・3cm~拳大の花崗岩を含有する暗灰黄色混砂粘質土が主体を占め、底面に位置する柱穴状の落ち込みはオリーブ褐色粘質土となる。

以上、S X03は出土遺物が確認できないため、正確な時期比定に問題を残すが、中世段階の所産と理解したい  
(13世紀前葉～中葉ないし15世紀中葉～16世紀代)。



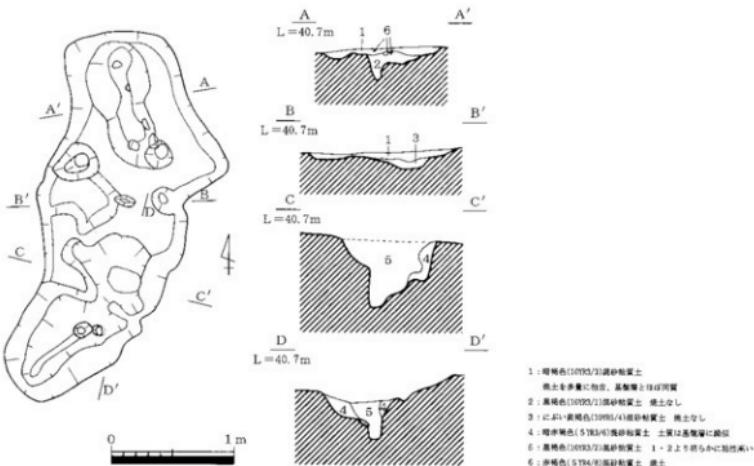
第48図 S X02・03平・断面図 (S = 1/40)

### S X04 (第49図)

II区西部、グリットC 3で検出した不明遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸長3.2m、短軸最大幅1.5mを測る。底面には数基の柱穴状の落ち込みを認め、セクション設定箇所によって検出面からの深度も一様ではない。A-A'間セクションでは東側に確認できるテラス面までの埋土が1層、北端にある土坑状の落ち込み埋土が2層に対応する。1層は暗褐色混砂粘質土、2層は黒褐色混砂粘質土となり、1層には多量の焼土片を認め、6層はやや粒径の大きい焼土片である。2層には全体に炭化物の含有を認める。B-B'間セクションでは西側に浅い落ち込みを認め、3層埋土となり（焼土片を含まないにぶい黄褐色混砂粘質土）、それより上層はA-A'間セクションと同じく、1層を埋土とする。C-C'間セクションではほぼ中央に土坑状の落ちを認め、D-D'間セクションを参考にすると、4層埋土が堆積した後、5層埋土部分が開削され、堆積したものと理解できる。4層は被熱を認めるものの焼土や炭化物は確認できないが、5層は全体に炭化物の含有を認め、黒化する。さらに、図には顯れていないが、S X04南端部は三角形に突出し、浅い落ち込みを形成する。仔細に観察すると、C-C'

間セクションに認める土坑状の落ち込みとの境に両側壁から連続する仕切状の高まりを認める。遺構の性格を反映する可能性もあるが、内容は判然としない。当初、伏せ焼きの炭焼き窯の可能性を想定し(松本2001)、前田東・中村遺跡のE区S F01の短軸辺西側で確認できる仕切板と考えられる赤変した粘土との関連を考えたが(森ほか1995)、平面形・底面構造・立面構造・埋土等において炭焼き窯である蓋然性は低い。その性格に関しては不明であるが、鉄滓・銅滴・すさ入りの壁材等は一切検出できない。

以上、S X04は出土遺物が確認できず、正確な時期決定に問題を残す。ここでは周辺遺構の状況から、弥生時代まで遡る可能性は低く、中世段階(13世紀前葉～中葉ないし15世紀中葉～16世紀代)に該当する可能性が高いと考えておきたい。



第49図 S X04平・断面図 (S = 1/40)

### S X05 (第50図)

II区中央部、グリットE 4で検出した不明遺構である。平面形は台形状を呈し、掘方南西隅から浅い落ち込みが舌状に突出する。規模は北長軸辺長1.5m、南長軸辺長2.0m、短軸幅1.1mを測り、検出面からの深度は0.6mと深い。短軸側の断面形状は舟底状ないし逆台形を呈し、直輪側北端部に狭いテラス面を認める。埋土は下位に黒褐色粘質土(3層)、それを掘り込む状況でにびい黄褐色泥砂粘質土を認め、上層に褐灰色泥砂粘質土が堆積する。掘方形状に沿って薄く堆積した灰黄褐色泥砂粘質土(4層)は基盤層である可能性が高いと考える(基本層序第II層)。留意すべきは、一度堆積した3層を再掘削した状況が看取できる点である。2層は基盤層に酷似した埋土であり、遺構の性格を反映するものと考えられるが、内容は判然としない。

以上、S X05は出土遺物が確認できず、正確な所属時期は明らかではない。ここでは周辺遺構の状況から中世段階(13世紀前葉～中葉ないし15世紀中葉～16世紀代)の所産と考えておきたい。

#### S X06（第51図）

Ⅲ区中央部、グリットB 3～4で検出した不明遺構である。ほぼ南北主軸に延びる溝状遺構の先端に土坑が位置する形状を呈する。便宜上、重複関係を設定したが、いずれも黄灰色混砂粘質土の單一層埋土となり、共有する状況が窺える。土坑側は隅丸方形の平面プランを呈し、一辺1.3m前後を測る。溝側は検出長2.8mを測り、平均溝幅は0.7m前後となる。断面形状はいずれも浅い皿状ないし舟底状を呈する。

143はS X06から出土した土師質土器坏である。口径14.3cmを測り、口縁部は直線的に外傾する。精良な胎土が選択され、吉備系土師器の可能性も考慮しておく必要があろう。

以上、S X06は出土遺物の年代観や周辺遺構の状況から、13世紀前葉に位置付けておきたい。

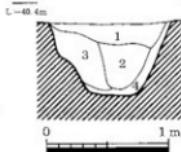
#### S X07（第52図）

Ⅲ区中央、グリットB 3で検出した不明遺構である。平面形は歪な形状を呈し、長軸長2.2m、短軸最大幅1.1mを測る。検出面からの深度は0.4mを測り、逆台形の断面形状を呈する。埋土は灰黄褐色混砂粘質土となり、砂質土の混入比率から細分可能である。

出土遺物は確認できないため正確な時期決定は困難であるが、中世段階（13世紀前葉～中葉ないし15世紀中葉～16世紀代）に該当する可能性が高いと考えておきたい。

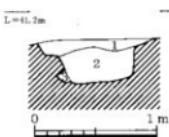
#### S X08（第52図）

Ⅲ区北端部、グリットB 3で検出した不明遺構である。北端部は調査区外へ延長するため全容は明らかではないが、南北主軸の溝状の平面形を呈する。南北検出長3m前後、平均幅約0.7mを測る。検出面からの深度は浅く、浅い皿状の断面形状となる。埋土は底面に沿って炭化物層を認め、上位に炭化物を多量に含有する黒褐色混砂粘質土が堆積する。出土遺物は確認できず、正確な所属時期の決定には問題を残すが、第10図に示したⅢ区北壁は示唆的な内容を提示する。調査時には遺構検出面を基本層序第Ⅱ層上面の1面のみと考えていたが（第10図10層）、第10図24・25層がS X08埋土に対応し、その掘り込み面は東側では第10図10層（基本層序第Ⅱ層）、西側は第10図9層（基本層序第Ⅳ層）となる。近接して基本層序第Ⅳ層を掘り込み面とし、Ⅲ区西壁において15世紀中葉～16世紀代の所産となるSK01に酷似した土坑状の落ち込み埋土を確認することができる（第10図20・21層）。よって、基本層序第Ⅳ層は第Ⅲ層以降、SK01所属時期までの形成年代を付与することができ、第Ⅳ層を掘り込み面とするS X08の形成時期の上限となる。さらに、S X08埋土には多量の炭化物を認め、隣接するSK01や第10図20・21層との埋土の共通性から、15世紀中葉～16世紀代の年代を想定することができる。



- 1: 暗灰褐色(10104/1) 鹿野粘質土
- 2: にふく青褐色(10104/3) 鹿野粘質土  
土質は基盤層に近似
- 3: 黑褐色(10103/1) 粘質土
- 4: 反復褐色(10105/2) 鹿野粘質土  
1よりやや粘質性が強い

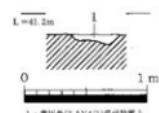
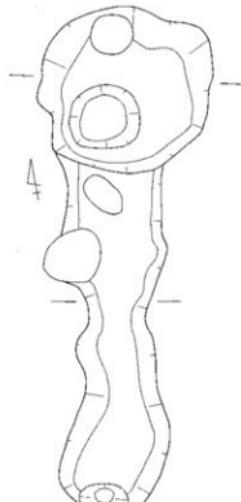
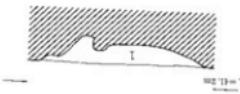
第50図 S×05平・断面図 (S=1/40)



1 : 淡黃褐色(10YR4/3)風砂粘質土  
 2 : 淡黃褐色(10YR5/2)風砂粘質土  
     冬季塑性度高い  
 3 : 黑褐色(10YR3/1)風砂粘質土  
     冬季的性状

SX07

第52図 S X07・08平・断面図 (S=1/40)



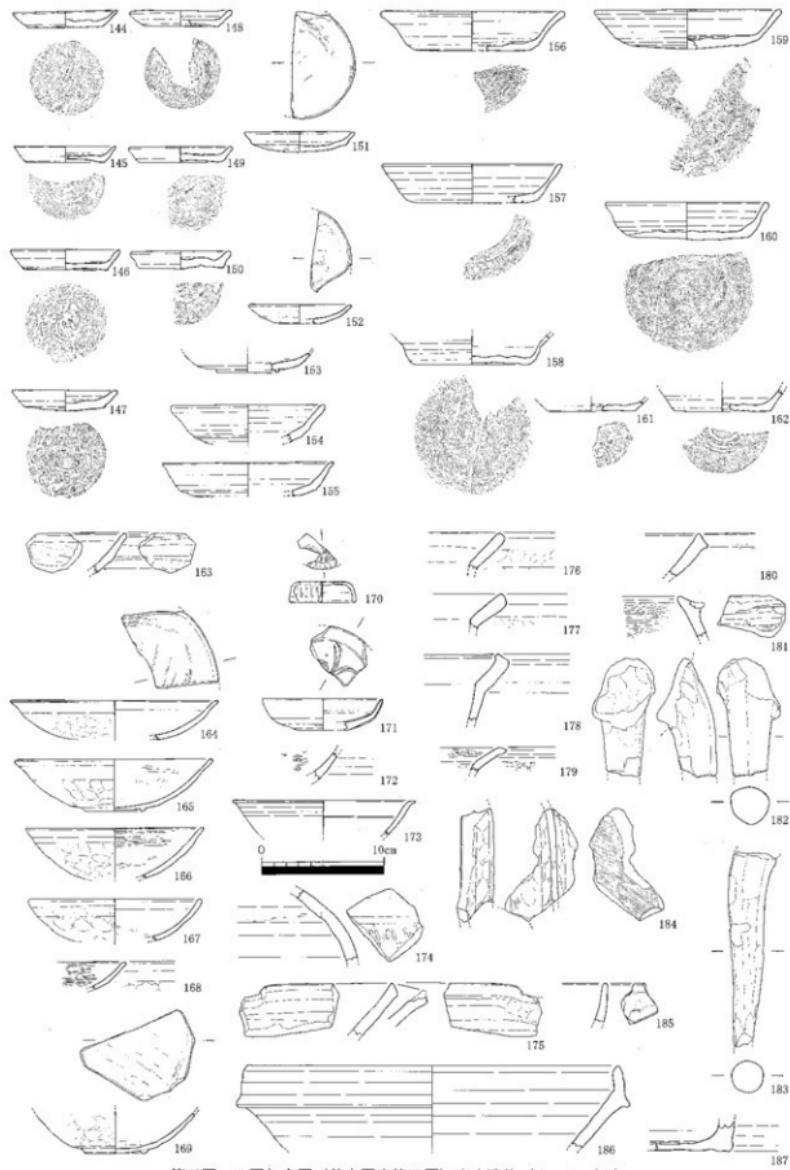
第51図 S X06平・断面図 (S = 1/40)  
及び出土遺物 (S = 1/4)

## 包含層

### I 区包含層（基本層序第Ⅲ層、第53図）

基本層序第Ⅲ層（第9図上段7・8層、下段14・15層）は比較的高密度で遺物の出土を認め、遺構検出面直上に堆積した包含層と理解できる。一部、時期を違える遺物も確認できるが、比較的一括りの高い内容を示す。

144～150は土師質土器小皿である。いずれも口径8cm代に復元でき、146のみ9.0cmを測る。口縁部が直線的ないし外反気味に細長く延びる144～146、内湾気味に立ち上がる147・148、器壁がやや厚く、口縁部が短く外傾する149・150に大別できる。いずれも底面には回転ヘラ切り痕を認め、回転糸切りによる底部調整は確認できない。151・152は瓦器皿である。151の見込みには平行線状ヘラミガキを認める。153は土師質土器椀底部片である。坏部底面にはわずかに回転ヘラ切り痕を認め、矮小化した高台を貼付する。高台形状は側面に丸味を認め、内面の接合範囲が比較的広い点から、報文番号96～98等で確認した坏に高台を貼付した独特な形態の椀であることが窺える。154～162は土師質土器坏である。154は口径12.6cmを測り、口縁部は外反し、内外面ともに顯著なロクロ目を認める。155は口径14cmを測り、器高がやや低い。156・157・159は口径15cm前後を測り、口縁部は比較的細長く延び、外反ないし直線的に聞く。160は口径13.4cmを測り、口縁部はやや直立気味に立ち上がる。底口縁部境は丸味を有し、外面腰部には入念な回転ナデ調整を認める。ほぼ全面に煤が付着し、灯明具として使用された可能性が高い。158・161・162は底部片である。158は底径9.5cmを測り、腰部は内湾気味に立ち上がり、口縁部が大きく開く形態に復元できる。底部の厚みに比して、口縁部が極めて薄く、内外面には顯著なロクロ目を認める。161は底部外面に回転糸切り痕を認める。I区包含層出土の土師質土器小皿・坏のなかでは唯一の回転糸切り調整となるが、時期差を示すものか、系統差なのかは判然としない。162は底径7.9cmを測り、残存部位による限り、口径も小さく、箱形の形状に復元できる。時期的にやや下る可能性が高い。163は須恵器椀である。内面にはコテ当て痕跡、外面には回転ナデ調整に先行する指押さえ痕跡をかすかに認める。瓦器椀の可能性も残るが、胎土や器壁厚から須恵器椀と判断した（非西村窯産須恵器）。164～169は瓦器椀である。いずれも口縁部は大きく開き、器高も浅い形態に復元できる。外面のヘラミガキは確認できない。166・167・169の見込みには平行線状ヘラミガキを認める。いずれも尾上編年Ⅲ－3期の所産と考える。170～173は中国産輸入磁器である。170は白磁合子蓋である。口径5.2cmを測り、端部及び口縁部内面は無釉となる。口縁部外面には連続する鋸、天井部には陽刻表現した花文を認める。171は白磁皿である。底部は平底を呈し、口縁部は「く」字形に屈曲して直線的に外傾する。見込みには削り込みによる草花文を認め、底部の釉は施釉後に削り取る。横田・森田分類白磁皿Ⅳ-1類に該当する。172は龍泉窯系青磁碗である。内面には片彫りによる草花文を認める。横田・森田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類。173は白磁碗である。口縁部は内湾気味に開き、端部を折り返し、水平にする。内面口縁端部下2cmの位置に1条の沈線を認める。横田・森田分類白磁碗V-4a類。174は常滑焼甕とした。細片ではあるが、肩部に帶状連続施文を認め、外面には自然釉が降灰する。中野編年4型式の所産となる（中野1995、13世紀第1四半期）。175は東播系須恵器鉢である。口縁端部上端を小さく摘み上げ、端面を創出する。森田編年第Ⅱ期第2段階の所産となる。176・177は土師質土器甕である。口縁部は「く」字形に屈曲し、前者は端部を四角く收め、後者は上端をかすかに摘み上げる。178は土師質土器鍋である。直立する体部から口縁部は「く」字形に屈曲し、内湾気味に立ち上がる。口縁部と体部境内面には明瞭な稜線を認め、端部上端を内上方へ鋭く摘み出す。179は吉備系土師器鍋口縁部片で



第53図 I区包含層（基本層序第Ⅲ層）出土遺物（S=1／4）

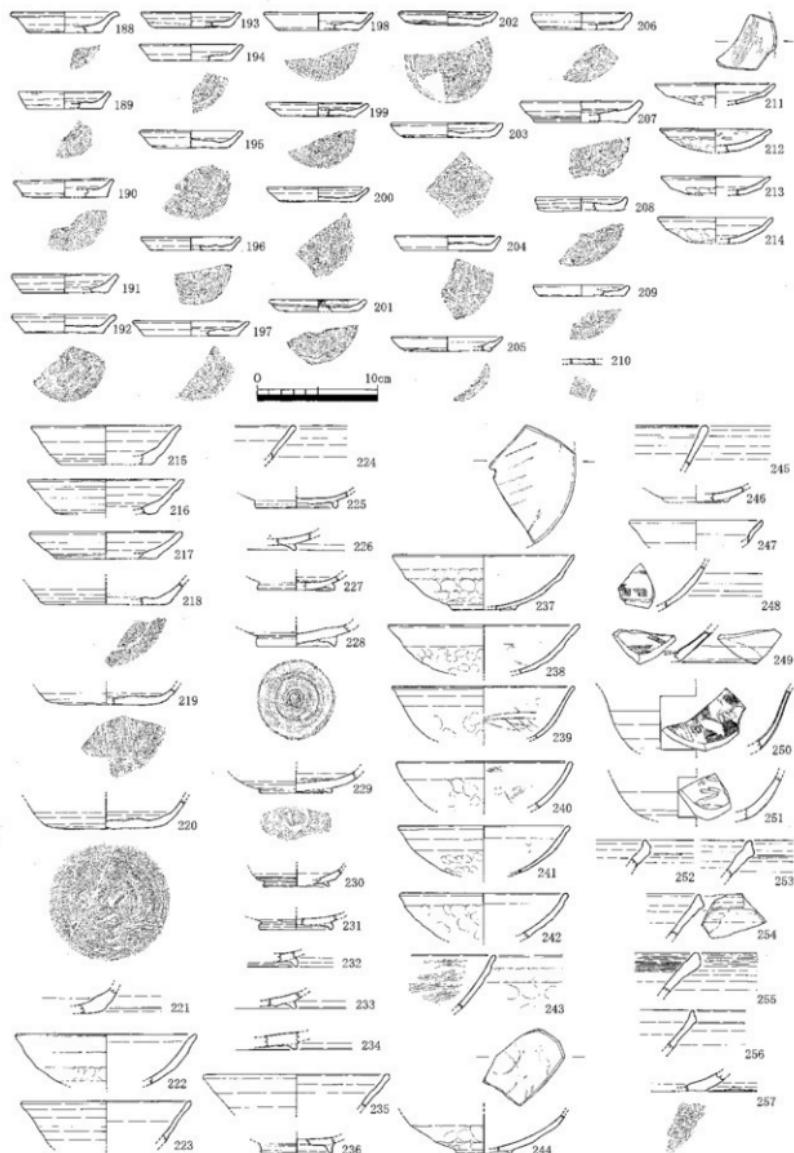
ある。口縁部は大きく開き、端部下端を横方向に引き出す。内外面には顯著な板ナデ調整を認め、胎土中には一定量の角閃石を含有する。180は土師質土器鉢であろう。内湾気味に立ち上がり、口縁部上面を上方へ小さく摘み上げ、下端を斜め下方へ引き出し、端面を創出する。内外面には煤の付着を認める。181～183は土師質土器足釜である。181は口縁部片である。鋸部は破損するが、形骸化し、口縁断面形状は三角形を呈し、長さも短い。国分寺楠井遺跡産の土師質土器足釜の年代観を参考にすると（佐藤1995）、14世紀末葉～16世紀前半に位置付けられる。182・183は脚部片である。断面形状はほぼ正円形を呈する。184は土師質土器移動式かまととした。窓をわずかに認める筒状の体部外面に低い粘土帯（庇）を貼付する。内面には顯著な板ナデ調整を認め、煤が付着する。185は陶胎染付碗である。口縁部は直立し、外面にはかすかに草花文（染付）を認める。18世紀代の所産となろう。186・187は備前陶器である。186は摺鉢である。口縁部は板状を呈し、外面の凹線は確認できない。乗岡編年中世5期の所産であろう（乗岡2000、15世紀後半）。187は壺底部片である。

以上、I区包含層出土遺物の大多数は13世紀前葉～中葉に位置付けられ、遺構検出面直上に堆積した包含層である点を考慮すると、13世紀中葉の所産と理解できる。なお、土師質土器足釜（181）は14世紀末葉～16世紀前半、備前摺鉢（186）は15世紀後半、陶胎染付碗（185）は18世紀代の所産となる。ここでは混入遺物と判断したが、I区包含層を基本層序第Ⅲ層として一括した層位は第8図上段7・8層、下段14・15層に該当し、I区ほぼ全面に認める。しかし、I区東端で検出したSD02は13世紀中葉以降、15世紀中葉～16世紀代に開削された溝状遺構となり、SD02以東の検出面は開削後に削平された基本層序第Ⅰ層である。よって、混入と判断した数点の遺物は基本層序第Ⅲ層直上に堆積した層位出土遺物（基本層序第V層）ないしI区東端で認める基本層序第Ⅰ層直上に堆積した包含層（基本層序第Ⅲ層）との細分が行えなかった新たな包含層出土遺物という解釈ができる。前者を報文番号185、後者を181・186と判断したいが、恣意的な解釈であり、ここでは少量の混入遺物を含むことを明記するに留めたい。

## II区包含層（基本層序第Ⅲ層、第54・55図）

第10図上段6層、基本層序第Ⅲ層出土遺物である。比較的濃密な密度で遺物の出土を認め、遺構検出面直上に堆積した包含層と理解できる。一部、第10図上段3～5層、基本層序第V層からの混入遺物も認めるが、比較的まとまりの高い一群と評価できる。

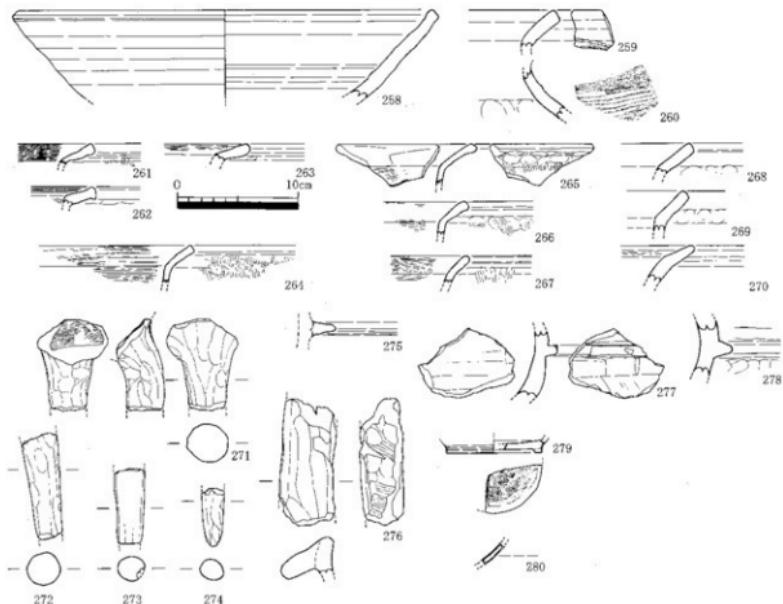
188～210は土師質土器小皿である。口径は7cm代後半～9cm代前半に復元でき、8cm代が主体を占める。底部切り離しは210のみ回転糸切り調整、その他は回転ヘラ切り調整となる。器形では口縁部が比較的長く延び、緩やかに外反ないし直立する188～198、内湾気味に立ち上がる199～207、口縁部が短く、コースター状を呈する208・209に大別できる。さらに、内湾する一群は口縁部が比較的長い199・200・205と口縁部が短く、厚みを有し、底部がわずかに突出する201・202、口縁端部外面が帶状に肥厚する206、肉厚な207に細分できる。211～214は瓦器皿である。口径9cm代を測り、底部外面には顯著な指押さえ、211・212の口縁部内面にはヘラミガキを認める。215～221は土師質土器壺である。底部調整が確認できる個体はいずれも回転ヘラ切りにより、219・220には板状圧痕も認める。215～217は口径12cm代を測り、口縁部がわずかに外反し、端部が先細る215・216と直線的ないしわずかに内湾し、端部に丸味を認める217に大別できる。218～221はいずれも底部片である。底径10cm前後に復元でき、底口縁部境が明晰な218と不明瞭な219～221に大別できる。なお、221は胎土中に多量の雲母粒を含有し、大山遺跡出土の土師質土器のなかでは異質な存在である。222～236は土師質土器椀である。222は口径14.8cmに復元でき、



第54図 II区包含層（基本層序第III層）出土遺物1 (S = 1 / 4)

口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部のみ緩やかに外反する。底部外面には指押さえを認める。223は口径14 cmを測り、口縁部はかすかに外反し、端部が丸く肥厚する。224は径復元はできないが、223に近似した内容を示す。225～234は底部片である。228～233は坏の腰部に明瞭な屈折点を認め、坏に高台を貼付した形状を呈する特異な形状の碗と考える。大山遺跡では報文番号96～98等に類例を認める。坏部底部に回転ヘラ切り痕を認める個体が大多数を占め、230の口縁部下端には底部に連続する回転ヘラ切り痕も認める。底部から腰部にかけて直線的に延び、腰部に丸味を持たない箱形の形状に復元できる。高台断面も側面は丸味を有し、内側の接合方法は蛇の目凹形高台状に長く延びる。235・236は器形・胎土の特徴から吉備系土師器碗の可能性を残す一群である。口縁部外面に回転ナデ調整を認め、高台も細長く延び、断面形状も三角形を呈する。237～244は瓦器碗である。口径14～15 cm前後を測り、器高がやや深い個体も認めるが、大多数は口径に比して器高が低い形態を呈する。外面には顯著な指押さえを認めるが、ヘラミガキは確認できない。内面には散漫なヘラミガキ、237～239の見込みには平行線状ヘラミガキ、244には連結輪状ヘラミガキをそれぞれ認める。高台が遺存する237・244はいずれも断面三角形を呈し、矮小化が著しい。尾上編年Ⅲ－3期の所産となる個体が主体となる。245・246は須恵器碗である。245は口縁部が直線的に外傾し、口縁部外面には重ね積み痕跡を認める。246は半円形の高台断面形態を呈し、西村窯産須恵器碗の可能性が高いと考える。断面形状のみに立脚すると、佐藤分類A II-9に相当する(佐藤2000 a・b)。247～251は中国産輸入磁器である。247は青磁皿とした。底部から「く」字形に屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。端部は上端を小さく摘み上げ、下端は丸味を有する。248は白磁碗である。内面には櫛状工具による花文を認め、白磁碗V-4 b類に該当する。249～251は青磁碗である。249は内面に片彫りによる草花文を認め、外面下半は無釉となる。龍泉窯系青磁碗I-2類。250は内面にヘラなしし櫛状工具による花文を認め、龍泉窯系青磁碗I-3類に該当する。251は内面に飛雲文を片彫りするが、残存部位の関係により2条沈線による区画は確認できない。龍泉窯系青磁碗I-4類。252～257は東播系須恵器鉢である。端面に稜線を認める252は森田編年第II期第1段階、上端部を上方へ小さく摘み出す254・255は第II期第2段階、上端部を強く引き出し、明瞭な端面を認める253・256は第III期第1段階に位置付けられる。257は底部片である。底面にはかろうじて回転糸切り痕を認める。258は十瓶窯産須恵器鉢である。口縁部下端を上方ないし斜め下方に小さく摘み出す。佐藤分類鉢E-3型式に相当する(佐藤2000 a)。259は产地不明須恵器甕である。頸部から強く屈曲し、口縁部は大きく開く。端部は四角く收め、口縁部外面には左上がりの格子叩きを認める。260は肩部外面に右上がりの平行叩きを認め、口縁部外面は方向を変えずに叩き調整を施した後、ナデ調整を加えており、龜山系須恵器甕と判断した。261～264・267は土師質土器鍋である。ボール状の体部から口縁部は「く」字形に屈曲する。264・267の胎土中には角閃石の含有を認め、吉備系土師器鍋と考えたいが、口縁部形状や器形に違和感を残す。265・266は吉備系土師器鍋である。内外面には顯著な板ナデ調整を認める。268～270は土師質土器足鍋である。わずかに外傾する体部から口縁部はにぶく屈曲し、268・269は端部上端を小さく上方へ引き出し、270は丸く收める。いずれも体部と口縁部境内面には明瞭な稜線を認める。271～274は土師質土器足鍋である。いずれも脚部片であるため、詳細は不明であるが、時期的にはその存在は重要である。275は土師質土器羽釜鈎部片とした。276は移動式かまどである。内面には被熟痕、外面には煤の付着を認める。277・278は滑石製石鍋である。いずれも銅部周辺に該当し、外面銅部下半には煤が全面に付着する。いずれも木戸分類Ⅲ-a類に該当する(木戸1993・1995)。279は須恵器坏である。高台内にはヘラ記号を認める。280は瀬戸・美濃系陶器皿である。近世混入品。

以上、II区包含層出土遺物は底部に回転糸切り痕を認める土師質土器小皿（210）、小型化した土師質土器壺（215～217）、土師質土器足釜（271～274）を除くと、おおむね13世紀前葉～中葉の所産となる。遺構検出面直上包含層という性格から、ここでは13世紀中葉の形成年代を想定しておきたい。



第55図 II区包含層（基本層序第III層）出土遺物2 ( $S = 1/4$ )

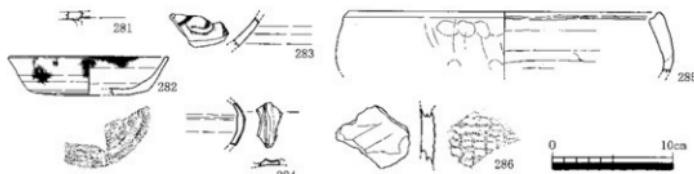
### III区包含層（第56図）

I・II区から連続する遺構面直上に堆積した包含層出土遺物と考えていたが（基本層序第III層）、再検討の結果、III区には基本層序第III層は確認できないことが判明した。III区では第10図下段の9層（基本層序第IV層）、6・7層（上面はSK01・SX08掘り込み面）が遺構面直上に堆積しており、ここで提示する281～286は同層出土遺物となる。

281は土師質土器壺高台片である。282は土師質土器壺である。口径13.2 cmを測り、口縁部は直線的に外傾する。口縁部内外面には煤の付着を認め、灯明具としての機能が想定できる。283・284は中国産輸入磁器である。283は青磁碗である。内面に蓮弁文の片影りを認め、龍泉窯系青磁碗I-2類に相当する。284は瓶とした。外面には明緑灰色の色調を呈する青磁釉を施釉し、棱線が明瞭な連続する凹面を認める。下半にはわずかに無釉の範囲を認める。285は土師質土器鍋ないし鉢である。口縁部は内湾し、端部内側に明瞭な段を有する。外面には顕著な被熱痕を認め、火にかけて使用したことが窺える。286は土師質土器鍋体部片とした。外面には格子叩きを認め、焼成は極めて堅密に焼き締まる。

以上、III区包含層出土遺物の281～283はおおむね13世紀中葉前後に位置付けられるが、285・286は確実にそれ以降の所産となる。I・II区包含層では土師質土器足釜を除き、これに類する製品は確認でき

す、15・16世紀の所産となる可能性が高い。こうした内容は、Ⅲ区では基本層序第Ⅲ層が確認できない点に呼応し、基本層序第Ⅳ層ないし第10図下段6・7層出土遺物と判断することができる。



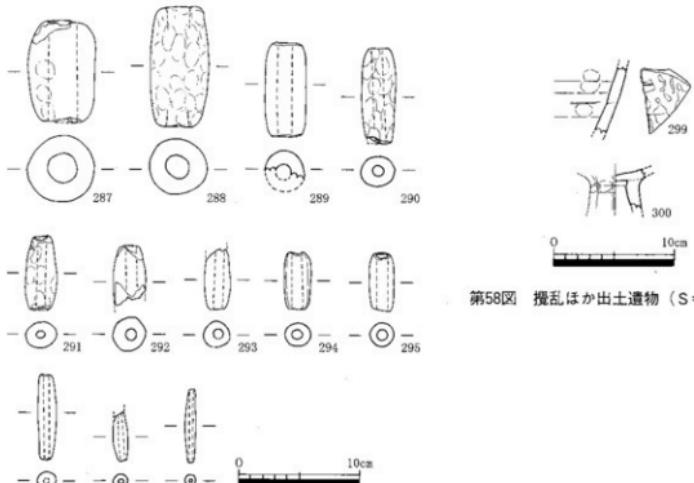
第56図 Ⅲ区包含層出土遺物 (S = 1 / 4)

#### I・II区包含層出土土錘 (第57図)

287~298は土師質土器土錘を一括して提示した。いずれも管状土錘に該当し、細片まで含め、有溝(穿孔)土錘や棒状土錘は確認できない。287・288は大振りな一群、289・290は側面形が方形を呈し、胴張り傾向が少ない形態、291~295は全長6cm前後を測り、紡錘状の側面形を呈する一群、296~298は重量が軽く、孔径が細い一群で、細長い紡錘状の側面形となる。I・II区包含層出土遺物であり、おおむね13世紀前葉～中葉の所産と理解できる。

#### 擾乱ほか (第58図)

299は排土中から出土した瀬戸・美濃系陶器壺体部片である。灰白色の色調を呈する緻密な胎土が選択され、外面には灰釉を施し、袖垂れ状を呈する。古瀬戸灰釉四耳壺か。300は排土中から出土した土師器高坏である。坏部と脚部の接合には円盤充填法は確認できず、脚部も丹念な面取りにより、多角形の断面形状に復元できる。7・8世紀代の所産と考えられる。大山遺跡では古代に属する遺物は報文番号279として提示した須恵器坏のみであるが、その存在には注意しなければならない。



第58図 摻乱ほか出土遺物 (S = 1 / 4)

#### 第57図 I・II区包含層出土土錘 (S = 1 / 4)

## 第4章 まとめ

### 第1節 遺構変遷

#### 1. 縄文時代後期前葉（第59図右）

当該期に属する遺構は確認できないが、鶴羽山から北北東へ延びる尾根の西斜面部に堆積した二次堆積土から報文番号1・2として図化した縄文土器深鉢が出土している。出土層位は基本層序第Ⅱ層となり（第8図）、その上面は弥生時代ないし中世の遺構検出面である。第Ⅱ層構成土には拳大～人頭大、さらには1mを越える規模の花崗岩を含有しており、土石流的な形成過程が復元できる。遺跡周辺は現在も土石流危険地帯に指定されており、縄文時代以降、安定した地形ではなかったことが窺える。

#### 2. 弥生時代後期後半（第59図左）

当該期に属する遺構はS D01の確認に留まる。S D01は遺構検出面に対しては、直交する主軸方位を示すが（第11図）、周辺地形に対してほぼ平行した位置関係を示す（第4・5図）。溝底は北へ向けて緩やかに傾斜するが、流水を示す埋土は確認できない。区画施設である蓋然性は低く、ここではその性格を検討することはできなかった。出土遺物はいざれも上層埋土から出土しており、比較的一括性が高いと考える。その年代の位置付けに関しては、報文番号3として図化した壺、突出した平底形態を留める鉢（5～7・9～11）、内面のケズリ調整が卓越し、突出した平底形態の甕（12・14～20）の存在から、弥生時代後期後半古段階に位置付けた。しかし、底部の矮小化が進行した小形鉢（8）や畿内の五様式甕（叩き甕）の影響を受けた甕については時期的にやや下る可能性も残る。しかし、溝上層埋土から一括性の高い状況で出土した点を重視し、後期後半の古段階として一括した。

一方、当該期に属する居住施設を含む遺構は皆無に等しく、削平を考慮しても弥生時代の集落としては極めて小規模なものであったと理解できる。なお、遺構変遷図には薄く表現したが、出土遺物が確認できないS D18は緩やかな弧を描き、径6m前後の円形の中央にS D20とS P44～47が位置する。積極的に四本主柱穴の堅穴住居と評価することはできないが、当該期に属する可能性も否定できない。

#### 3. 13世紀前葉～中葉（第60図）

大山遺跡で検出した大多数の遺構・遺物は当該期の所産となる。第60図に当該期の遺構配置図を提示した。調査対象地ほぼ全面に遺構が展開する。しかし、第59図に示したように基本層序第Ⅰ層上面に遺構は確認できず、少なくとも当該期には基本層序第Ⅰ層は削平されていない。現状の景観は後述する15世紀中葉～16世紀代に形成されたと理解できる。また、調査時には遺構検出面は基本層序第Ⅱ層上面の1面のみと考えていたが、再検討の結果、Ⅲ区で2面の遺構検出面を確認した。当該期に属する遺構はいざれも下位の遺構面で検出したことになる。

主たる遺構としては、柱穴、土坑、不明遺構、溝状遺構が挙げられる。柱穴は200基を上回るが、出土遺物の年代観から大多数は当該期の所産と考える。一部には柱間が通る箇所も認めるが、掘立柱建物を復元することは困難である。土坑ではⅠ区東部において直線的に並ぶ十数基の土坑群を認めるが、いざれも深度が浅く、埋土も單一層となる。出土遺物も稀薄であり、性格不明の土坑である。二次堆積土である基本層序第Ⅲ層の性格上、その構成土の一部である可能性も否定できない。溝状遺構は数条認め、おおむね周辺地形に合致した主軸方位を示す。

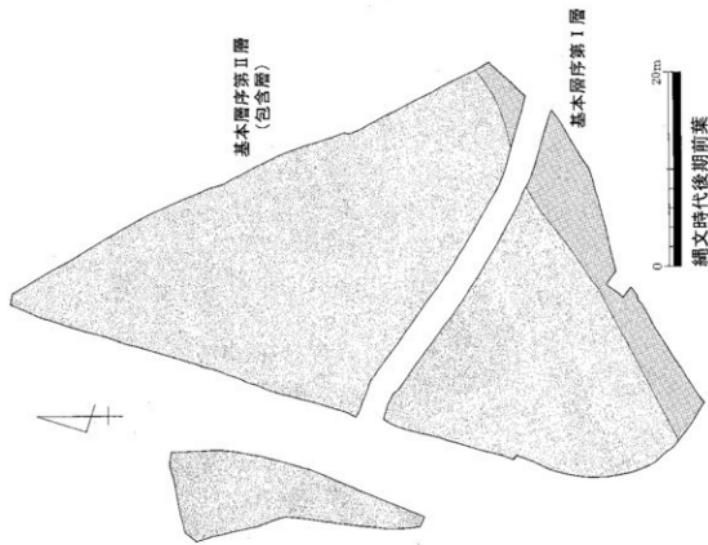
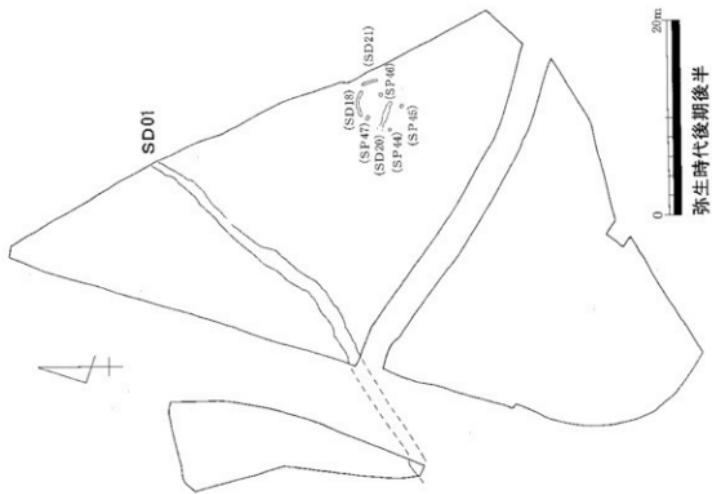
一方、出土遺物では瓦器碗・皿の保有率の多寡が際立つ。S D07では土器・陶磁器の42.6%、包含層集計では14.8%を数える。大山遺跡は海浜部に立地し、現在の汀線からの直線距離は約550mと極めて近い位置関係を示すが、近年高松城下層遺構として確認した港湾施設とは質的に異なる（佐藤2003、松本2003）。詳細については、次節で検討するが、皇室領莊園の存在と石清水八幡宮を観取と考えた瓦器碗・皿の搬入を想定した。

#### 4. 15世紀中葉～16世紀代（第61図）

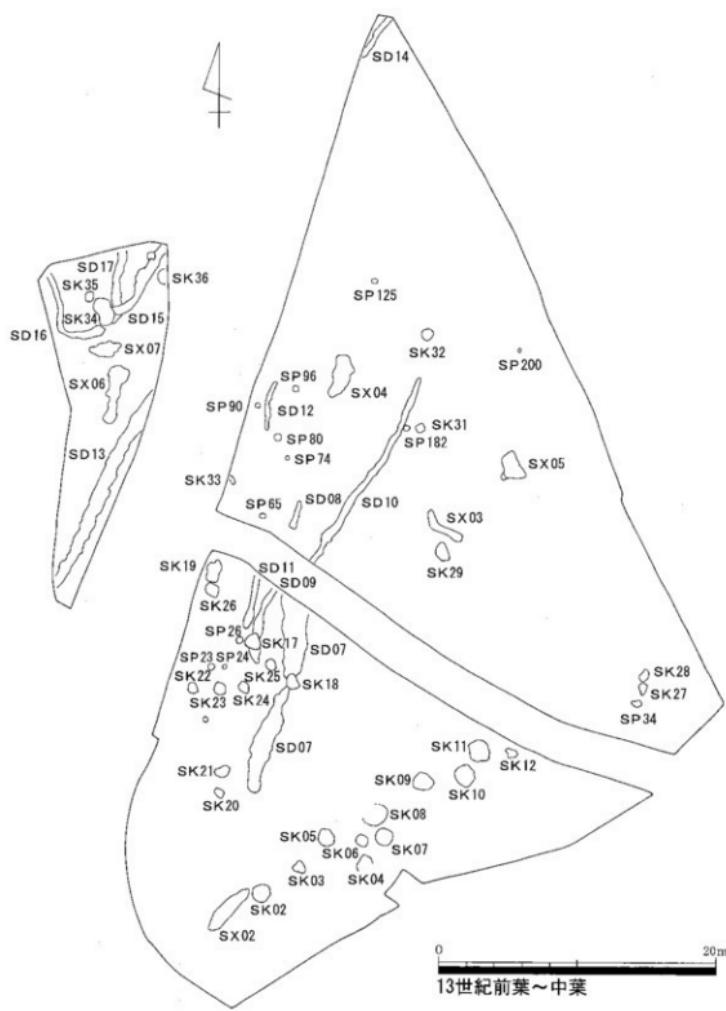
当該期に属する遺構配置図を第61図に示した。出土遺物による年代決定が困難な遺構を前段階と当該期に重複させた点を考慮しても、その遺構密度は低い。Ⅲ区で検出した土坑墓とそれに伴う五輪塔の年代観から当該期の設定を行った。加えて、Ⅲ区では2面の遺構検出面を確認し（基本層序第II層上面と基本層序第IV層上面）、その上位を掘り込み面とする遺構をSK01の検出標高との同一性から当該期へ位置付けた。

SK01は北枕西横臥屈葬した土葬墓であり、火山産凝灰岩製の五輪塔火輪（笠部）を伴う。概報作成時には13世紀中葉前後に位置付けたが、再検討の結果、当該期の所産と判断した。Ⅲ区西壁面にも炭化物ないし骨片を含有する同一埋土の遺構を認め（検出面は基本層序第IV層上面）、SK01とともに小規模な墓域を形成する可能性が高い。大山遺跡周辺は現在も寺尾千軒と呼ばれ、多くの寺関連内容が伝えられる。その内容に関しては、第4章第4節で詳細に検討するが、結論的には大山遺跡が所在するさぬき市津田町鶴羽から隣接する大内町馬篠の東西600～700mという狭いエリアに火山産凝灰岩製の石造物や中世墓の可能性が高い遺構、寺関連地名が高密度で分布し、寺尾千軒として語り継がれる実態を示す。その構造に関しては、大山遺跡が所在する大山集落と大内町馬篠の馬篠集落にそれぞれ中核施設の存在を確認し、大山集落側では大山遺跡に隣接する金銅仏出土地点を中核施設と捉え、Ⅲ区SK01を含む小規模な墓域はその奥の院と考えたい。さらに、これらを統括する母胎として背後に所在する長見山（通称鶴羽山、寺尾山）の山頂部に立地する寺尾庵寺を想定した。

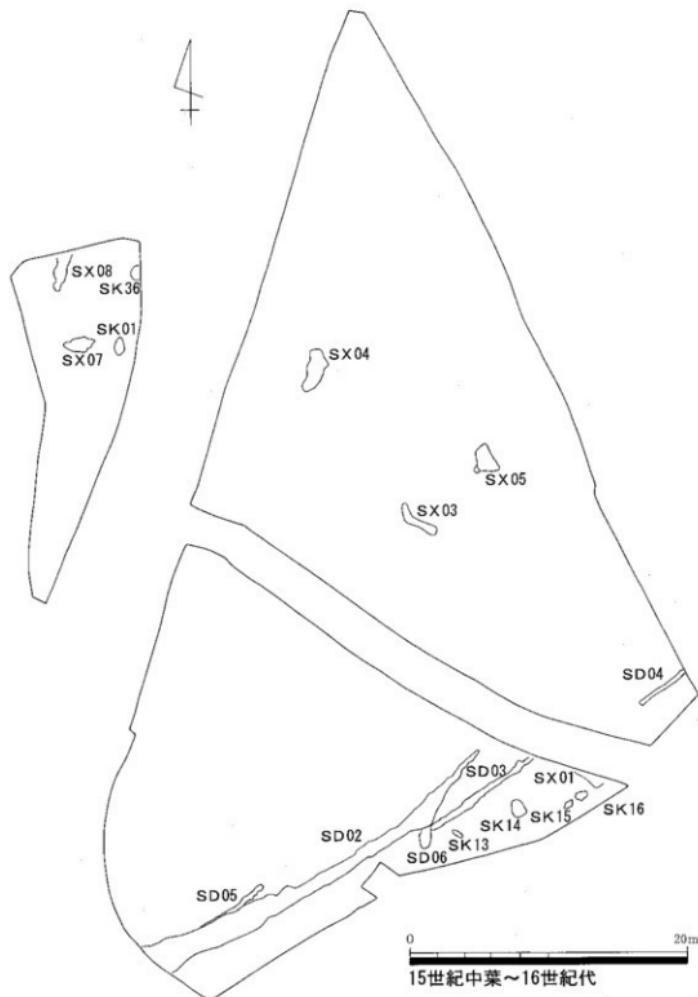
また、第I層と繩文時代後期前葉に堆積した第II層の境には15世紀代中葉～16世紀代のいずれかの時期にSD02～04が開削される。地形の変換点に開削された灌漑用水路と判断できる。留意すべきは、基本層序第I層が削平され、現況と同じ景観となる時期である。第I層上面において掘削深度が極めて浅い遺構を数基検出し（SK13～16、SX01）、出土遺物の年代観や包含層との層序関係から当該期に位置付けた。その想定に妥当性があるならば、SD02～04の開削時期は当該期の時間幅のなかでも比較的早い時期ないし当該期以前まで遡る可能性が残る。出土遺物が稀薄なため、詳細な所産時期の検討は行えないが、谷地形の水田化に伴う灌漑用水網の整備の痕跡を示す遺構として注意しなければならない。



第59圖 大山遺跡構造變遷図 1 (S = 1 / 500)



第60図 大山遺跡遺構変遷図2 (S = 1 / 350)



第61図 大山遺跡遺構変遷図3 (S = 1 / 350)

## 第2節 中世土器産地別組成について

大山遺跡出土遺物の特徴として、瓦器碗の多寡が挙げられる。数字として示すために、一定量の遺物が出土し、かつ比較的一括性の高い内容を示すSD07と若干の混入遺物を認めるが、安定した出土点数を示すI・II区包含層（基本層序第III層）出土遺物の産地別器種組成の積算を行った。積算方法としては、いずれも破片数計測を採用した。以下、大山遺跡出土遺物組成の特徴について述べ、12世紀前半～13世紀前葉の港湾施設が確認された高松城跡（西の丸町）下層遺構や産地別組成が提示された高松平野の集落との対比を行い、大山遺跡出土遺物の特性を明確にし、大山遺跡の性格を検討したい。

大山遺跡出土遺物の産地別器種組成を第3表に示した。一見してSD07の42.6%を数える瓦器碗の比率の高さが目を引くが、出土遺物総点数が256点と少なく、実態を反映する可能性は低い。それを示すように、包含層平均では14.8%となる。ここでは、出土点数が安定した包含層集計資料に基づき、その特徴をまとめたい。まず、材質別では土師質土器が79.6%（土錘1.5%）、須恵器が2.9%（東播系須恵器0.7%）、瓦器碗が14.8%、中国産磁器0.9%を測る。土師質土器が大多数を占め、その内訳としては、供膳具形態が70%、煮沸具30%の比率となる。大半は在地産土師質土器であるが、一部に吉備系土師器碗・鍋を認める。その点数は少ない。須恵器では甕・鉢が主体を占める。甕では十瓶窯産と亀山系須恵器をほぼ同数認め、鉢では東播系須恵器の優位性を認めるが、遺跡が生産地に比較的近い香川県東部に位置する点を考慮すると、その出現比率は低い。また、西村窯産須恵器碗の可能性が高い246や十瓶窯産甕・鉢も認めるが、その比率は稀薄である。注意すべきは瓦器碗の保有率である。包含層では14.8%、SD07では42.6%を測り、極めて高い数値を示す。いずれも和泉型瓦器碗であり、尾上編年II-2期～III-1期の所産を認め、III-1期が主体を占める。所属時期に起因すると考えるが、楠葉型瓦器碗は一切確認できない。瓦器碗の保有率が10%を越える12～13世紀の集落は香川県内では高松城跡（西の丸町地区）下層遺構（佐藤2003・松本2003）、松並・中所遺跡のみであり（松本2000）、集落の性格を考える上では看過できない。中国産磁器は0.9%前後を数え、白磁と青磁がほぼ同等の出土量を示す。白磁では横田・森田分類白磁皿V-1類、白磁碗IV類・V-4類、合子、青磁では龍泉窯系青磁碗I-2・3・4類を認める。白磁の特徴として、白磁碗IV類に対するV類の優位性が窺え、IV類碗が主体を占める県内の中世集落の状況とは異なる。青磁では同安窯系青磁碗は確認できず、すべて龍泉窯系青磁碗となる。時期的な現象とも理解できるが、龍泉窯系青磁碗I-5類は認められず、I-2～4類が主体を占める在り方とは矛盾する（山本1995）。ここでは、搬入状況の差異として理解しておきたい。また、SD07の積算ではその他の項目に埋没したが、北部系（東濃系）山茶碗を1点確認した（報文番号107）。香川県内における東海系山茶碗の出土遺跡は限られ（註4）、その存在意義は大きい。また、排土中出土遺物であるが、古瀬戸四耳壺部片の可能性のある個体も認める（報文番号299）。

以上、大山遺跡出土遺物の産地別器種組成の特徴について述べた。次に、13世紀前葉を中心とした時期の県内中世集落における状況と対比する。第4・5表に産地別器種組成表を提示し、そのデータに基づき第63図の組成図を作成した。高松城跡（西の丸町地区）III下層遺構は高松市西の丸町に所在する。調査地点は西外曲輪の北辺に位置し、城下と海域を画する近世石垣を計4列確認した（松本2003）。近世遺構の下位には12世紀後半～13世紀前葉の土器・陶磁器を多量に含む疊敷遺構を検出した。その分布範囲を繋ぐと、砂州状の地形と内湾気味に大きく入り組んだ旧地形が復元でき、当時の汀線に沿って疊敷設した遺構と判断した。碗の可能性の高い木製品や石从と和鏡、同安窯系青磁碗を一括埋納した遺構も確認でき、隣接する高松城跡（西の丸町地区）II地点では丸木を杭で固定した船着場と考えられる遺構も

認める（佐藤2003）。こうした状況を考慮すると、高松城跡（西の丸町地区）の下層遺構は港湾施設である蓋然性が高く、『兵庫北関入船納帳』に記載された「野原」との関連が想定できる。碟敷遺構は砂地に安定した地盤の確保を意図した処置と理解でき、そこから出土した土器・陶磁器の一部は積み荷の揚陸に際して破損・投棄したものと理解できる。第4表に示した組成表では、瓦器椀の保有率の多寡が目を引く（37.4%、松本2003を参考に作成）。大多数は和泉型瓦器椀であり、その「二次集積地」として評価される（佐藤2003）。吉備系土師器椀・鍋、中国産磁器の出土量もやや高い数値を示し、高松城跡（西の丸町地区）IIからは東海系山茶椀（南部系山茶椀5型式）、京都系土師器の出土も認める。なお、搬入品は明らかではないが、香川県産の西村窯産須恵器椀や十瓶窯産須恵器鉢・壺等の出土量は多くない。

松並・中所遺跡は高松市松並町・西ハゼ町に所在し、高松城跡（西の丸町地区）とは直線距離にして4kmを測る。III区B・C S D01は屋敷の区画溝の一部に該当し、直角に屈曲する溝状遺構である（松本2000）。第4表は報告書で提示したデータに基づき、再度作成した。その特徴として黒色土器椀と瓦器椀・皿の保有率の高さが挙げられる（9.5%、19%）。なお、包含層資料ではあるが、東海系山茶椀を確認している（尾張型山茶椀3型式、12世紀前半）。

第5表は高松平野中央部に所在する空港跡地遺跡IVの中世土器組成を報告書に提示されたデータに基づき作成した（佐藤2000a）。その計測方法は器種不明分を除いた破片数カウントとなる。遺跡は前述した高松城跡（西の丸町地区）からは直線距離で約7kmを測る。SD f 18-16は13世紀代に属し、前者には居館西面溝、後者には居館外周溝という性格が付与される。両者の組成に明瞭な差異はみられず、居館を構成するSD f 18を出土遺物から差別化することは困難であるが、土師質土器の高比率は頻繁な「使い捨て」を示す可能性が指摘されており、居館としての特性を反映する。また、搬入品では須恵器椀の保有率が10%を越え、今回提示したデータには表現していないが、その大多数は十瓶窯産須恵器椀となる（佐藤2000a）。中国産磁器は2%前後を占め、やや高い傾向を認めるが、東播系須恵器鉢は確認できず、瓦器椀・皿の出土量も極めて少ない。

六条・上所遺跡は高松市六条町上所に所在する。当時の汀線から3km前後に位置し、新川に西接する。土錐の出土量が多く、海浜部に近い立地を考慮すると、その生計の一部を漁業で担っていた集落と考えられる。SR12は13世紀前葉を中心とし、一部13世紀後半まで連続する。出土遺物組成は空港跡地遺跡IV S D f 16に酷似するが、中国産磁器は確認できない。その出土数は遺跡全体でも龍泉窯系青磁碗I-5類を中心とした数点に留まる。

以上、高松平野を中心とした県内中世遺跡の出土遺物組成の特徴を述べた。海浜部に立地する集落として、高松城跡（西の丸町地区）、六条・上所遺跡が挙げられ、前者は港湾施設となる。松並・中所遺跡は当時の汀線から直線距離4km、空港跡地遺跡は7kmを測り、それぞれ屋敷地を区画する方形溝、居館を構成する方形溝からの出土遺物となる。注意すべきは瓦器椀・皿の保有率である。港湾施設である高松城跡（西の丸町地区）下層遺構の突出した瓦器椀・皿の出土量は和泉型瓦器椀の「二次集積地」としての位置付けが可能である。調査地点は『兵庫北関入船納帳』に「野原」と記載され、その前段階ではあるが、「野原」の実態を示すものと考える。大山遺跡I・II区包含層出土遺物では14.8%を数え、遺跡が現在の汀線から直線距離にして約550mと極めて海浜部に近い立地を示す点を考慮すると、『兵庫北関入船納帳』に記載された「龜著」との関連が指摘できる。さらに、近世後半に整備された高松城下から東の志度を経由し、津田を経て町田へ抜ける志度街道（浜街道）に近接した立地も看過できない。いずれも13世紀前葉の内容を示さないが、前段階にその素地が形成された可能性は高い。「龜著」港の比定

は行えていないが、鵜部岬基部において中世の陶器・輸入磁器などが出土した記載もあり（平凡社1989）、津田湾ないしその東に位置する青木海岸周辺であったと考えられる。ここでは鵜部半島と打伏の鼻に挟まれ、内湾気味に入り組む青木海岸（駿元漁港）が「纏箸」港であった可能性を想定したい（図版37左下）。

一方、高松城跡（西の丸町地区）から直線距離で4kmを測る松並・中所遺跡では19%を数える瓦器碗・皿の保有率を認め、供膳具では群を抜く高数値を示す。同じく7kmの地点に所在する空港跡地遺跡IVのSD f 18・16ではそれぞれ0.5%、1.9%を測り、極めて少なく、こうした瓦器碗・皿の保有率の著しい格差は、遠隔地間流通網とどのような繋がりを保持していたか、つまりその流通に介在する集団との関係性に起因すると指摘される（佐藤2003）。これに立脚すれば、松並・中所遺跡はその流通に関与した可能性が高いことになる。

上記したように、現象面の整理を行うと、高松城跡（西の丸町地区）下層遺構と松並・中所遺跡・大山遺跡における瓦器碗・皿の保有率の多寡が指摘でき、その背景が問題となる。高松城跡（西の丸町地区）と大山遺跡を繋ぐキーワードとして、石清尾八幡宮の存在が挙げられる（註5）。高松城跡（西の丸町地区）の南西約2kmに石清尾八幡神社が所在する。延喜18（918年）に山城石清水八幡宮の分靈を勧請したと『金毘羅參詣名所図会』に記載され、その後の文献史料にも度々野原庄と併記される。一方、大山遺跡の1km北東に位置する大山神社は『續古今名勝圖絵』の鶴羽村大山八幡宮の条に「当社は津田八幡宮の旧地なりぞ」とある（第68図参照）。現在、津田八幡宮は津田の松原の中に所在し（第6図27）、『御領分中宮由来』に承和年間（834～848年）に山城石清水八幡宮の分靈を勧請したとあり、明治4（1871年）に石清水神社に改名した（平凡社1989）。県内数箇所において、山城石清水神社の分靈を勧請した神社ないし八幡宮が所在するが、高松城跡（西の丸町地区）と大山遺跡に隣接した石清水八幡宮の立地は偶然の一一致ではないと理解したい。石清水神社は京都府八幡市男山に鎮座し、貞觀元（859年）に大和國大安寺僧行教が宇佐宮から八幡神を勧請したのが始まりとされる。朝廷の崇拝が厚く鎮護国家神として位置付けられる。官寺形式をとり（神社と神宮寺である護国寺が一体化）、機構として政所・公文所・達所・備所・馬所・諸奉行（建断奉公・神人奉公など）が存在した。神人は本所神人と各諸国の莊園・別宮などにいる散在神人に分かれ、前者は芸能者・手工業者・商人・諸郷民からなり、なかでも大山崎油神人は荏胡麻油の購入独占権を得て、閑銭免除の特権を付与されている（大山崎油座）。さらに、男山は京都防備の関門にあたり、桂川・宇治川・木津川が合流して淀川となる結節点に位置し、難波津へ抜けるという海上交通の要衝に位置する（行教は紀氏出身）。淀川・木津川河床から採集された土器・陶磁器は瀬戸内沿いの各地で生産された土師質土器碗や須恵器を多量に認め、通常の集落では考えられない高い比率で中国産磁器が出土する等（河上著作・中世土器研究会1993）、京都を中心とした求心的な流通を担う極めて重要な広域海上交通網の輸送ルートの起点に位置する。また、土器に視点を移すと、楠葉型瓦器碗の生産地が男山丘陵南西麓に所在する。その分布域は淀川流域を中心に、瀬戸内海沿岸の官衛遺跡など京都や摂関家との繋がりが強い遺跡に点在する。その生産・流通の背景には莊園経済の機構に組み込まれた分業体制下にあり、その工人集団は“座”に繋がる粘土・製作・販売の独占団体を形成していたとされ、摂関家や大寺社との関連が指摘される（橋本1992）。瓦器碗と石清水八幡宮の関連を示す遺跡として、徳島県中島田遺跡が挙げられる（（財）徳島県埋蔵文化財センターほか1996）。吉野川河口の沖積低地に位置し、13世紀後半～14世紀中葉に営まれた集落である。その土器・陶磁器組成は碗形態において、吉備系土師器碗55.3%、輸入陶磁器碗22.1%、畿内産瓦器碗19.9%、国内陶磁器碗2.7%を測り、すべて搬入品から構成される。調査地点は14世紀後半の文献に登場する「倉本下市」近辺に位置すること等から、水

運と結びついた物資流通の集散地として評価されている。また、当該地は『兵庫北関入船納帳』に「別宮」と記載され、山崎胡麻の積出港となっている。山崎胡麻は前述した石清水八幡宮の神人による大山崎胡麻油のことであり、この地は活動拠点として位置付けられる(福家1993)。高松城跡(西の丸町地区)、松並・中所遺跡及び大山遺跡から主体的に出土する瓦器椀はいずれも和泉型瓦器椀であるが、高松城跡(西の丸町地区)II下層遺構からは、0.7%前後の楠葉型瓦器椀の出土を認める(和泉型瓦器椀・皿は42%、佐藤2003)。中島田遺跡の例を考慮すると、高松城跡(西の丸町地区)下層遺構の瓦器椀・皿出土量の多寡に石清水八幡宮が関与した可能性が高いと考える。広域海運網の媒体として、瀬戸内路では鷺・加茂両社、石清水八幡宮や西園寺家に代表される寺社・公家権門傘下の供祭人・神人であったという指摘もあり(網野2003、吉岡1997)、石清水八幡宮が両遺跡近隣に所在する点には注意を払う必要があろう。

また、瓦器椀搬入の背景に石清水八幡宮の関与を想定する場合、港湾施設そのものであった高松城跡(西の丸町地区)下層遺構と松並・中所遺跡や大山遺跡は切り離して考える必要がある。大山遺跡は海浜部に極めて近い立地を示すが、決して荷揚地ではない。松並・中所遺跡も汀線からは直線距離で約4kmを測る。こうした立地を示す遺跡の瓦器椀・皿保有率の多寡は、前記した中島田遺跡の例だけでは説明できない。次に、松並・中所遺跡における瓦器椀・皿の多寡について検討したい。

高松城跡(西の丸町地区)下層遺構として検出した港湾施設の背景には中世野原庄の存在を欠かすことはできない。野原庄は高松城跡(西の丸町地区)が所在する野原郷から松並・中所遺跡が所在する坂田郷に設けられた白河院勅使田が応徳年間(1084~1087)に皇室領として立庄されたものである。鎌倉時代以降、野原庄は京都妙法院門跡領に属し、承久の乱を経て後高倉院皇子尊性法親王領となる。坂田郷は13世紀中葉頃に九条道家が立庄し、後堀河天皇中宮藻壁門院法華堂に寄進されており、かつて、白河院勅使田が所在し、その後皇室領莊園となるという共通性を認める。さらに、現在石清尾山塊の西側を流れる香東川が近世初頭(寛永2~6年)に現流路に固定される以前は、現流路と石清尾山塊の南端から松並・中所遺跡の南東を経由し、室山の東を巡って、高松城下に流れ込む2条に分岐していた。つまり、両地域は香東川流域に位置し、最下流域と下流域という位置関係で隣接した状況が確認でき(直線距離で約4km)、両遺跡は莊園を媒介とした地域間の紐帯と河川により密接に繋がっていたものと理解できる。こうした紐帯により、和泉型瓦器椀の集積地であった高松城跡(西の丸町地区)下層遺構から、松並・中所遺跡へ瓦器椀が再搬入されたと考えることができる。ここで留意すべきは、皇室領莊園の存在である。大山遺跡が所在する鶴羽にも安元2(1176)年に京都蓮華心院領として皇室領莊園である鶴羽庄が設置されており、八条院に寄進されていた(平凡社1989)。野原庄と同様に承久の乱以後は後堀河天皇の父後高倉院へ返上され、大覺寺統の院や女院が代々伝領したとされる。鶴羽庄の範囲を看取できる資料として、『寛永10年讃岐國絵図』がある(福家1965)。江戸時代初頭(1633年)における香川県全域の郡一郷及び庄、街道、河川が明記され、近世初頭に描かれた絵図だが、中世後半期の村落景観が復元できる。大山遺跡周辺には「大山」、「鶴羽庄」、「津田」、「馬籠」と丸囲みで郷名が記載され、前3者を点線で囲み、「鶴羽庄高合九百九拾二石」とある(第64図)。嘉禎3(1237)年に死去した山城国石清水八幡宮検校田中宗清が作成した石清水八幡宮文書目録に境争論と推定される「鶴羽・鴨部事」が記載され、両庄が接していたことが窺える(平凡社1989)。こうした点を考慮すると、『寛永10年讃岐國絵図』にある「鶴羽庄」とは、郷名ではなく、「大山」「津田」を合わせた莊園名であったと判断でき、その範囲はおむね旧津田町全域であったと判断できる。

上記したように、高松城跡(西の丸町地区)、松並・中所遺跡、大山遺跡の近隣には、いずれも皇室領

莊園が設置され、瓦器椀・皿の保有率の高い遺跡を繋ぐ共通項となる。こうした見解に妥当性があれば、脇田氏による莊園領制的収取機構の確立と重なる首都市場圈＝求心流通論の立場から、中世土陶器の広域流通全般を神人・供御人や国衛勤仕の回船人による貢納物の請負い輸送の帰り荷であるという見解は魅力的である（脇田1986a・b、吉岡1997）。皇室領莊園の莊園領主は京にあり、莊園領主はそこへ貢納物を収め、その帰り荷の一部として瓦器椀が搬入されたと考えたい。さらに、物流の一端を担う石清水八幡宮の存在から、その権利に石清水八幡宮が関与したという想定もでき、こうした見解に立つならば、高松城跡（西の丸町地区）下層遺構は、まさに野原庄からの貢納物積み出し港となろう。

以上、大山遺跡を中心として、瓦器椀・皿の保有率を中心にその動向について検討した。その保有率が15%以上を数える集落は、県内では高松城跡（西の丸町地区）と松並・中所遺跡の2遺跡に留まり、大山遺跡を加えても3遺跡に過ぎない。高松城跡（西の丸町地区）は汀線沿いに位置し、港湾施設（濱・津）そのものであり、大山遺跡も汀線から550mの地点に立地しており、海浜部集落の集散地的な性格を反映するという単純理解も可能である。中世の物流システムには鴨・加茂両社、石清水八幡宮や西園寺家に代表される寺社・公家權門傘下の供祭人・神人であったという指摘もあり（網野1993・2003、吉岡1997）、複雑な中世物流システムがその表情を変えながら、土器組成として具現化し、当然の帰結点として、石清水八幡宮と皇室領莊園が登場したに過ぎないかもしれない。しかし、海浜部から4kmを測る松並・中所遺跡における19%を数える数値から、何らかの要因に起因した瓦器椀保有率の多寡であるという視点に基づき、これら3遺跡の共通項として、石清水八幡宮と皇室領莊園の存在を見出し、在地領主から莊園領主への貢納物の運搬に石清水八幡宮が関与し、その帰り荷の一部として瓦器椀・皿が多量に持ち込まれた可能性を想定した。こうした状況を踏まえ、大山遺跡の性格について言及するならば、鶴羽庄からの貢納物の積み出し港に近接した集落と評価でき、「兵庫北関入船納帳」に記載された「畿箸」港であった可能性が高いと考えられ、現在の青木海岸（脇元漁港）がそれに該当すると考えたい（図版37左下）。発掘調査は実施されていないが、将来的には高松城跡（西の丸町地区）下層遺構に類する施設が確認できるかもしれない。

なお、第5～7章で報告する中谷遺跡は13世紀前葉を中心とした短期間に営まれた集落で、丘陵先端部付近に狭い平坦地を造成し、掘立柱建物3棟を含む柱穴143基を検出した。遺跡から青木海岸への眺望は優れ、集落の生業として林業以外に、港に関連した内容を想起することができ、「畿箸」港に関連した集落である蓋然性は高い。

器種	遺構名	SD07		I区包含層		II区包含層		包含層集計	
		点数	比率	点数	比率	点数	比率	点数	比率
土師質土器	小皿	58	22.6	149	22.1	492	30.2	641	27.8
	坏	48	18.8	181	26.8	337	20.7	518	22.5
	椀	20	7.8	12	1.8	81	5.0	93	4.0
	壺・鍋類	18	7.0	152	22.5	397	24.3	549	23.8
須恵器	椀	0	0	3	0.5	7	0.4	10	0.4
	小皿・坏	0	0	1	0.2	1	0.1	2	0.1
	甕・壺類	0	0	3	0.5	26	1.6	29	1.3
	鉢	0	0	0	0	8	0.5	8	0.4
東播系須恵器鉢		1	0.4	7	1.0	10	0.6	17	0.7
瓦器椀・皿		129	42.6	136	20.1	206	12.6	342	14.8
中国産磁器	白磁碗	1	0.4	3	0.5	7	0.4	10	0.4
	青磁碗	0	0	3	0.5	8	0.5	11	0.5
土鍤		0	0	7	1.0	28	1.7	35	1.5
その他		1	0.4	17	2.5	23	1.4	40	1.8
計		256	100	674	100	1631	100	2305	100

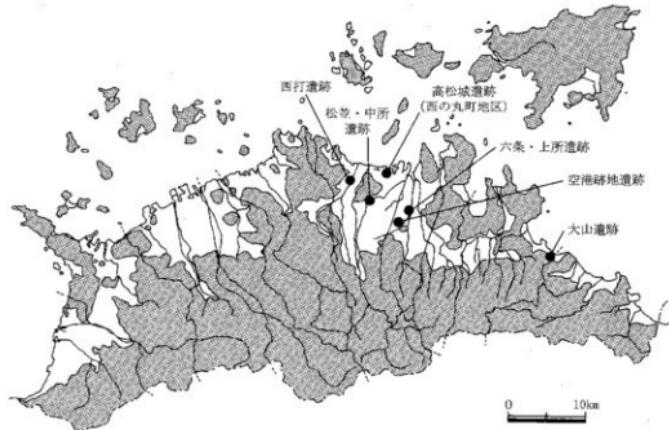
第3表 大山遺跡出土遺物量地別器種組成表

器種	遺構名	大山遺跡包含層合計		高松城(香の丸町地区)Ⅲ下層遺構		松並・中所遺跡Ⅲ区B・C SD01	
		点数	比率	点数	比率	点数	比率
土師質土器	小皿	641	27.8	348	8.7	132	8.4
	坏	518	22.5	184	4.6	147	9.3
	椀(吉備)	93	4.0	356 (113)	8.8 (2.8)	181 (7)	11.4 (0.4)
	壺・鍋類	549	23.8	540	13.4	298	19.0
須恵器	椀	10	0.4	198	4.9	18	1.1
	小皿・坏	2	0.1	12	0.3	2	0.1
	甕・壺類	29	1.3	71	1.8	34	2.2
	鉢	8	0.4	74	1.8	13	0.8
黒色土器(A類) 挿		0	0	22	0.6	149	9.5
東播系須恵器鉢		17	0.7	28	0.7	4	0.3
瓦器椀・皿		342	14.8	1502	37.4	299	19.0
中国産磁器	白磁碗	10	0.4	62	1.5	7	0.5
	青磁碗	11	0.5	15	0.4	2	0.1
その他		75	3.3	605	15.1	289	18.3
計		2305	100	4017	100	1575	100

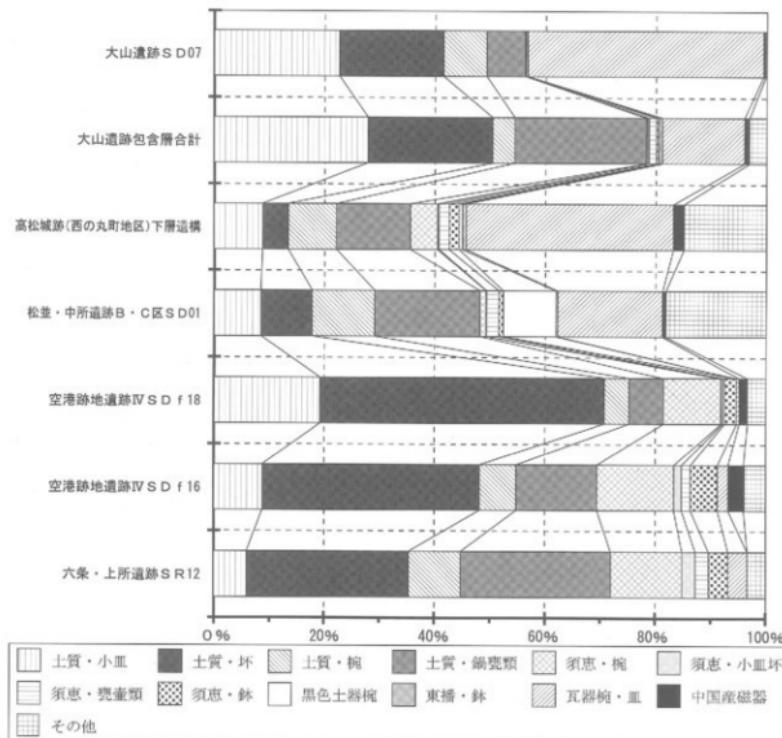
第4表 県内遺跡中世土器組成表1 (松本2000・2003データから作成)

器種	遺構名	空港跡地遺跡Ⅳ				六条・上所遺跡	
		SD f 18		SD f 16南辺		SR12	
		点数	比率	点数	比率	点数	比率
土師質土器	小皿	115	19.2	55	8.7	5	5.9
	壺	307	51.4	250	39.4	25	29.4
	椀(吉備)	27(19)	4.5(3.2)	42(41)	6.6(6.5)	8(8)	9.4(9.4)
	甕・鍋類	37	6.2	93	14.6	23	27.1
須恵器	椀	62	10.4	88	13.9	11	12.9
	小皿・壺	2	0.3	9	1.4	2	2.4
	甕・鍋類	2	0.3	10	1.6	2	2.4
	鉢	13	2.2	31	4.9	3	3.5
黒色土器椀		0	0	0	0	0	0
東播系須恵器鉢		0	0	0	0	0	0
瓦器椀・皿		3	0.5	12	1.9	3	3.5
中国産磁器	白磁碗	9	1.5	18	2.8	0	0
	青磁碗					0	0
その他		21	3.5	27	4.2	3	3.5
計		598	100	635	100	85	100

第5表 県内遺跡中世土器組成表2（佐藤2000aデータから作成）



第62図 中世土器組成を積算した遺跡分布図



第63図 県内遺跡中世土器組成図



第64図 「寛永10年讃岐国絵図」(福家1965原典、森下ほか1992より抜粋)

### 第3節 大山遺跡出土の土師質土器椀について

前節で大山遺跡出土遺物の特徴として、瓦器椀（和泉型）の比率が高いことを示した。ここでは、在地産土師質土器、なかでも特徴的な形態を呈する土師質土器椀について、若干の検討を加えたい。

以下、第64図に示した土師質土器坏・椀分類図に従い、各分類基準について記す。

#### 土師質土器坏

径復元の可能な坏を抽出し、器形・法量・胎土・焼成・色調を基軸として分類した。分類に際しては法量と器形による大分類を実施し、小分類として胎土と成形技法の差異を抽出し、大分類にはローマ数字、小分類に小文字アルファベットを付与した。設定した分類が何を示すかという問題も残すが、特徴的な土師質土器椀形態との関係を明確にするためだけの分類であることを明記しておきたい。

以下、各分類について記す。

I類 口径14~15cm前後を測る一群を一括した。底部から明瞭に屈曲し、口縁部は直線ないしわずかに外反する。法量と胎土に多様性を認めるため、細分した。

I-a類は特徴的な胎土により1点のみ抽出・細分した。口径14.3cm、器高3.8cm、底径10cmを測り、口径に比して器高が高い形態を呈する。焼成は良好で、胎土は含有鉱物が少ない極めて精良な素地が選択される。

I-b類は口径15cm前後を測り、口縁部は直線ないしわずかに外反する。胎土中に石英・長石を一定量含有するが、粒径は1~1.9mmを測り、砂粒密度も少ない。その他の含有鉱物は赤色粒のみとなる。焼成も良好で、堅緻に焼け締まる。

I-c類は胎土中に雲母粒を含有する唯一の個体となり、1点のみではあるが、抽出・細分した。口径14.4cm、器高3cm、底径9.9cmを測り、口径に比して器高の低い形態となる。

II類 口径15.3cm、器高3cm、底径9.2cmを測る。底部から口縁部にかけての屈曲が弱く、腰部に丸味を有する。口径に比して器高が低い形態はI-c類に共通するが、胎土中に雲母粒は認められない。

III類 口径13.5cm前後、器高3.2cm前後、底径10.3cm前後を測る。底部から「く」字形に屈曲し、口縁部は直線的に開く。I類に比して口縁部の開きが弱く、箱形に近い形状を呈する。焼成は「やや軟」に分類でき、胎土も「中」となり、2mm以上の石英・長石を一定量包含する。報文番号160のみ胎土中に角閃石の含有を認め、細分可能であるが、当節における細分の目的とは反すため、ここでの細分は敢えて行わない。

IV類 口径12.1cm、器高3.3cm、口径9.5cmを測る。底部から強く屈曲し、口縁部は直線的に開く。外輪度合いは弱く、器形は箱形を呈する。焼成は良好である。胎土は砂粒密度が粗く、石英・長石、雲母粒、赤色粒を一定量含有する。

V類 口径12.5cm前後、器高3cm前後、底径7.6cm前後の一群を一括した。口径が小さく、底径に比して口縁部が大きく開く。胎土と回転ナデ調整の強弱から細分した。

V-a類は焼成が「良」ないし「やや硬」に分類でき、胎土も比較的精良な一群である。内外面ともに浅黄橙色の色調を呈し、胎土とともにI-b類に共通する。また、口縁部内外面の回転ナデ調整が強く、器表面に起伏を認め、口縁端部のみ小さく外反する。

V-b類は焼成は「良」ないし「やや軟」に分類でき、胎土も粗い。口縁部内外面の回転ナデ調整は弱く、器表面に顕著な起伏は認めない。

## 土師質土器楕

楕の分類に関しては、器形、胎土を基軸とした。なお、口径は考慮していない。

以下、各分類について記す。

**A類** 底部から「く」字形に屈曲し、口縁部が直線的に開く坏部形態を呈する一群である。口径は14~15cmに復元できる。成形技法は粘土紐巻き上げ後に回転ナデ調整を加えたもので、口縁部外面及び口縁端部内面には回転ナデ調整により器表面に起伏を認める。見込み周縁の調整は不明瞭であるが、高台貼付に伴う指押さえなしナデの痕跡をかすかに認める。底部押し出しに伴うものではないと理解したい(片桐1994)。また、底面には回転ヘラ切り痕及び板状圧痕を認め、坏との関連が容易に看取できる。高台は内側のナデ付け幅が広く、蛇の目凹形高台状の断面形状を呈し、側面に丸味を有する個体が大多数を占める。焼成は遺存状況に起因し、「やや軟」に属する個体を認めるが、大多数は「良」ないし「やや硬」に分類できる。胎土は粒径1~1.9mmの石英・長石を一定量含有するが、砂粒密度は少ない。その他の含有鉱物は赤色粒のみとなる。

なお、230のみ底径が小さく、高台形状も細長く延び、外方へ踏ん張る。細分可能であるが、点数が少ないため、A類に埋没させた。

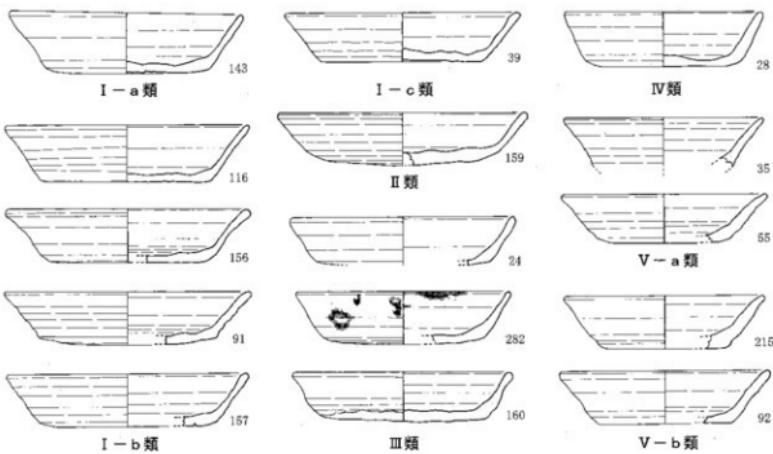
**B類** A類と同様に坏部底面に回転ヘラ切り痕を認める一群である。口縁部から高台までの完存例はなく、全容は不明であるが、229・153を抽出した。腰部に丸味を有し、A類で認めた明瞭に屈曲する状況は確認できない。高台形状はA類とは異なり、抽出した2点とも差異を認める。229は蛇の目凹形高台状を呈するが、高台内中央部に凹部は認められず、偏平な小皿を貼付したような形態を呈する。153は矮小化が著しく、高台内側のナデ付けも粗雑である。側面に丸味を認めるが、顕著なものではない。胎土はA類と大差なく、焼成は「やや軟」に位置付けられる。

**C類** 腰部から内湾気味に立ち上がり、口縁部のみ小さく外反する。外面腰部には指押さえを認める。高台として焼成と胎土から29を抽出した。細長く延び、見込み周縁に指押さえを施す。胎土は「細」に分類でき、粒径が大きい石英・長石粒を少量含有する。焼成も「硬」ないし「やや硬」に属し、堅緻に焼き締まる。器形・胎土の特徴から、吉備系土師器楕を含めた搬入品と考えたいが、生産地の特定は行えていない。

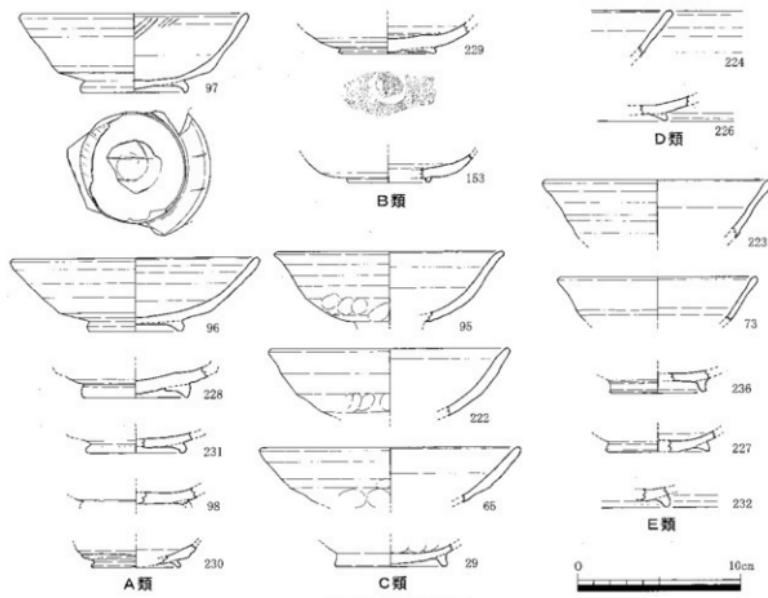
**D類** 口縁部は直線的に外傾し、端部を丸く収める。高台は外方へ鋭く踏ん張り、先端は先細る。焼成は「やや軟」に分類できる。胎土は粒径1~1.9mmの石英・長石を少量認め、微細な赤色粒も若干量含有する。手にすると小麦粉状の粉が付着する特徴的な胎土で、高松平野でも散見できる(松本2000)。当初、吉備系土師器楕と考えていたが、口縁部形態がやや異なり、ここでは产地不明としたい。

**E類** 口縁部から高台まで完存する例は確認できない。口縁部は直線的に外傾し、端部を丸く収める。口縁部外面に強い回転ナデ調整を加え、口縁部下半との境に明瞭な稜を認める。73の外面にはその後を消すように、ヘラミガキを施す。高台形状には多様性を認め、236は細長く延び、227・232は内面に凹面、外面に丸味を認める。胎土は「中」に分類でき、石英・長石・赤色粒の含有を認める。焼成は良好である。A~D類の抽出を行った後、残りの類型できない一群をE類として一括した経緯もあり、分類基準を含めて曖昧な類型となる。

以上、大山遺跡出土の土師質土器坏・楕の分類を行った。年代は坏では小型化が進行したIV・V類に後出的要素を認めるが、いずれも13世紀前葉前後の年代観を付与したい。楕ではA類に埋没させた230にやや後出的要素を認めるが、所属遺構の年代観より、いずれも13世紀前葉前後の所産と理解したい。



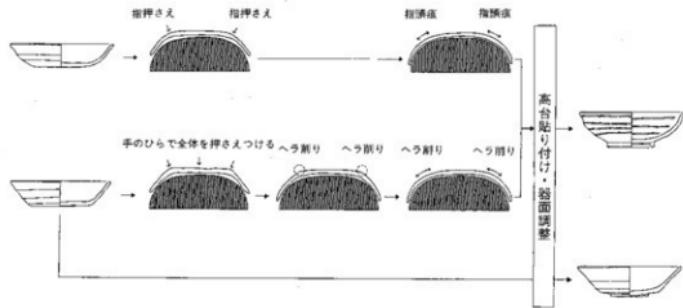
土師質土器坏分類



土師質土器椀分類

第65図 大山遺跡出土土師質土器坏・椀分類図 (S = 1 / 3)

次に、特徴的な形態を示す椀A類について検討を加える。当地域における土師質土器椀は吉備系土器椀が主体を占め、在地産の土師質土器椀の実態は明らかではない。こうした状況において、今回抽出・分類した椀A類について取り上げたい。底部に回転ヘラ切り痕及び板状圧痕を認め、高台断面形態は蛇の目凹形高台状を呈し、側面に丸味を有するといった特徴を有する。底部から「く」字形に屈曲し、口縁部が直線的に外傾する器形は、土師質土器坏に特異な形状の高台を貼付した状況が推測できる。器形と法量を重視すると、冒頭で抽出・分類した土師質土器坏I類に合致する。坏I類は胎土や焼成からの細分が可能であり、胎土、色調及び色調を考慮すると、椀A類の坏部は坏I-b類に酷似し、「坏I-b類+特異な高台=椀A類」という製作工程が復元できる。西村遺跡出土の土師（質土）器椀・黒色土器椀・須恵器椀（瓦質土器椀）の製作技法を復元した片桐氏によると、坏を製作した後、内型を用いた底部押し出し技法により外面の屈曲部を指押さえないしケズリ調整を施し、解消したとされる（片桐1994、第65図）。その存否には疑問が投げかけられるが（佐藤2000a）、大山遺跡における椀A類は坏に高台を貼付するが、屈曲部に整形は加えない。よって、外面下間に指押さえやケズリ痕跡も確認できず、底部押し出し技法は採用されていないと考える。重視すべきは、坏I-b類と椀A類の胎土と法量の一一致である。坏I-b類を製作した後、その一部に高台を貼付した製作工程が復元でき、坏が在地産であるという観点に立つならば、椀A類は在地産土師質土器となる。高台形状に関しては、西村窯産須恵器ないし黒色土器椀に稀に認めるが、関連性は低いと考える。

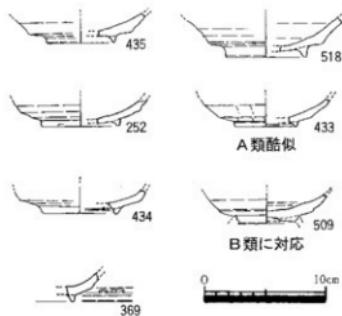


第66図 土師質土器椀形成推定模式図（片桐1994より抜粋）

椀A類の類例は稀薄であるが、前述した高松市松並町・西ハゼ町に所在する松並・中所遺跡で確認できる（松本2000）。第66図に松並・中所遺跡出土のAないしB類に類似した土師質土器椀を抽出・再レイアウトした。番号は同報告書番号に対応する。これによると、坏部の屈曲部が明瞭に遺存し、底面に回転ヘラ切り痕を認める個体が一定量存在することが窺える（435・252・434・369・518・433）。しかし、高台形状は断面三角形を呈し、大山遺跡で抽出した椀A類とは異なる。また、509は坏部底面に回転ヘラ切り痕、底部縁部にそれに連続するヘラ切り痕跡を認めるが、腰部の屈曲は明瞭ではない。高台は一部欠損するが、小皿を貼付したような形状を呈し、大山遺跡椀B類に酷似する。法量、胎土、焼成といった諸属性は大山遺跡で抽出したA類ないしB類とは異なり、直接的な搬入は想定できない。坏との対応関係の検討は行っていないが、大山遺跡と同様に、坏を製作し、その一部に高台を貼付することにより椀を製作したと考えられる。松並・中所遺跡では瓦器椀・黒色土器椀・吉備系土器椀を一定量認め、

須恵器碗も少量であるが存在しており、多種多様な椀形態を保有しながら、取えてこうした土師質土器碗を製作・使用する必要性の要因は明らかではないが、在地産土師質土器碗としての位置付けは可能である。ここではその点を強調しておきたい。

以上、大山遺跡出土の特異な形態の椀A類について、土師質土器坏との関係を示し、在地産土師質土器碗として抽出した。また、その類例として、高松市松並・中所遺跡出土の碗を挙げた。両者に直接的な関連性は認めず、坏に高台を貼付するという単純かつ簡易な製作技法は自然発生的に生じたものと理解したい。当地域において、中世遺跡を調査すると在地産の須恵器碗・黒色土器碗、搬入品である瓦器碗、吉備系土師器碗、輸入磁器碗、山茶碗といった多様な碗が出土する。比較的生産地の同定は容易であるが、土師質土器は選択肢が少ない。吉備系土師器碗か否かは明記されるが、これに該当しない一群は軽視される傾向にある。吉備系土師器碗も製作技法・器形・胎土が製作時期によりバリエーションを認め、それに拍車をかける。今回抽出した椀C～E類がそれに該当する。C類は胎土・焼成が吉備系土師器碗に近似しており、在地産土師質土器とは一線を画する。吉備系土師器碗として捉えたいが、口縁部が外反する器形は管見による限り存在しない。D類は特徴的な胎土として高松平野でも確認できるが、その生産地は明らかではない。さらに、E類ではその特徴を明確にすることも困難である。こうした状況を打破するためには、各遺跡毎に產地不明の土師質土器碗の丁寧な抽出を行い、その分布を明確にしていく必要があり、同時にその他の土師質土器との胎土・焼成といった属性比較が必要となる。本節ではこうした観点での分析は有効であると考え、特徴的な器形を呈する椀A類と坏I-b類の関係を明確にし、椀A類を在地産土師質土器碗と位置付けた。今後もこうした分析作業を通じて、吉備系土師器碗以外の土師質土器碗の生産地の推定を行うことを筆者に課せられた責務としたい。



第67図 松並・中所遺跡出土土師質土器碗 ( $S=1/4$ )

#### 第4節 大山遺跡と寺尾千軒

Ⅲ区中央で検出したSK01は北頭位西横臥屈葬した土坑墓である。出土遺物は確認できないが、直上ないしその上位に堆積した包含層より火山産凝灰岩を使用した五輪塔火輪（笠部）を検出し、土坑墓に関連する遺物と判断した。その所属時期は副葬品が皆無であるため判然としないが、五輪塔火輪の年代観から15世紀中葉～16世紀代の所産と考えた。遺跡は中世山岳寺院である寺尾庵寺が所在する鶴羽山から蜘蛛手状に延びる尾根の縁辺部に位置し、隣接する尾根にも火山産凝灰岩を用いた五輪塔や層塔、石仏といった石造物が散在する。さらに、中世墓の可能性の残る遺構も所在しており、大山遺跡に隣接する各尾根にそれぞれ小規模な「堂」が分布する可能性が高いと考える。遺跡周辺が「寺尾千軒」と呼称される点を考慮すると、大山遺跡周辺はその実態を示すものと考える。当節では大山遺跡SK01に関連し、遺跡周辺のこうした石造物を中心とした中世寺院関連遺物・遺構に関する現地踏査結果を踏まえ、「寺尾千軒」の実態について検討したい。

第6表に大山遺跡周辺における寺院関連内容を示す地点を抽出した。その番号に基づき、全体図として第68図を作成し、空中写真を利用して同様の分布図を図版31に示した。さらに、大山遺跡周辺の詳細分布図を第69図にまとめた。第6表には確認した石造物の内容及びその性格、図版番号を掲載しており、以下、これに基づき検討を進めたい。

	名 称	石造物(火山産石材)	備 考	図版番号
0	寺尾庵寺		中世山岳寺院、実態不明	—
1	大山遺跡		弥生時代、中世の集落跡	—
2	大山遺跡SK01	五輪塔火輪	土葬墓（15世紀中葉～16世紀代）	18
3	中谷遺跡		13世紀前葉の集落跡	—
4	金剛佛出土地点		昭和6年	—
5	石仏集積地点	石仏4	祠、大山集落の最奥部（付根）	32
6 a	大山神社（八幡宮）外縁	層塔・宝塔・五輪塔	山城石清水八幡宮の分靈を勧請	32・33
6 b	大山神社（八幡宮）境内	層塔・五輪塔		33
7	「テラヤシキ」		地名	33
8	「ワカミヤ」		地名	
9 a	馬篠観音堂（堂内）	石仏11体	遺存状況良好	33・34
9 b	馬篠観音堂（境内）	層塔・宝塔・五輪塔	10・11から移動・奉納	33・34
10	夏木新池	六地蔵石幢・石造物	築造に際し、石造物出土。六地蔵石幢は10' へ、残りは9 bへ奉納	35
10'	六地蔵石幢奉納地点	六地蔵石幢	現集落中心部（馬篠）の堂内に奉納	36
11	馬篠観音堂裏山中世墓	五輪塔	集石造機、中世須恵器包含、馬篠観音堂奥の院か	35・36
12	「ヤクシドウ」		地名、かつて薬師堂が所在	—
12'	石幢・石仏奉納地点	石幢・石仏・五輪塔	12地点から移動・奉納	37

第6表 大山遺跡周辺寺院関連一覧

0は中世山岳寺院とされる寺尾廃寺である。その実態は不明であるが、標高303mを測る長見山（通称寺尾山・鶴羽山）の頂部に位置する。『新撰玉藻集』には「寺尾山、田面鶴羽の境に旧寺あり。今廃れ寺号を知らず。遺跡存す。」とあり、江戸時代には廃寺化していたことが窺える。

1は大山遺跡、2はSK01に該当する（土葬墓）。土坑墓には火山産凝灰岩製の五輪塔火輪が共伴し、その年代観から15世紀中葉～16世紀代の所産と理解できる。検出時は1基のみであったが、Ⅲ区西壁面の再検討から、もう1基隣接していた可能性が高く、小規模ながら墓域を形成していたと理解できる。

4は鎌倉時代の金銅仏出土地点である。昭和6年の開墾中に発見され、高さ18.5cmを測り、直径6.3cm、高さ4.5cmの蓮座の上に立つ聖観音像である（津田町史編集委員会1986）。大山遺跡とは狭く深い谷を挟み、向かい合う尾根の縁辺部に位置し、Ⅲ区とは直線距離で30mしか離れていない。

5は石仏集積地点である。大山遺跡の南西部にある奥まった埋没谷地形の最奥部に位置する。現状では2mを越える巨石の脇に小さな祠を設け、そこに4体の石仏が奉納される（図版32右上）。石仏は手を前で合わせた上半身像で、足は簡略化される。顔には丸味を有し、鼻は直線的に延び、その上端から水平に眉が延びる。目は閉じ、口は真一文字に結ばれる。石材はいずれも火山産凝灰岩である。その来歴については明らかではないが、周辺の古者の話では5地点の上方に所在する箱谷川の工事に際し、多量の人骨とともに出土したようである。背後には寺尾廃寺が所在し、その関連が窺える。製作年代は明らかではないが、15世紀中葉～16世紀代の所産と考えたい。

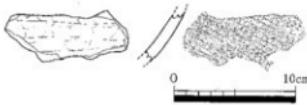
6aは大山遺跡の北東150mに位置する大山神社の外縁に所在する石造物集積地点である。宝塔2基以上、層塔1基、五輪塔数基が確認でき、いずれも火山産凝灰岩製となる。その年代観は宝塔・五輪塔が15～16世紀代、層塔が13世紀後半～14世紀初頭前後に位置付けられる。6bは大山神社の境内にある五輪塔である（図版33右上）。火山産凝灰岩製。規模・形状からおおむね15世紀中葉～16世紀代の所産と理解でき、大山遺跡で検出した五輪塔と等しい内容となる。なお、第2節で検討したように、大山神社は『讀岐国名勝圖絵』の鶴羽村大山八幡宮の条に「当社は津田八幡宮の旧地なりぞ」とある。津田八幡宮は津田の松原の中に所在し（第6図27）、『御領分中宮由來』に承和年間（834～848年）に山城石清水八幡宮の分靈を勧請したと記載され、明治4（1871）年に石清水神社に改名した（平凡社1989）。

7・8は地名である。大山遺跡が所在する尾根の2本東に位置し、直線距離では350mを測る。細長く延びる尾根と尾根に挟まれた狭い平坦地に位置し、江戸時代後期以降の銘を刻む墓標を含む墓地が所在する。その上方が「テラヤシキ」、下方が「ワカミヤ」と称され、現在は前者が水田、後者が造成地となる。近隣の古者の話では、田植えや稻刈りに行く際に「今日はテラヤシキのたんばで田植えを行う」と言っていたようである。その内容に関しては明らかではないが、寺と神社関連地名が隣接する。

その東に位置する尾根の東斜面に9（馬篠観音堂）、10（夏木新池）、11（馬篠観音堂裏山中世墓）が所在する。馬篠観音堂の全景写真を図版33中央右側に掲載した。手前左側が旧馬篠観音堂で、奥が新築された観音堂である。観音堂内には11体の石仏が奉納される（図版33下）。かつて、旧観音堂内に保管していたものを移しており、その遺存状態は極めて良い。いずれも火山産凝灰岩製であり、その形態は3類型に大別できる。1類は手を前で合わせた上半身像で、足は簡略化される。顔の表現は第6表5の石仏に酷似するが、扁平に仕上げられ、鼻と眉は陽刻し、目・口は陰刻する（図版34-左上とその下側）。肩にも丸味はなく、角張る。2類は1類と同じ意匠の石仏を舟子のなかに陽刻したもので、扁平な顔の表現も1類に共通する（図版34-右上とその下側）。3類は図版34の右上の右端にある石仏である。後世に別個体の剥落した1類頭部を上に載せているが、その下の石仏構造は1・2類とは明らかに異なる。上端

は破損するが、厨子を有し、厨子の下端と簡略化された脚部が運動し、一体化する。この個体のみ遺存状況が悪く、1・2類とは異なる来歴が想定できる。なお、1類は大中小、2類は大小の規模の差異を認める。これら石仏の年代的位置付けは困難であるが、第6表5地点の石仏と比較すると、やや後出する可能性が高く、おおむね16世紀～17世紀初頭の所産と考えたい。馬篠観音堂の境内南東隅には多量の石造物が集積されている（9b、図版34）。層塔2基、宝塔数基、五輪塔数基、六角石幢1基を認める。石材は六角石幢を除き（長尾産凝灰岩、柏・松田2002）、いずれも火山産凝灰岩となる。それぞれの来歴は後述する中世墓付近（11）、夏木新池（10）築造時に出土した石造物を集積したものであるが、層塔は旧馬篠観音堂の正面階段の脇に設置されていた（図版34左下）。その痕跡として正方形の区画を認める。それぞれの年代観は層塔が13世紀後半～14世紀初頭、五輪塔が13世紀後半～16世紀代となり、長尾産の六角石幢は類例に乏しく、所属時期は不明である。その来歴を含め、多くの問題を提供するが、今回検討することはできなかった。10は夏木新池である（図版35上段、右手前が夏木新池）。昭和初期に新築された際に五輪塔・宝塔等が多数出土し、現在馬篠観音堂境内に集積されている（9b）。10'は現在の馬篠集落の中心に所在する堂である。堂内には六地蔵石幢の中台と竿が奉納される（図版36下）。火山産凝灰岩製。中台は六角形に区画され、それぞれに地蔵を陽刻し、上端には笠を受ける突起を認める。竿は高さ約50cmを測り、四角柱の隅角を面取りする。各面中央には地蔵を陰刻ないし薄肉彫りする。竿の上端面にも突起を認める。馬篠観音堂世話人の話では、夏木新池から出土したもので、訳あってこの地点に奉納したようである。正確な所属時期は不明であるが、15世紀～16世紀代の所産と理解したい。11は馬篠観音堂裏山中世墓である。図版35の上段写真では奥に馬篠観音堂を望み、手前にある夏木新池の左に位置する尾根の斜面部に立地する。その現状を図版35下段に示した。緩やかに傾斜する斜面部を断面し字形に掘削し、狭い平坦地を造成する。その規模は幅約11m、奥行き4mの半円状を呈し、礎敷造構2基、集石造構3基を認める。礎敷造構は図版36右側の上から1・2枚目と図版36左側上から2枚目写真の右端があり、いずれも拳大の扁平な砂岩・安山岩・頁岩を敷き詰める（前者を中心墓1、後者を中心墓2と仮称）。中心墓1は径60cmの円形の範囲に礎を敷き詰め、その上端面には水平面を認める。上位には火山産凝灰岩製の五輪塔水輪を認めるが、後世の二次移動に伴うものと理解できる。中心墓2は現状では90×30cmの範囲に礎敷きを認め、東半は流失により失われたと理解できる。注意すべきは中心墓1と2の設置面が水平となる点である。後述する集石造構の設置レベルとは明らかに異なり、造構の性格を反映する。集石造構は五輪塔の残骸や拳大以下の礎を集積したもので、一部には第70図に示した須恵器の出土も認める。須恵器は壺底部細片であり、外面には格子叩き、内面には無文の當て具痕跡に後出するナデ調整を施す。产地は不明であるが、中世段階の所産と考える。亀山系ないし十瓶窯産須恵器壺であろう。周辺は戦前・戦後に棚田化したが、中世墓が立地する地点は古くから現状のままであり、ここから出土した五輪塔を境内に奉納したという世話人の話や礎敷造構の存在、中世須恵器から、中世段階の墓であった可能性が高い。馬篠観音堂との位置関係から、奥の院となる可能性が高く、歴代住職の墓域であったと考えたい。

12'は図版37上半に挙げた石造物奉納地点である。削平によりその姿を留めないが、鶴羽山から細長く延びる尾根の先端部に位置し、現況は共同墓地となる。石造物の種類は石幢や石仏、五輪塔を認め、



第70図 馬篠観音堂裏山中世墓1出土遺物

いずれも火山産凝灰岩製となる。石幢は竿が5基以上あり、方柱状を呈し、その隅角に面取りを施す。各面には地蔵を陽刻し、上端面には突起を認める。10' の六地蔵石幢に酷似しており、15世紀～16世紀代の所産と考えたい。石仏は厨子を有さない9 a 地点の1類石仏と3類石仏を認める。16世紀代～17世紀初頭の所産か。これらの米歴については明らかではないが、近隣の古老の話では、12地点に小規模なお堂があり、「ヤクシドウ」と呼称される。12' 地点にある石造物はそこから移動し、奉納されたとのことである。

以上、大山遺跡周辺の寺院関連内容をまとめた。石造物は一部を除き、いずれも火山産凝灰岩製となる。その石切場は西教寺奥の院とされる（第6図29、柏・松田2002）。当院は弘法大師の開創といわれ、堂内には高さ9 cmの薄肉彫りの磨崖仏、厄除け薬師如来像が若崖内の壁面に刻まれ、その脇には高さ1 mの十二神将像等が刻まれる。平安時代から鎌倉時代にかけて巨大な如来像が造られ、その後小型のものが追刻される。西教寺はそのお膝元に位置する（第6図28）。寺記では行基開創、空海建立とされ、宝蔵院古暦記では天長6（829）年建立、元来宝蔵院（現在のさぬき市長尾極楽寺）末寺とあり（平凡社1989）、その建立は平安時代まで遡る。西教寺境内にも火山産凝灰岩を用いた五輪塔や石仏を認め（図版38）、石切場との関連が注目できる。石仏が9体確認でき、一部は図版38上半に示したように集積される。馬篠観音堂に安置された石仏2類に酷似する厨子入りの石仏4体のほか（図版38左下）、2体の石仏を厨子の中に陽刻した個体が3体、厨子の有無は判断できないが、光背状の板に石仏を陽刻したものを見認める。石仏はいずれも前で手を合わせ、丸味を有する顔に鼻筋の通った鼻と水平に延びる眉を陽刻し、閉じた目と真一文字に結んだ口を陰刻する。その使用石材、意匠は第6表5の大山石仏集積地点の石仏に共通し（15世紀～16世紀代の所産か）、石切場と供給先の密接な関連を看取ることができる。

こうした状況を踏まえ、第71図に大山遺跡周辺の寺院関連内容の概念図を作成した。大山遺跡を含むやや広いエリアにおける寺院関連内容、街道、港及び郡境を示した。港湾施設では古墳時代以降海上交通の要衝を占める津田湾、その東に位置し、「兵庫北闕入船納帳」に記載された「龜著」港との関連性が指摘できる青木海岸（脇元漁港）、現馬篠集落の前面に馬篠漁港が所在する。街道では近世に入り整備された志度街道が海岸沿いを走り、南海道の後身となる長尾街道と町田で合流する。両街道は軒道として繋がり、火山の東麓を抜けて徳島へ至る。こうした周辺のハード面に当節で確認した大山遺跡周辺における寺院関連内容を加筆した（個々の内容に関しては第68図を参照して頂きたい）。第71図全城の踏査は行えていないが、鶴羽大山から隣接する大内町馬篠の東西600～700mという比較的狭いエリアに石造物、金銅仏、寺院関連地名が濃密に分布する状況が確認できる。それぞれの正確な所属時期は明白ではないが、石造物が示す年代観は15世紀中葉～16世紀代を主体とし、一部に13世紀後半～14世紀初頭の内容も含む。

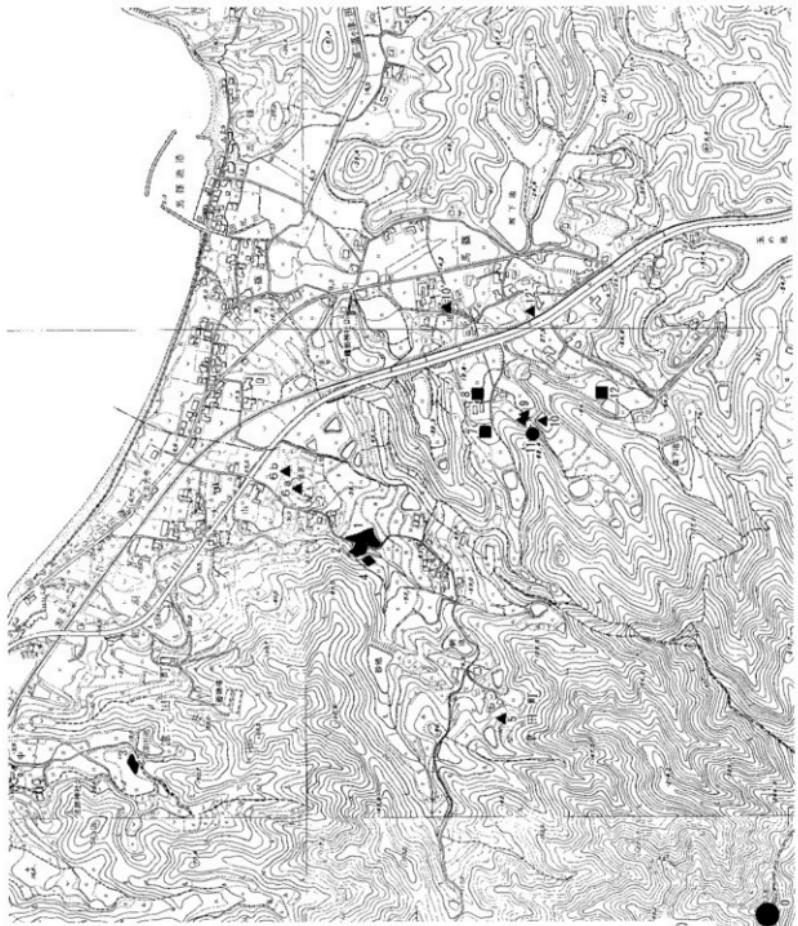
留意すべきはそれぞれ質的な差は内在するが、郡境を越えて、火山産凝灰岩製の石造物を中心とした寺院関連内容を認める点である。大山遺跡は津田町鶴羽に所在し、馬篠は大内町となる。第64図に示した『寛永10年讃岐国絵図』には香川県全域の郡一郷及び庄、街道、河川が記載される。大山遺跡周辺には大山庄が、一点破線で濃く表現された郡境を挟み、大内町側に馬篠庄が記載され、近世初頭の村落分布においても、大山と馬篠は郡境を隔てることになる。同絵図は中世後半期の村落景観を色濃く残す絵図として評価されており、こうした景観は中世後半まで遡ると考える。さらに、第4章第2節で検討したように、13世紀前葉においても大山は津田とともに鶴羽庄を形成しており、馬篠との接点を見出すことはできない。両者を繋ぐ存在として、寺尾庵寺を想定したい。長見山（通称鶴羽山、寺尾山）の山頂

部は寒川郡と大内郡の郡境の指標となり、その山頂部に寺尾廃寺は立地する。ここで提示した大山遺跡周辺寺院関連内容はいずれもこの長見山から細長く延びる尾根の縁辺部に位置し、寺尾廃寺の実態は不明であるが、互いに関連する可能性が高い。寺尾廃寺と大山遺跡周辺で確認した寺院関連内容の関係を第72図に模式図として示した。前述した地域性を考慮し、津田町側の大山集落と大内町側の馬篠集落を二分し、その母胎として寺尾廃寺を置き、確認した寺院関連内容の質的な差から中核施設の設定を行った。馬篠集落では馬篠観音堂を中核施設と考えた。遺存状況の極めて良好な石仏を含む多量の石造物を保有し、歴代住職を埋葬した奥の院と考えられる中世墓が背後に立地する。今回確認した寺院関連内容のなかでは群抜く内容を示す。また、馬篠観音堂に隣接する尾根に残る「テラヤシキ」や「ヤクシドウ」といった地名、そこからの移動が伝えられる石造物の存在は、小規模な堂の存在を示唆する。よって、中核施設と考えた馬篠観音堂の下にこれらの堂を配置した。一方、大山集落では土坑墓を検出し、墓域を形成するであろう大山遺跡Ⅲ区と近接する金銅仏出土地点周辺を中核施設として捉えた。大山遺跡では寺ないし堂を構成する建物は確認できず、第6表4とした金銅仏出土地点に存在した可能性が高い。馬篠観音堂の内容を考慮すると、大山遺跡Ⅲ区はその奥の院であったという想定もできる。大山集落では小規模な堂は未確認であるが、馬篠集落と同様の構造を想定したい。

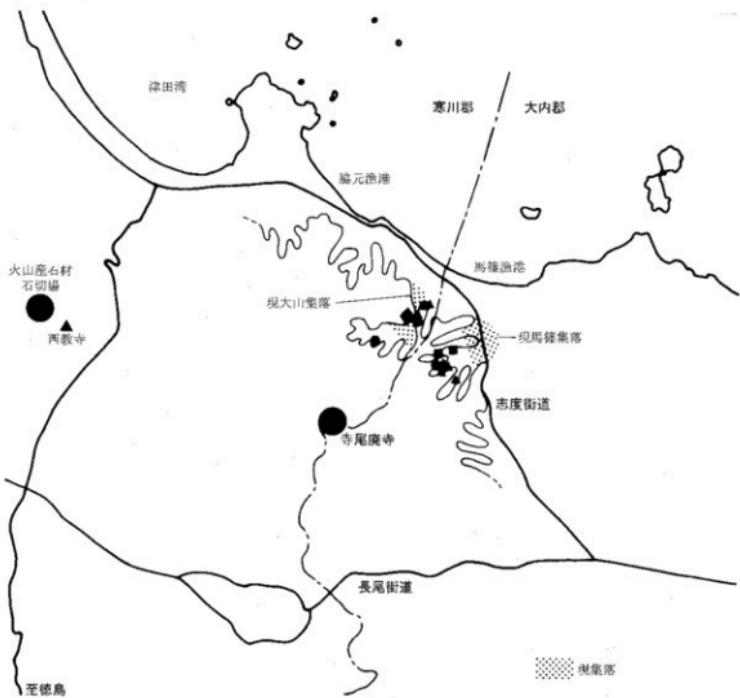
以上、大山遺跡周辺の寺院関連内容の踏査を行い、その概要報告並びに周辺の状況を考慮した概念図・模式図を作成した。大山遺跡で検出した土坑墓は、その30m西に位置する寺ないし堂（金銅仏出土地点、第6表4）の奥の院であった可能性が高く、Ⅲ区西壁面にもう1基存在するという想定とも呼応し、小規模ながら墓域を形成していたと考える。また、第72図に示した模式図では大山集落と馬篠集落のみを示した。第71図の範囲内において、寺尾廃寺を母胎とする他の中核施設が存在する可能性も残るが、現在まで未確認である。ここでは大山・馬篠両集落の中核施設や小規模な堂が東西600～700mという狭いエリアに高密度で分布する点を強調しておきたい。その範囲には火山産凝灰岩製の石造物が分布し、異なる石材は馬篠観音堂境内にある長尾産凝灰岩製の六角石幢のみとなる。こうした点も前述した模式図を補強する。この集約的ともいえる分布範囲が、今まで語り継がれる寺尾千軒の実態を示すものと理解でき、大山遺跡はその西端部に該当することになる。なお、集約された要因については明らかではないが、寺尾廃寺の実態を明確にしつつ、周辺にフィールドを広げていく必要があり、今後の検討課題としたい。

写真図面とA4図面用

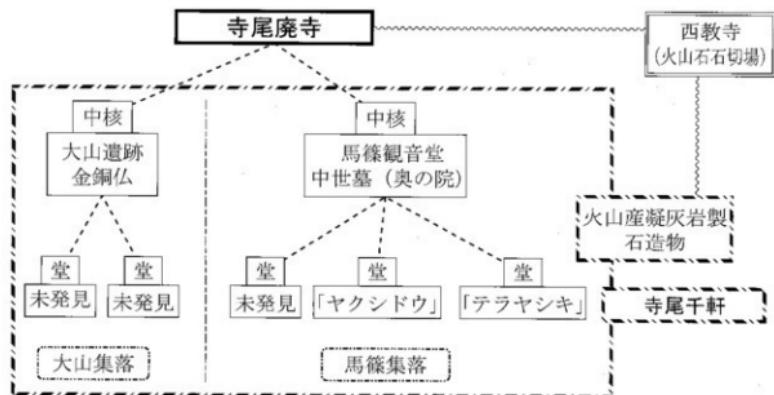
- ：中世墓
  - ▲：石造物(石仏・羅刹・五輪塔)
  - ：寺院関連の地名
  - ◆：金剛佛
- 0：寺尾原寺
  - 1：大山道跡
  - 2：大山遺跡SK01  
(土葬墓・五輪塔)
  - 3：中谷遺跡
  - 4：金網出土地点
  - 5：石仏集墳地点
  - 6 a：大山神社(境内)  
(五輪塔)
  - 6 b：大山神社(外周)  
(塔婆・五輪塔)
  - 7：「テラヤシキ」(地名)  
(大山遺石碑→10' に移動)
  - 8：「ワカミヤ」(地名)
  - 9：馬糞觀音堂  
(石仏・塔婆・五輪塔・宝塔)
  - 10：夏木新池  
(六地蔵石碑奉納地点)
  - 10'：六地蔵石碑奉納地点
  - 11：馬糞觀音堂裏山中世墓
  - 12：「ヤクシドワ」(地名)  
(かつて薬師堂が所在→12' に移動)
  - 12'：石碑・石仏奉納地点



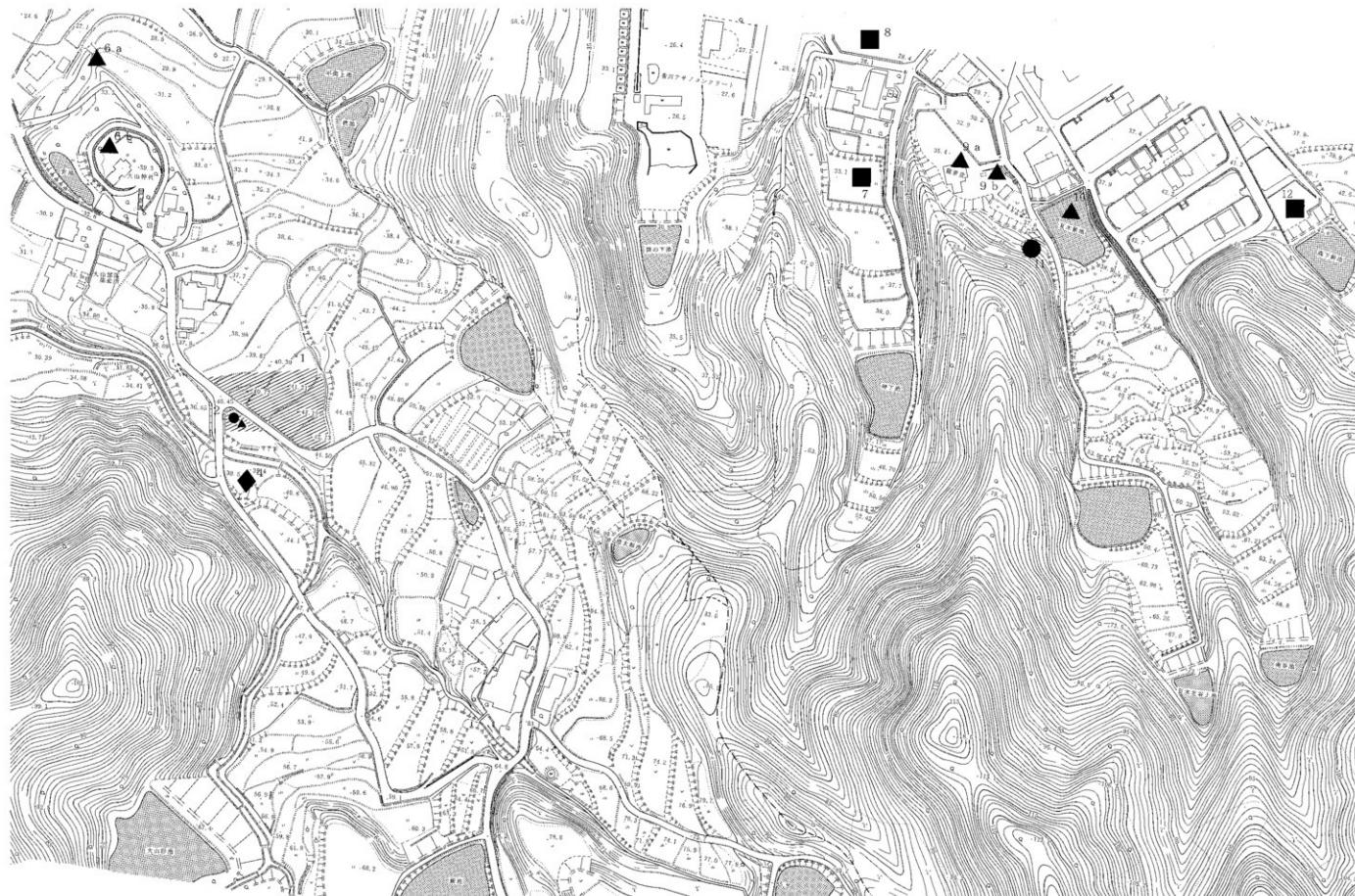
第68図 大山遺跡周辺寺院関連内容分布図1 (S=1/5,000)



第71図 大山遺跡周辺の寺院関連内容の概念図



第72図 大山遺跡周辺の寺院関連内容の模式図



## 中谷遺跡

### 第5章 遺跡の地理的環境

遺跡は鶴羽山（長見山・寺尾山）から蜘蛛手状に延びる尾根の先端部に位置し、その西側斜面地に造成された狭い平坦地上に立地する（第73・74図）。遺跡の東には谷部を堰き止めた谷池である深田池、南西側には松下池が所在し、深田池の東に位置する尾根は打伏の鼻に向かって細長く延び、遺跡の1条西に位置する尾根ないし丘陵も長く延びる。中谷遺跡が所在する尾根は、前述した両尾根に挟まれた狭い空間の基部に位置し、海岸からの距離が400mと近いながら、海から吹き上がる風を避けた立地となり、かつ打伏の鼻を中心とした青木海岸東半を望むことができる。青木海岸は鶴部半島と打伏の鼻に挟まれ、内湾気味に入り組んだ状況が確認でき（岡版37左下）、津田湾のような良港ではないが、港としての立地を兼ね備える。中谷遺跡の性格を考える上では青木海岸を望むことができる立地は看過できない。

なお、遺跡が立地する水田の標高は20m前後を測り、緩斜面地基部付近との比高差は約10m、青木海岸とは約20mを測る。

### 第6章 調査の成果

#### 第1節 調査区

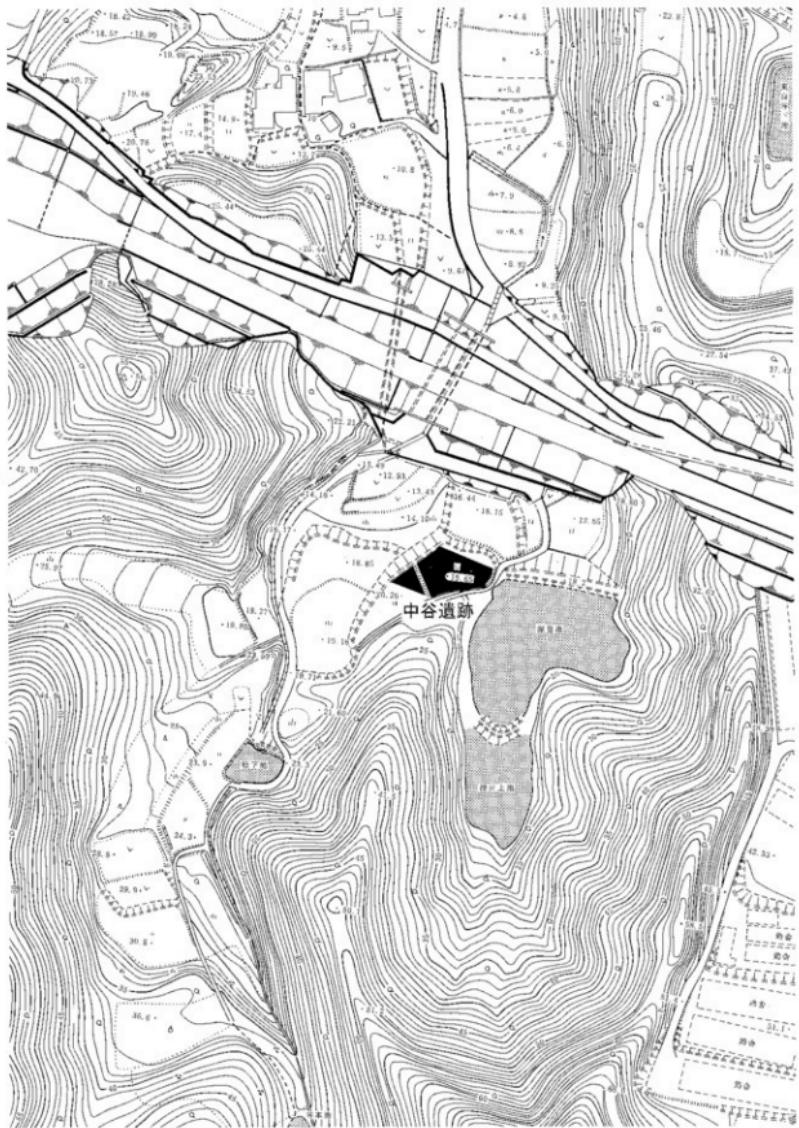
調査対象地は518m<sup>2</sup>を測り、路線内に作業ヤード・排土置き場等が確保できたため、調査区の設定を行わず、一調査区として調査を実施した。

#### 第2節 基本層序

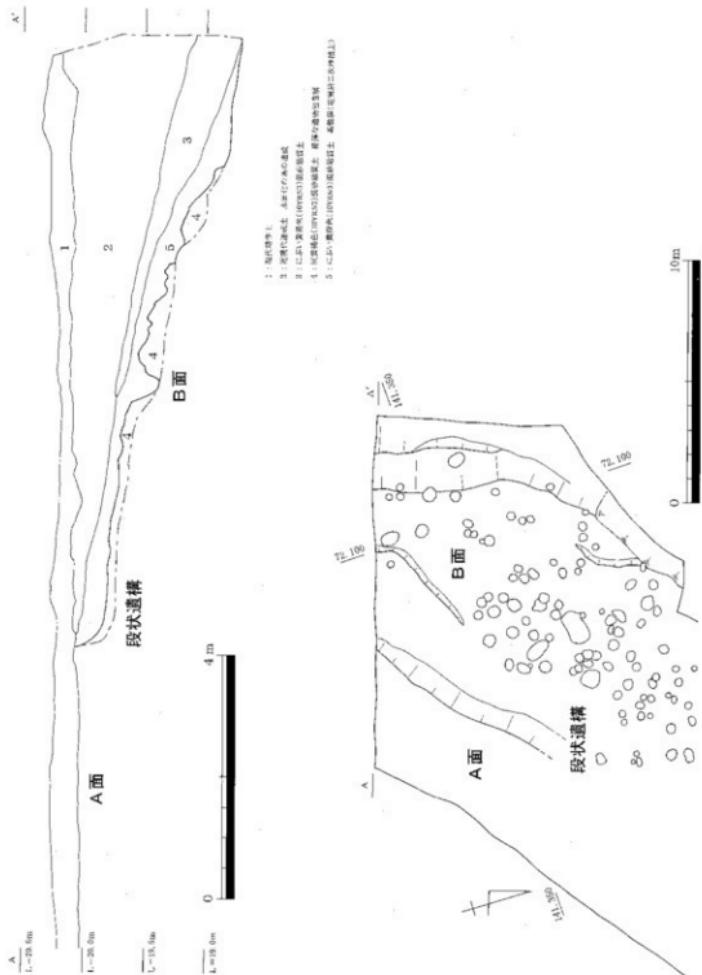
第75図に示した調査区南壁面図に基づき基本層序について報告する。前述したように、遺跡は尾根の先端部に位置し、造成された狭い平坦地上に立地する。地形的には東側は尾根頂部側、西側が斜面側となる。1層は床土・耕作土を含め、現代耕作土として一括した。2層は花崗土による造成土であり、1層下位に認める水平面と2層上端面が一致することから、1層形成に伴う近・現代の造成土（嵩上げ土）と判断できる。5層は花崗岩ないし花崗土の二次堆積土で構成され、遺物の包含は確認できない（基盤層）。4層は5層上面に堆積し、灰黄褐色混砂粘質土で構成される。稀薄であるが遺物包含層となり（第85岡報文番号38～43）、出土遺物の年代観から13世紀中葉の形成年代が想定できる。留意すべきは中央や東側において明瞭なカット面を認める点である。それ以東は1層下面に連続し、現代耕作土の造成に際し、削平された状況が窺える（以下、この削平面をA面と仮称）。第75図下に中谷遺跡南半の遺構配置図を提示したが、A面には遺構が存在しないことが窺える。一方、カット面以西は約14°前後の傾斜角度を測る緩斜面地となり（B面と仮称）、13世紀前葉を中心とした時期の遺構を認める。さらに、4層はB面直上にのみ堆積し、A面には認められない。こうした状況を考慮すると、カット面は生活域を創出するために造成したテラス状遺構に伴う段状遺構と評価でき、その形成時期を遺構の所属時期から13世紀前葉に求めることができる。A面は近・現代の水田造成により削平を被るが、元来カット面の高さは2m以上に復元できる。なお、3層にはぶい黄褐色混砂粘質土から構成され、包含層形成後に緩やかに埋積した自然堆積土となる。包含層ないし機械掘削出土遺物の年代観から（第85図）、15世紀以降の堆積と理解することができる。



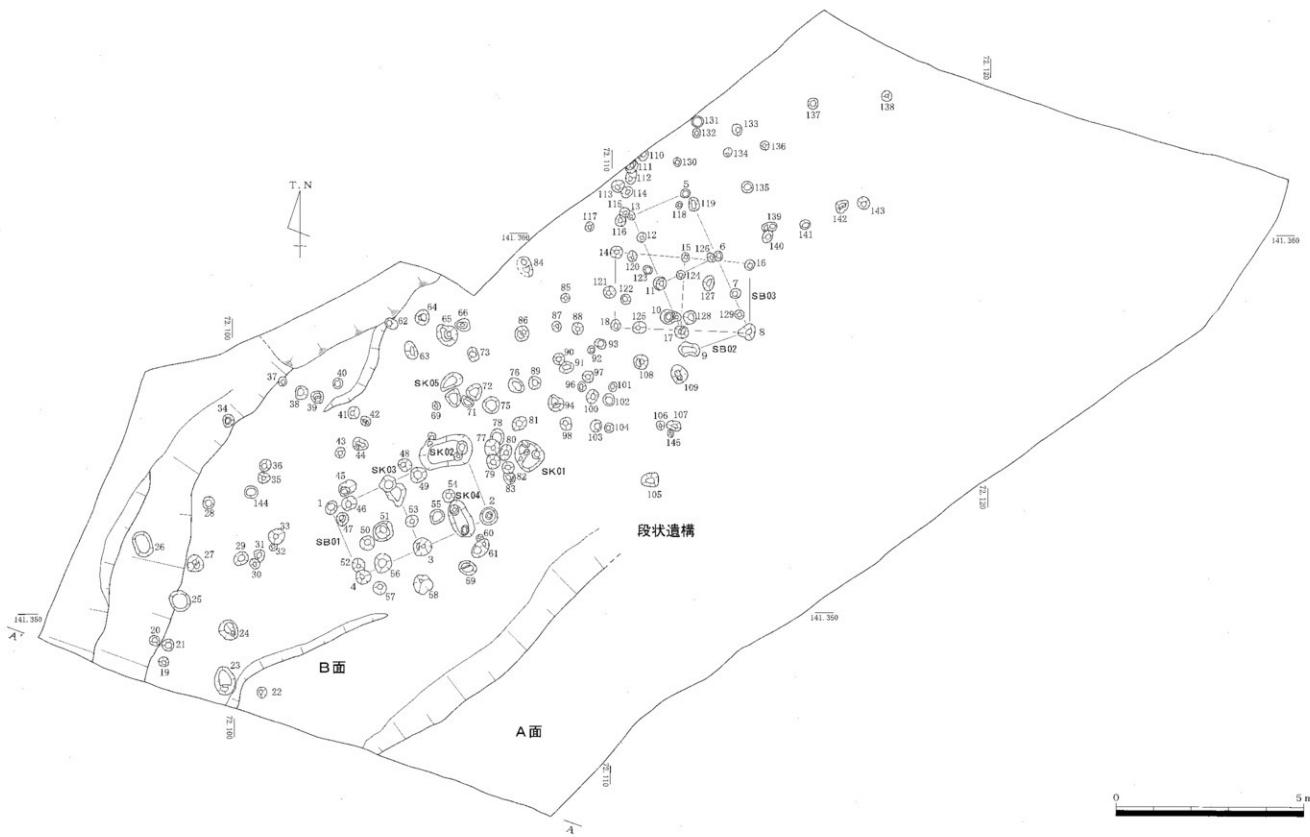
第73図 遺跡位置図 1 ( $S = 1/5,000$ )



第74図 遺跡位置図2 (S = 1 / 1,000)



第75図 調査区南壁西面及び南半邊構配図 ( $S=1/80, 1/200$ )



第76図 中谷遺跡遺構平面図 (S=1/100)

### 第3節 遺構・遺物

第76図に中谷跡遺構配置図を示した。第6章第2節で述べたように、遺構はすべてB面（テラス状遺構）上面で検出しており、調査区北西側は急勾配の斜面地となる。遺構検出面は傾斜角度15°前後を測り、水平面を認めない。南西隅に位置する段状遺構は、生活面を創出するために丘陵を断面L字形にカットした痕跡であり、現代耕作土造成により、現状での高さは0.2~0.3cm前後と低い。尾根との連続性から、元来は2m以上の高さを有していた可能性が高い。さらにB面では小規模な段状遺構を2箇所認め、そのテラス状遺構（平坦面）の造成が厳密な水平面を意図したものではない状況が看取できる。調査区東端部には東へ傾斜する斜面地を認め、遺構密度は稀薄である。

遺構は柱穴を中心に確認し、柱穴143基、掘立柱建物跡3棟、土坑6基を数える。柱穴数の多寡に比して、掘立柱建物数が少ないが、柱穴の大多数は元来掘立柱建物であった可能性が高い。

以下、遺構・遺物について報告する。

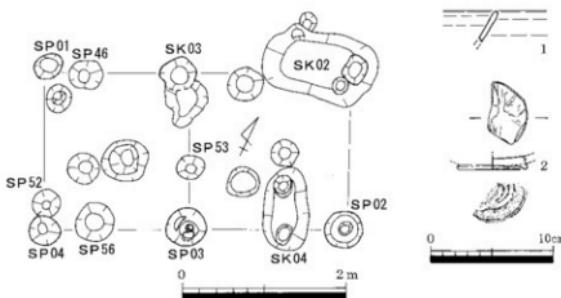
#### 掘立柱建物

##### S B01（第77図）

調査区中央やや西よりで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間、梁間1間(3.7m×2m、床面積7.4m<sup>2</sup>)を測る側柱建物である。主軸方位をN66°Eにとり、周辺地形に平行した位置関係を示す。上面埋土は灰黄褐色混砂粘質土となり、検出面からの深度はいずれも0.3~0.5mと深い。なお、根石等の施設は確認できない。

1・2はS B01を構成するS P01・02から出土した土師質土器碗である。1は口縁部が直線的に外傾し、端部は先細る。焼成不良の須恵器碗の可能性も残る。2は底部片である。底部は厚みを有し、高台はやや矮小化する。内面にはコテ当て痕を認める。大山遺跡で確認した特徴的な碗とは異なり、第4章第3節で分類した碗E類に相当する。

以上、S B01は出土遺物の年代観から13世紀中葉前後に位置付けられる。



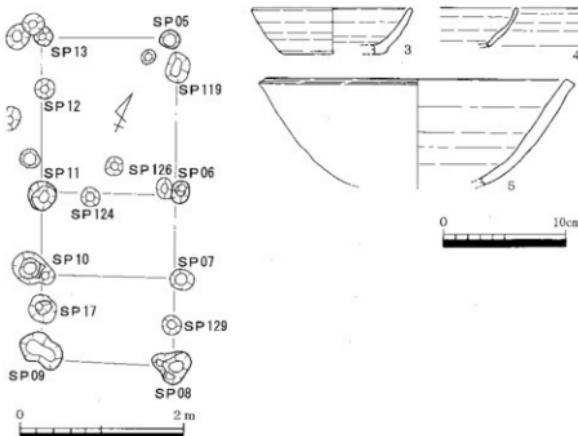
第77図 S B01平面図 (S = 1/60) 及び出土遺物 (S = 1/4)

### S B02 (第78図)

調査区中央やや北東よりで検出した掘立柱建物跡である。後述するS B03と重複関係を有し、S P23を共有する。桁行2間、梁間1間 ( $4\text{m} \times 1.6\text{m}$ 、床面積 $6.4\text{m}^2$ ) を測る側柱建物である。桁行2間としたが、S P06・08間に、S P09・11間にS P07・10がそれぞれ等間隔に位置しており、3間となる可能性も否定できない。上面埋土はいずれも灰黄褐色混砂粘質土となり、検出面からの深度は0.2m前後を測る。主軸方位をN $22^\circ\text{W}$ にとり、S B01ないし周辺地形にはば直交した位置関係を呈する。

3~5はS B02を構成する可能性が高いS P10からの出土遺物である。3・4は土師質土器壺である。3は口径13.2cmを測り、口縁部はかすかに内溝気味に立ち上がり、底部は突出する。4は器壁の厚みが薄く、口縁部は直線的に外傾し、端部のみ直立する。後述する報文番号25に酷似した形態となる。ほぼ全面に被熱痕及び煤の付着を認める。5は須恵器鉢である。口縁部は直線的に開き、端部下端を横方向に小さく引き出し、上端をわずかに擒み上げる。器表面の摩滅が激しく外面の調整は明らかではない。産地不明であるが、十瓶窯産須恵器の可能性が高いと考えたい。

以上、S B02は出土遺物の年代観から、13世紀前葉を中心とした時期の所産と理解したい。



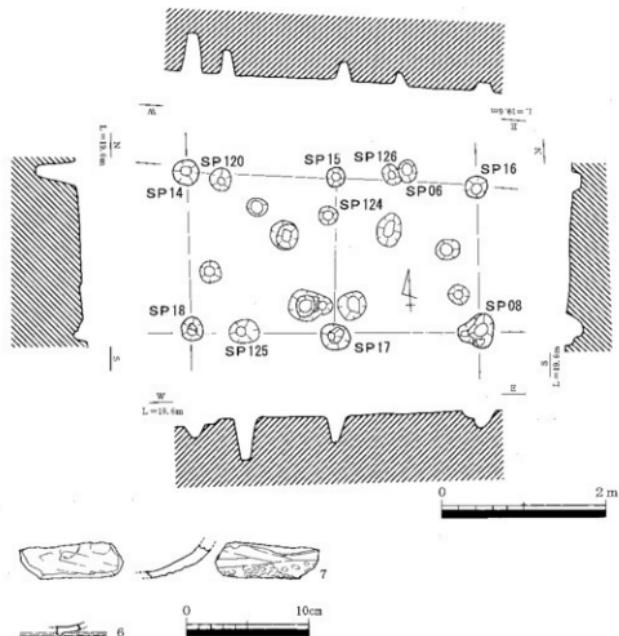
第78図 S B02平面図 ( $S=1/60$ ) 及び出土遺物 ( $S=1/4$ )

### S B03 (第79図)

調査区中央部やや北東よりで検出した掘立柱建物跡である。桁行2間、梁間1間 ( $3.6\text{m} \times 2\text{m}$ 、床面積 $7.2\text{m}^2$ ) を測る側柱建物である。上面埋土はいずれも灰黄褐色混砂粘質土となり、検出面からの深度は0.2~0.3m前後を測る。主軸方位をN $88^\circ\text{W}$ にとり、ほぼ東西を指向する。

6・7はS B03を構成するS P17・14の出土遺物である。6は瓦器碗である。高台断面形状は三角形を呈し、矮小化が激しい。器表面のカーボンは消失し、ヘラミガキ等は確認できない。7は土師質土器鍋の可能性が高い。外面には格子叩きを認める。

以上、S B03は出土遺物の年代観より13世紀中葉前後の所産と理解したい。



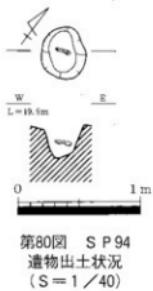
第79図 S B03平・立面図 (S = 1/60) 及び出土遺物 (S = 1/4)

#### 柱穴 (第80・81図)

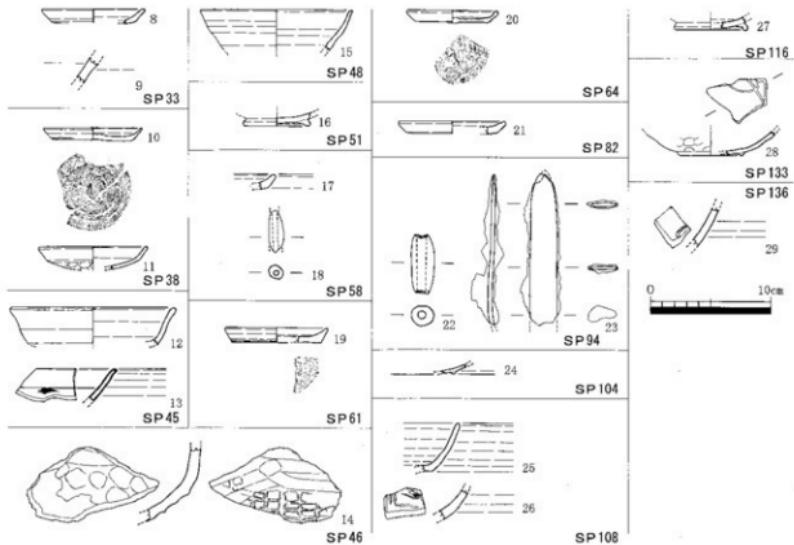
柱穴はいずれも上面埋土は灰黄褐色混砂粘質土となるが、断面形状や土層堆積状況を提示することは困難である。以下、出土遺物を中心に報告する。

8・9はS P33出土遺物である。8は土師質土器小皿である。口径8.5cmを測り、口縁部は小さく外反する。9は内外面に回転ナデ調整を認め、砂粒が大きく、粗い胎土が選択されており、東播系須恵器鉢と判断した。以上、S P33は出土遺物の年代観から、13世紀前葉～中葉の所産と理解したい。10・11はS P38出土遺物である。10は土師質土器小皿である。口径8.2cmを測り、口縁部は細長く直線的に開く。底口縁部には底部に連続するヘラ切り痕跡を認め、底面には板状圧痕も確認できる。11は瓦器皿である。器表面の炭素は消失し、内面のヘラミガキは確認できない。以上、S P38出土遺物は出土遺物の年代観から、13世紀前葉を中心とした時期の所産と考えられる。12・13はS P45出土遺物である。12は土師質土器壺である。口縁部は緩やかに外反し、底口縁部境が不明瞭な形態に復元できる。内面には煤の付着を認め、灯明具としての使用が窺える。13は中国産白磁碗である。口縁部は内湾気味に開き、端部を水平に折り返し、横方向に小さく引き出す。内面には櫛状工具による花文を認め、横田・森田分類白磁碗V-4 b類に該当する。以上、S P45は出土遺物の年代観から、13世紀前葉～中葉の所産と理解したい。14はS P46から出土した土師質土器鍋である。底面には格子叩き、体部外面にはそれに後出

するナデ調整を認める。15はS P 48から出土した土師質土器碗である。口径12.4 cmを測り、口縁部は端部のみ小さく外反する。16はS P 51から出土した土師質土器碗である。17・18はS P 58出土遺物である。17は土師質土器小皿である。口縁部は短く、コースター状を呈する。18は管状土錐である。19はS P 61から出土した土師質土器小皿である。口径8.25 cmを測り、口縁部は小さく外反する。13世紀前葉前後の所産か。20はS P 64から出土した土師質土器小皿である。口径7.6 cmを測り、底口縁部境が不明瞭な形態を呈し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。21はS P 82から出土した土師質土器小皿である。口径8.8 cmを測り、口縁部は大きく開く。22・23はS P 94出土遺物である。22は管状土錐である。23は鉄製小刀ないし鎌である。第79図に出土状況を示したが、底面から浮いた状態で出土したことが窺える。全長12.4 cm、最大幅3.2 cmを測り、先端部は三角形を呈し、基部はわずかに折れ曲がる。24はS P 86から出土した瓦器碗底部片である。高台の矮小化は著しい。25・26はS P 108出土遺物である。25は土師質土器壺である。口縁部は内湾気味に長く立ち上がり、報文番号4として報告した壺に酷似した形態を呈する。26は中国産青磁碗である。内面には花文を片彫りし、横田・森田分類龍泉窯系青磁碗I-2類に該当する。27はS P 116から出土した土師質土器碗底部片である。吉備系土師器碗の蓋然性は低く、在地産と考えられる。第4章第3節で設定した土師質土器碗E類に該当する。13世紀前葉前後の所産か。28はS P 133から出土した瓦器碗である。外面には指押さえ、見込みには連結輪状ヘラミガキを認める。尾上編年III-3期の所産と考えられる。29はS P 136から出土した中国産青磁碗である。内面には花文を片彫りし、横田・森田分類龍泉窯系青磁碗I-2類の可能性が高い。



第80図 S P 94  
遺物出土状況  
(S = 1/40)



第81図 柱穴出土遺物 (S = 1/4)

## 土坑

### S K01 (第82図)

調査区中央で検出した土坑である。円形を指向した平面プランを呈し、径0.7m前後を測る。舟底状の断面形状を呈し、検出面からの深度は0.15m前後を測る。底面には柱穴状の落ち込みを4基認め、S K01に先行ないし後出して掘削された柱穴の可能性も残る。それを示すように、2層とした灰褐色混砂粘質土はU字形の形状を呈し、花崗岩ブロックを含有する。

30はS K01から出土した土師質土器小皿である。口径7.4cmを測り、口縁部は短く開く。

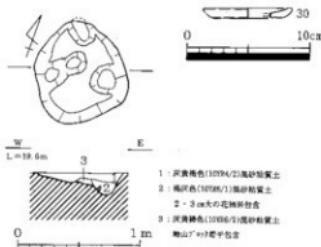
以上、S K01は出土遺物の年代観から、13世紀前葉～中葉の所産と理解したい。

### S K02 (第83図)

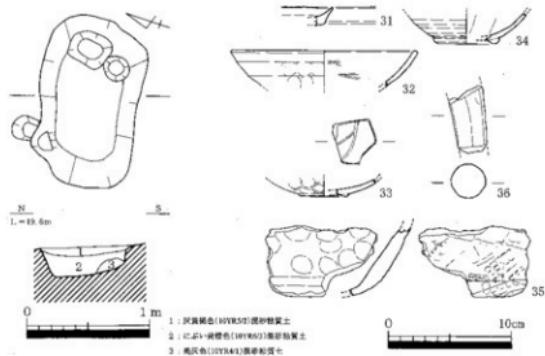
調査区中央やや西よりで検出した土坑である。隅丸方形の平面プランを呈し、長軸長1.4m、短軸幅0.8mを測り、逆台形ないし箱形の断面形状を呈する。検出面からの深度は0.25mを測り、埋土は2層に大別できる。下層にはにぶい黄褐色混砂粘質土、上層には灰黃褐色混砂粘質土がそれぞれ堆積し、南側底面外縁に褐灰色混砂粘質土をブロック状に認める。東側底面には柱穴状の落ち込みを認め、S B01の北東隅を構成する柱穴と考えられる。

31～36はS K02出土遺物である。31は土師質土器小皿である。口縁部は小さく外反し、底部は強く突出する。32～33は瓦器碗である。32は口径15.2cmを測り、器高に比して口径が大きい形態に復元できる。外面には指押さえ、内面には散漫なヘラミガキを認める。尾上編年Ⅲ～Ⅳ期。33は底部片である。高台は矮小化し、外面には指押さえの間を繋ぐようにヘラミガキを施す。34は須恵器碗である。高台断面形状は丸味を有し、内面にはコテ当て痕跡を認める。外面に回転ヘラミガキは確認できないが、比較的精良な胎土が選択され、西村窯産須恵器碗の可能性が高い。35は土師質土器鍋である。底部から「く」字形に屈曲し、逆台形状の体部となる。外面には格子叩きを認める。36は土師質土器足釜脚部片である。

以上、S K02は出土遺物の年代観から、13世紀前葉～中葉の所産と理解できる。但し、33として報告した瓦器碗は中谷遺跡では唯一の外面にヘラミガキを認める個体となり、12世紀末～13世紀前葉に位置付けられる。S K02はS B01に後出する重複関係を有し、S B02・03の重複関係を考慮すると、中谷遺跡で検出した遺構は少なくとも2時期に分かれる可能性が高い。



第82図 S K01平・断面図 (S=1/40)  
及び出土遺物 (S=1/4)



第83図 S K02平・断面図 (S=1/40) 及び出土遺物 (S=1/4)

### S K 03 (第84図)

調査区中央やや西よりで検出した土坑である。S B01を構成する柱穴との識別が不明瞭であるが、それに後出する可能性が高いと考える。平面形は不整形を呈し、南北長0.6m、東西長0.5mを測る。検出面からの深度は0.15mを測り、舟底状の断面形状を呈する。埋土は2層に大別でき、下層にいよい黄橙色混砂粘質土、上層に灰黃褐色混砂粘質土が堆積する。

37はS K03から出土した土師質土器坏である。口径12cm、底径8.4cm、器高3.2cmを測り、口縁部はわずかに外反する。底面には回転ヘラ切り及び板状压痕を認める。

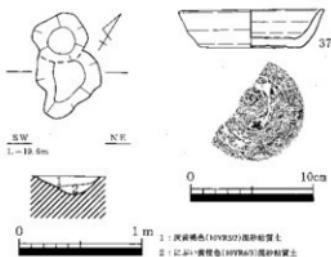
以上、S K03は出土遺物の年代観やS B01との重複関係から、13世紀中葉を中心とした時期の所産と考えられる。

### 包含層ないし機械掘削出土遺物（第85図）

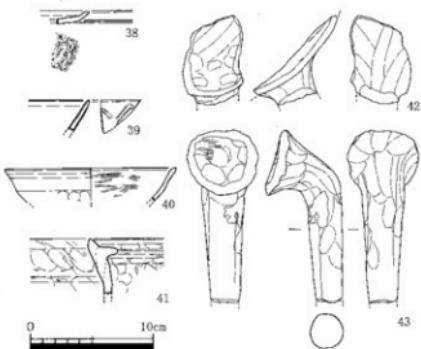
38・40・41・43は包含層出土遺物である。第75図4層出土遺物となるが、明らかに時期的に後出する土師質土器足釜を認め（報文番号41）、形成時期が不明な3層出土遺物も混在する。38は土師質土器小皿である。細片であるため径復元は困難であるが、口縁部は小さく外反する。40は和泉型瓦器碗である。外面にはヘラミガキは確認できず、尾上編年III-3期の所産となろう。41・43は土師質土器足釜である。41は体部上端部を強く折り曲げることにより鐸部を形成し、その上部に新たな粘土紐を付加して口縁部を成形する。口縁部は短く、鐸部長と大差は認められない。国分寺楠井遺跡の足釜の年代観を考慮すると、15世紀以降の所産となる。43は脚部片である。断面形状はほぼ正円形を呈し、「く」字形に屈曲する。

以上、包含層出土遺物は、土師質土器小皿（38）、和泉型瓦器碗（40）はおむね13世紀前葉～中葉に位置付けられるが、足釜は明らかに後出する（41・43）。ここでは、前者を第75図4層とした包含層出土遺物と理解し、検出遺構の年代観を考慮して、13世紀中葉の所産と考えたい。足釜については、4層上位に堆積した3層出土と判断しておきたい。

39・42は機械掘削時に出土した遺物である。第75図4層出土遺物が主体となるが、一部3層に包含した遺物も混在する可能性が高い。39は中国産青磁碗である。外面には蓮弁文を認め、鍋は確認できない。横田・森田分類龍泉窯系青磁碗I-5a類に該当する。42は土師質土器足釜脚部片である。細片であるため、傾きには問題を残す。



第84図 S K 03平・断面図 ( $S = 1/40$ ) 及び出土遺物 ( $S = 1/4$ )



第85図 包含層ないし機械掘削出土遺物 ( $S = 1/4$ )

以上、包含層出土遺物は、土師質土器小皿（38）、和泉型瓦器碗（40）はおむね13世紀前葉～中葉に位置付けられるが、足釜は明らかに後出する（41・43）。ここでは、前者を第75図4層とした包含層出土遺物と理解し、検出遺構の年代観を考慮して、13世紀中葉の所産と考えたい。足釜については、4層上位に堆積した3層出土と判断しておきたい。

39・42は機械掘削時に出土した遺物である。第75図4層出土遺物が主体となるが、一部3層に包含した遺物も混在する可能性が高い。39は中国産青磁碗である。外面には蓮弁文を認め、鍋は確認できない。

横田・森田分類龍泉窯系青磁碗I-5a類に該当する。42は土師質土器足釜脚部片である。細片であるため、傾きには問題を残す。

## 第7章　まとめ

中谷遺跡は13世紀前葉～中葉という比較的短期間に営まれた集落である。尾根先端部に立地し、斜面地を断面L字形に削り込むことにより狭い平坦地を創出し、そこに柱穴を中心とした遺構が展開する。後世の削平によりカット面はその基部のみ遺存する。尾根の傾斜を考慮すると、元来2m以上の高さを有していた可能性が高い。遺構を検出した230m<sup>2</sup>という狭い範囲において、143基を数える柱穴を検出し、3棟の掘立柱建物を復元した。通常、中世集落を発掘すると、区画施設である溝状遺構や廐棄土坑等を認めるが、中谷遺跡では比較的狭いエリアに集中する5基の土坑を確認したに留まり、通常の集落とは一線を画する。出土遺物も20リットル入りコンテナ1箱と少なく、生活痕跡が稀薄な遺跡と表現することができる。

その生活基盤については、周間に水田域が少なく、林業ないし前面に所在する海との関連が想定できる。出土遺物には土錘も少量認めるが、長さ6cm前後に復元できる紡錘形の小型土錘に限られる。土錘の種類は網の差異に伴う漁業形態として反映するものと理解でき、出土遺物から大規模な漁業活動を生業とした集落を復元することは困難である。遺跡の性格を反映する内容として、その立地が挙げられる。第73図の遺跡位置図1によると、遺跡が立地する尾根は短く、汀線付近まで細長く延びる尾根に東西を挟まれる。遺跡に立つと、打伏の鼻とその西に所在する脇元漁港（青木海岸）東端部を点的に望み、その関連性が注目できる。第4章第2節で検討したように、脇元漁港は15世紀中葉の内容を示す『兵庫北閥入船納帳』に登場する「纏箸」港である可能性が高い。また、中谷遺跡の前面には漢代～元までの中国銭7,431枚を備前焼甕に埋納した内容が確認されている（中谷備蓄銭、森下1995）。一部には縉銭の状態も確認でき、最新銭と備前焼甕の年代観から、14世紀後半に埋納された備蓄銭であったことが窺える。中谷遺跡とは直線距離で数十mと近接した位置関係を示し、1世紀近い隔たりを認めるが、示唆的な内容となる。

こうした立地状況と周辺遺跡内容から、中谷遺跡は海、限定すれば港との関連が指摘できる。掘立柱建物を構成する柱穴群が主体を占め、その他の生活痕跡に乏しい遺構内容、点的な眺望を得るために多量の労働力を投資した限定的な場所への立地という視点に立てば、中谷遺跡は計画的に配置された集落と理解できる。その背景として、後の「纏箸」港に繋がる港湾施設が挙げられる。中谷遺跡における土器・陶磁器の產地別器種組成は積算していないが、大山遺跡と同じく瓦器碗・皿の保有率は高い。第4章第2節で検討したように、その要因として皇室領莊園の存在を挙げ、貢納物を京都へ運搬する梶取に石清水神社（八幡宮）が関与し、その帰り荷としての瓦器碗・皿が搬入された可能性を想定した。中谷遺跡は大山遺跡とは近接し（直線距離で400m）、時期的にも平行する。互いに関連した集落と考えられ、『寛永10年讃岐国絵図』にある広義の大山を形成するものと理解したい（第64図）。大山遺跡がその母胎となる可能性は低いが、少なくとも中谷遺跡は「纏箸」港に繋がる脇元漁港に関連した集落と考えたい。

## 註釈

- (註1) 当埋蔵文化財調査センター渡部明夫氏よりご教示を得た。
- (註2) 当センター柏 徹哉氏並びに松田朝由氏にご教示を得た。
- (註3) (財) 濑戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏のご教示を得た。記して感謝の意を表したい。
- (註4) 香川県において山茶椀ないし古瀬戸を検出した遺跡を以下に挙げる。
- 高松城跡（西の丸町地区）II・S X b 16出土の山茶椀（南部系山茶椀5型式）：佐藤2003
- 松並・中所遺跡・Ⅲ区C第1整地土出土の山茶椀（尾張型山茶椀3型式）：松本2000
- 西打遺跡・S X 03・04の平椀（古瀬戸後期様式Ⅲ期）、S D 02下位の山茶椀（尾張型）：山下・信里編2002
- 大山遺跡・S D 07の山茶椀（北部系=東濃系山茶椀7型式）、排土中（古瀬戸四耳壺片？）：本報告書
- 空港跡地遺跡IV・S D f 18の古瀬戸四耳壺：佐藤2000 a
- 山南遺跡・S B 09の鉢皿：真鍋2003
- 浜の町遺跡（古瀬戸四耳壺ほか多数）：現在、報告書作成中
- (註5) 香川県教育委員会佐藤竜馬氏よりご指摘頂いた。

## 引用文献・主要参考文献

- 網野善彦1993「西園寺家とその所領」『國史学』第146号。
- 網野善彦2003「中世前期の都市と職能民」『日本の中世6 都市と職能民の活動』中央公論新社
- 今尾文昭1994「豊龍山古墳埴輪にともなう棺—伝中山大塚古墳試料の再検討ー」『考古学雑誌』第80巻 第1号
- 大久保徹也1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下川津遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 大久保徹也1995「上天神遺跡における弥生後期土器の構成」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6号 上天神遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 大久保徹也1999「首長墓から見た讃岐地域の動向(発表要旨)」「シンポジウム古墳時代における日向の地域性 古墳の形と分布から何がわかるか」宮崎県埋蔵文化財センター
- 尾上 実1983「南河内の瓦器窯」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』
- 尾上 実・森島康雄・近江俊秀1995「瓦器窯」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 海邊博史2002「讃岐の中世土葬墓ノート」『中世都市 鎌倉と死の世界』五味文彦・齊木秀雄編 高志書院
- 柏 徹哉・松田朝由2002「香川に分布する凝灰岩造物の概要」『石造物研究会 第3回研究会資料 二上山凝灰岩の石切場と石造物-生産地と消費地-』
- 片桐孝浩1994「古代から中世にかけての土器様相-香川県における予察ー」『中小河川大足川改修工事(津の郷橋~弘光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 川津元結木遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 河上智作・中世土器研究会1993「淀川・木津川河床の採集資料」『中世土器の基礎研究Ⅸ 中世前期の流通-瀬戸内・淀川水系を中心に-』日本中世土器研究会
- 北山健一郎1995「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5号 六条・上所遺跡」(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 木戸雅寿1993「石鍋の生産と流通について」『中世土器の基礎研究』Ⅸ 日本中世土器研究会
- 木戸雅寿1995「石鍋」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 國木健司1997「香川県」『古代学協会四国支部 第11回大会発表資料 瀬戸内中期古墳社会の変動と要因』

- (財)徳島県埋蔵文化財センターほか1996『中島田遺跡Ⅱ－都市計画道路常三島中島田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 佐藤竜馬1995『植井産土器の羅年』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第18冊国分寺楠井遺跡』
- (財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 佐藤竜馬1998『十瓶山窯と亀山窯』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要』IV (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬2000a『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡IV』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 佐藤竜馬2000b『西村型土器櫛の系譜』『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』VII (財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬2003『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 津田町史編集委員会1986『再訂 津田町史』
- 中野晴久1995「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 乗岡 実2000「備前焼檜鉢の編年について」『第3回 中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- 橋本久和1980『中世土器研究予察』『高槻市文化財調査報告書 第13冊 上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
- 橋本久和1992『中世土器研究序論』真陽社
- 林辰三郎編1981『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版
- 広瀬和雄1992「前方後円墳の畿内羅年」『前方後円墳集成 近畿編』山川出版社
- 福家清司1993「中世土器の流通をめぐって－徳島市中島田遺跡出土遺物を通して－」『中近世土器の基礎研究Ⅷ 中世前期の流通－瀬戸内・淀川水系を中心に－』日本中世土器研究会
- 福家悲衛1965『香川県通史 古代・中世・近世編』
- 藤澤良祐1987『本業焼の変遷(1)』『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 VI』瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐1997『中世瀬戸窯の動態』『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要』第5輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 平凡社1989『日本歴史地名体系 第38巻 香川県の地名表』
- 真鍋昌宏2003『県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 山南遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 松本和彦2000『都市計画道路錦町国分寺線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 松本和彦2001『炭焼き窯について』『国道193号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 岡清水遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 松本和彦2003『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 森 格也ほか1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 森下英治1995『津田町鶴羽発見の備蓄錢』『香川県埋蔵文化財発掘調査年報 平成6年度』香川県教育委員会
- 森下友子ほか1992『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 東山崎・水田遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

- 森島康雄1992「畿内産瓦器焼の併行関係と層年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会
- 森田 稔1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 山下平重・信里芳紀編2002『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 西打遣跡Ⅱ』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 山本悦代1993「吉備系土師器焼の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書 第6号 鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財研究センター
- 山本悦代1998「岡山南部における土師器鍋の変遷」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書 第11号 鹿田遺跡4』岡山大学埋蔵文化財研究センター
- 山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 吉岡康輔1997「新しい交易体系の成立」『考古学による日本歴史 9 交易と交通』雄山閣出版株式会社
- 横田賢次郎・森田 猛1978「太宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集4』
- 脇田晴子1986 a 「中世土器発掘と商品流通 素描」『岩波講座 日本考古学』月報7 岩波書店
- 脇田晴子1986 b 「中世土器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』II 日本中世土器研究会
- 渡部明夫1990「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第九冊 永井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 渡部明夫1992「香川県『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社

## 楠谷遺跡

### 第8章 調査の経緯と経過

#### 第1節 調査に至る経緯

四国横断自動車道津田～引田間の建設については、平成5年に建設大臣から日本道路公団總裁に対しして建設の施工命令が下され、平成6年には路線の中心杭の打設が行われた。津田～引田間の調査に至る経緯については第1章第1節と共通するので、そちらを参照されたい。

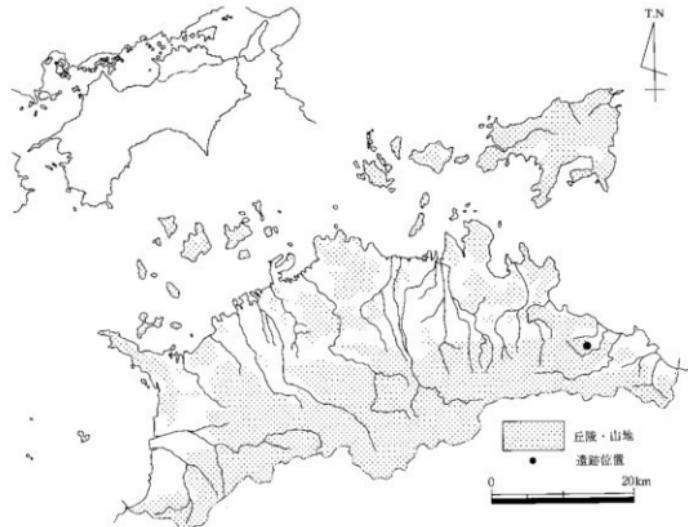
分布調査により津田～引田間では22の調査対象地区が設定され、平成8年度からはこれらの遺跡内容を把握するため、用地買収の進捗に合わせて予備調査を実施し、隨時本調査の範囲を確定した。

楠谷遺跡は、東かがわ市（旧大内町）楠谷地区に含まれる。予備調査はA・B・C地区に分けて平成8～10年度にかけて実施した。その結果、丘陵地に当たり当初墳墓の存在が期待されたA・C地区については遺構・遺物は検出されず、予備調査をもって調査を終了した。予備調査の結果遺構・遺物が確認されたB地区については平成9年度に本調査を実施した。

#### 第2節 調査の経過

##### 1. 調査の経過

楠谷遺跡の発掘調査は平成9年7月1日～9月30日の期間で実施した。調査面積は1,500m<sup>2</sup>、直営方式で実施した。調査区は調査前の水田面ごとにⅠ～Ⅲ区に分けたが、発掘調査は区ごとに分けずに実施した。調査範囲が狭く、遺構密度もあまり高くないことから、航空測量は実施せず、ラジコンヘリによ



第86図 遺跡位置図1

る写真撮影にとどめ、遺構の平面図は基準杭による割付により、調査員が手書きで行った。

整理作業は平成15年4月1日～5月31日まで実施した。

## 2. 発掘調査および整理作業の体制

発掘調査および整理作業の体制は第7表のとおりである。

発掘調査		整理作業	
香川県教育委員会 文化行政課			
平成9年度		平成15年度	
課長	菅原 良弘	課長	北原 和利
課長補佐	北原 和利	課長補佐	渡邊 勇人
副主幹	渡部 明夫	副主幹	大山 真充
係長	山崎 隆	主任	酒井 幸子
主査	星加 宏明（～5.31）	主任	片桐 孝浩
主事	村松 崇志（6.1～）	主任	小林 正直
主事	打越 和美	文化財専門員	佐藤 竜馬
文化財専門員	木下 晴一	文化財専門員	松本 和彦
技師	塙崎 誠司		
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター			
平成9年度		平成15年度	
所長	大森 忠彦	所長	中村 仁
次長	小野 善範	次長	渡部 明夫
副主幹	田中 秀文	副主幹	野保 昌弘
係長	前田 和也	係長	多田 敏弘
主任主事	西川 大	主任	塙崎かおり
参考	近藤 和史	主任主事	田中 千晶
主任文化財専門員	大山 真充	文化財専門員	森 格也
文化財専門員	橋本 清輝	文化財専門員	山元 素子
技師	香西 亮		
調査技術員	糸山 晋		

第7表 発掘調査および整理作業の体制

整理作業に携わった方々は以下のとおりである。

整理員 猪木原美恵子

整理補助員 矢野ゆかり

整理作業員 森光恵、松本恭子、白川智子、米田静江、柴垣智美

## 第9章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

楠谷遺跡は東かがわ市（旧大内町）水主楠谷に所在する。西側から延びる標高271mを最高点とする那智山の尾根に挟まれた谷筋に立地する。南側には旧大内町内最大の与田川が流れ、北側に平野を形成する。すぐ北側、遺跡が立地する谷筋に沿って番屋川の支流楠谷川が流れる。周囲には川田池をはじめ谷筋の水をせき止めた溜池が点在する。

### 第2節 歴史的環境

旧大内町内では近年四国横断自動車道建設に伴う事前調査で、発掘調査例が飛躍的に増加し、資料も格段に増えた。

縄文時代の遺跡の調査例は少ないが、与田川中流域で草創期の有尖頭器が採集されているほか、大社遺跡で縄文時代の石器が採集されている。金毘羅山遺跡では前期と考えられる玦状耳飾が自然河川の埋土中から出土している。県道原間遺跡では自然河川に打ち込まれた杭が後期の土器とともに検出されている。金毘羅山遺跡では縄文時代晚期の突帯文土器および、それよりやや古い時期の土器が後世の遺構などから多量に出土しており、近在に当該期の集落が予想される。

落合遺跡では工事中の不時発見であったが、弥生時代前期末の土器が多数出土した。弥生時代中期後半になると与田川中流域の低丘陵上および段丘上を中心に遺跡が増加する。仲善寺遺跡では中期末の堅穴住居が検出され、遺跡はさらに東側へ広がることが予想される。金毘羅山遺跡では溝が検出されたほか、住居の可能性のある遺構も検出されている。その他水主神社遺跡では中期後半の土器が出土している。楠谷遺跡では遺構は検出されなかったものの、包含層から中期後半の遺物が出土している。

弥生時代後期後半～古墳時代前期にはさらに遺跡数が増加する。集落遺跡では与田川東岸に弥生時代後期に集落が展開される原間遺跡がある。原間遺跡は後期中葉（下川津I～II式）に最も集落が繁栄し、その後も弥生時代後期後半まで続いた。与田川中流域南岸では仲善寺遺跡で弥生時代後期中葉～庄内式段階の集落が検出された。調査範囲が狭く全容は明らかではないが、灌漑用と見られる溝が検出されており、東側に集落の展開が予想されている。金毘羅山遺跡では後期前半の堅穴住居と自然河川が検出されている。川跡からは当該期の土器が多量に出土しており、周辺に集落の存在が想定されている。その他、水主神社遺跡、幸田池西遺跡、別所池田遺跡、風呂遺跡などの集落遺跡がある。この時期には低丘陵地に墳墓関係の遺跡が見られるようになる。金毘羅山遺跡では丘陵部や平地部で壇棺が検出され、与田川を挟んだ対岸の塔の山南遺跡でも丘陵の尾根上に土塂墓および箱式石棺墓が検出されている。その他、別所遺跡では器台が、笠塚遺跡では壇棺が発見されている。

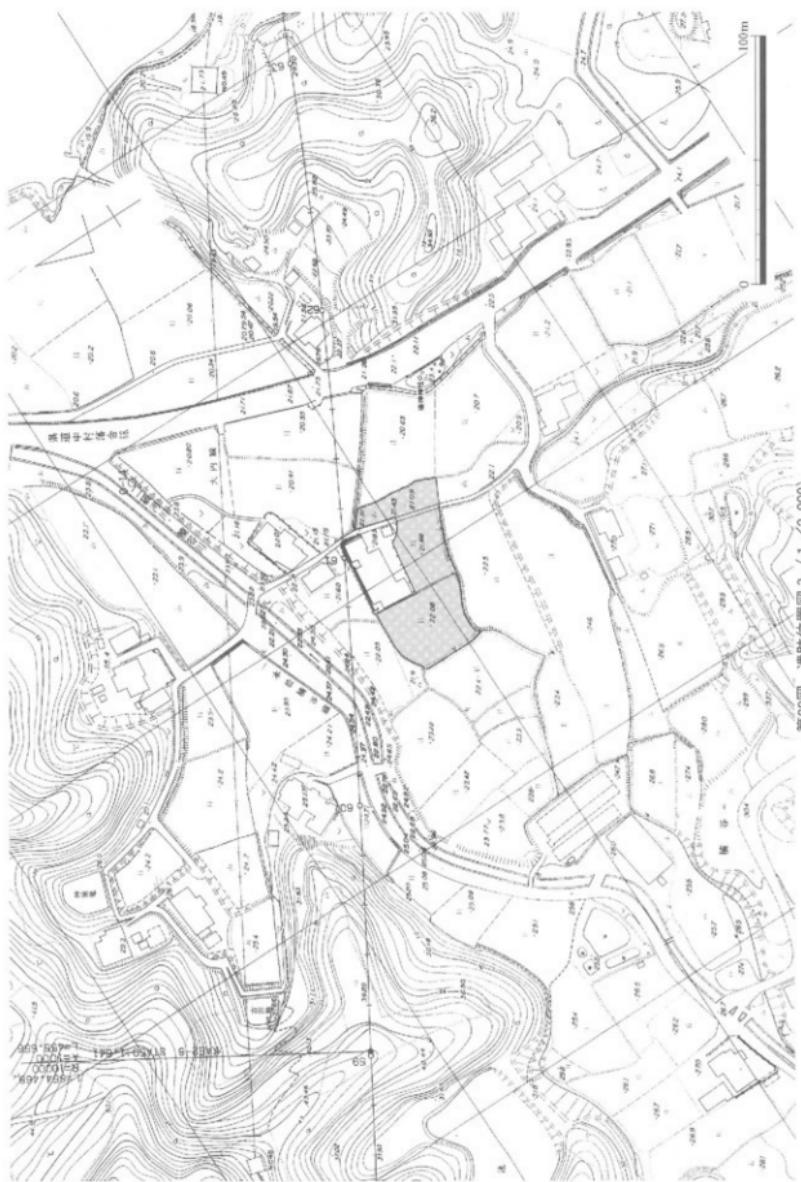
古墳時代前期には引き続き金毘羅山遺跡や仲善寺遺跡が営まれる。また、与田川東岸には旧大内郡内唯一の前方後円墳である大日山古墳が築造される。

古墳時代中期の遺跡はこれまであまり知られていないかったが、原間遺跡（平成13年度県道部分）で堅穴住居が検出されているほか、原間遺跡の東西の丘陵部分ではこの時期の古墳群が造営される。なかでも原間遺跡の東丘陵に築造された原間6号墳は主体部に木構造を持ち、甲冑や太刀等のほか、全国的にもあまり類例を見ない三累環頭太刀が出土しており、朝鮮半島との関係が指摘されている。今後調査例が増加すればこの時期の集落遺跡も増加することが考えられる。

第87圖 道路位置圖2 (1/10,000)



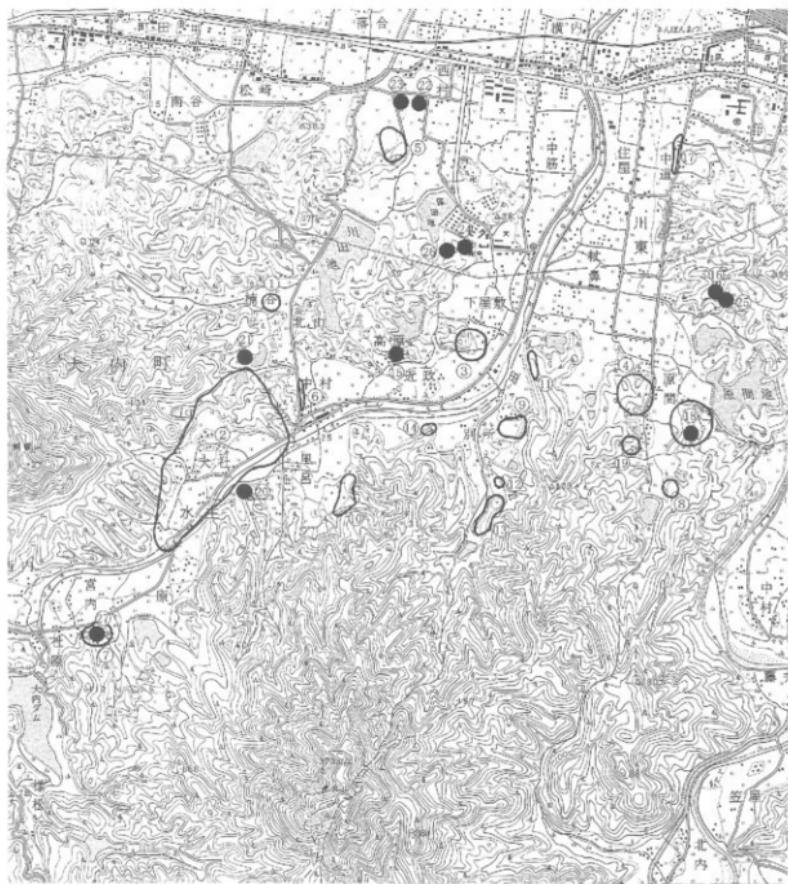
第88圖 週轉位置圖 3 (1/2,000)



古墳時代後期には住居遺跡で60棟もの竪穴住居が検出されたほか、金毘羅山遺跡でも竪穴住居が検出されている。また、横穴式石室を持つ原間1号墳・2号墳が築造されるのもこの時期である。

その他時期が明らかでない古墳として尾長山古墳、楠谷古墳、百襲姫古墳、西村古墳、清塚古墳、与田寺山古墳などが上げられる。

古代以降では集落遺跡はあまり知られておらず、原間遺跡で7世紀前半～平安時代の集落を検出している程度である。大日山古墳のすぐ近くには平安時代の瓦が出土する高松廃寺がある。現在は礎石が1点残るのみである。与田川西岸には行基草創の伝説を持つ与田寺があるが、裏付けとなる資料はなく伝説の域を出ない。南部山間部には式内社にあげられる大水主神社がある。



- |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|----------|
| ① 桶谷遺跡   | ⑥ 仲善寺遺跡  | ⑪ 塔の山南遺跡 | ⑯ 大日山1号墳 | ㉑ 楠谷古墳   |
| ② 大社遺跡   | ⑦ 水主神社遺跡 | ⑫ 別所遺跡   | ㉒ 住屋遺跡   | ㉒ 西村古墳   |
| ③ 金毘羅山遺跡 | ⑧ 幸代池西遺跡 | ⑬ 飛谷遺跡   | ㉓ 原間6号墳  | ㉓ 清塚古墳   |
| ④ 原間遺跡   | ⑨ 別所池田遺跡 | ⑭ 笠家遺跡   | ㉔ 原間1号墳  | ㉔ 与田寺山古墳 |
| ⑤ 落合遺跡   | ⑩ 風呂遺跡   | ㉕ 高原遺跡   | ㉕ 長尾山遺跡  | ㉕ 高松庵寺   |

第89図 周辺の遺跡 1/25,000

## 第10章 調査の成果

### 第1節 予備調査

予備調査は対象地区をA～C地区に分けて行った。

A地区は楠谷川の北側に位置する低丘陵地部分である。尾根線上、およびそれに直交する方向に合計8本のトレンチを設定した。その結果、ほとんどのトレンチで表土直下に花崗岩風化土壤層の地山が検出された。後世の削平により遺構面が失われ、平坦地となっている箇所が多く、旧地表を留める箇所においても遺構などは確認できなかった。周辺では明治時代以降と考えられる瓦質土器片が出土したのみである。以上により当該地区では遺構・遺物が遺存している箇所はないものと判断でき、本調査は不要と判断され、調査は終了した。

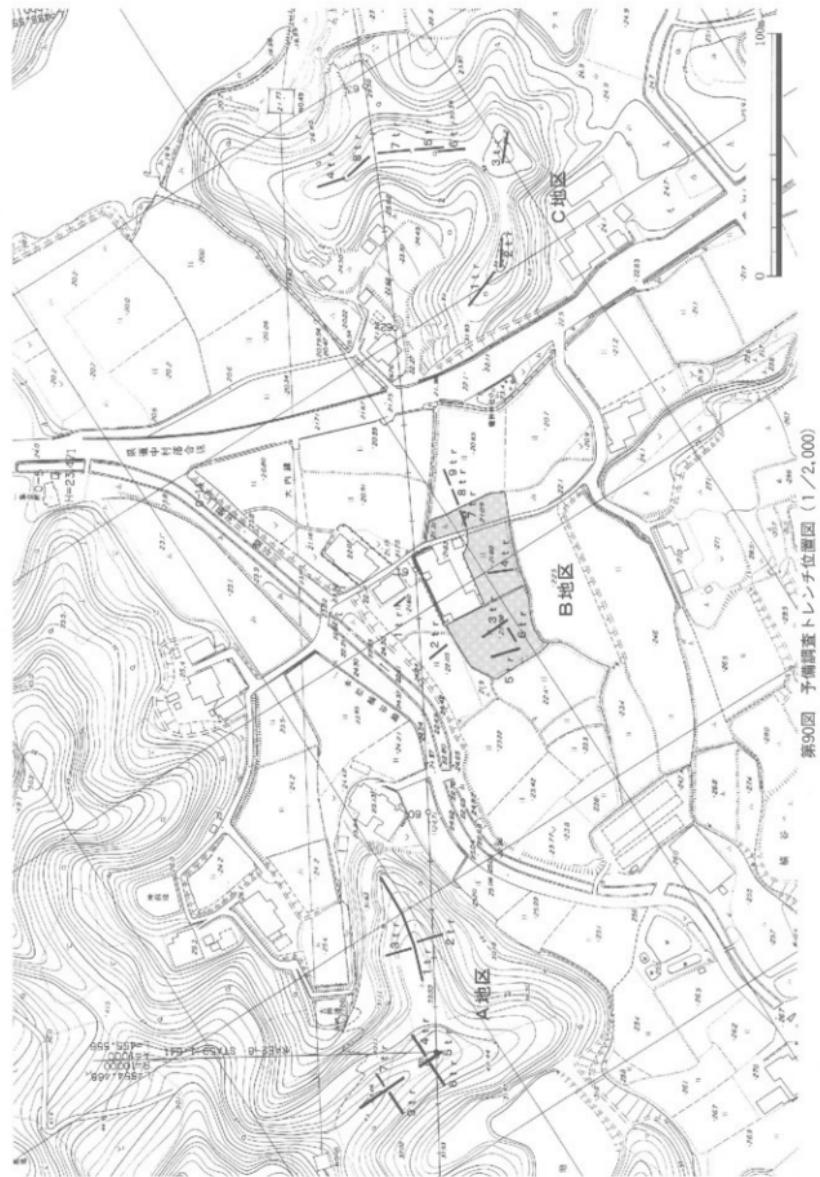
B地区は低丘陵地に挟まれた楠谷川の南岸の平地部分で、おおむね等高線に直交する方向に9本のトレンチを設定した。その結果、より川に近い1・2トレンチでは耕作土・造成土・床土直下で砂層・シルト層のラミナ状の堆積や粗砂層の厚い堆積が見られ、楠谷川の氾濫原であったことが判明した。3～5トレンチではおもに各トレンチの北側で氾濫原に起因する洪水砂層が認められたが、残りの部分では淡青灰色砂混じりシルト層の扇状地性堆積層が認められ、その上位では遺物包含層が確認できた。1トレンチと3トレンチの間で東西方向に設定した6トレンチでも西端部付近で洪水砂層が認められたが、他の箇所では3～5トレンチと同様の状況であった。7～9トレンチは南側から延びる谷状地形に直交するように東西方向に設定した。7トレンチでは淡褐色中砂の洪水砂層の下部に須恵器を含む旧流路が認められ、その下部で扇状地性堆積物の黄灰色砂混じりシルト層のベースが見られた。8・9トレンチでは耕作土・床土などの下部に洪水砂層が認められ、湧水も著しかった。なお、9トレンチでは湧水地点より約60cm下部から備前焼擂鉢が出土した。

以上の結果から、遺物包含層や遺構が認められ、ベースが比較的安定していた3～6トレンチを含む1,500m<sup>2</sup>を本調査対象地とし、河川の氾濫原であった1・2・8・9トレンチ部分は予備調査を持って調査終了とした。

C地区はB地区東側の低丘陵地に相当し、丘陵部の尾根線上に8トレンチまで設定した。その結果、いずれのトレンチでも表土の直下に花崗岩風化土壤層の地山が検出され、遺構・遺物は確認できなかった。従って、本調査は不要と判断され、これを以って調査を終了した。

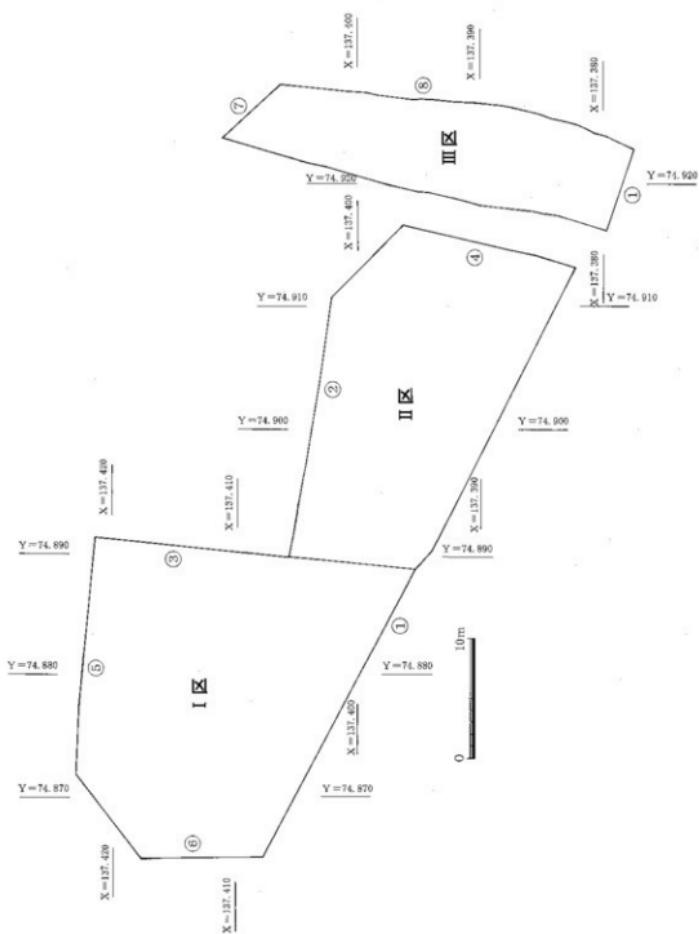
### 第2節 調査区

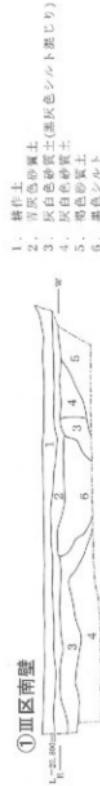
調査地は県道中村落合線沿いの谷筋の水田で、調査面積は1,500m<sup>2</sup>である。調査地は3面の水田に分かれているため、調査区は水田区画ごとに西側からI・II・III区と設定した。周辺地形から調査地は両側を尾根に挟まれた大きな谷筋上に立地し、北側に楠谷川が流れ、南側からは小さい尾根が南西から北東方向へ派生しているのが見て取れる。予備調査の結果からI・II区の大部分は南西方から延びる尾根線の延長上に立地し、I区北西隅には楠谷川の氾濫原と考えられる洪水砂層の堆積が見られた。III区は道を挟んで東側に位置するが、南西方向の大きい谷筋上に位置するとともにI・II区の小さい尾根の東に位置する小規模の谷上にも位置する。予備調査の結果から旧流路が検出されている。



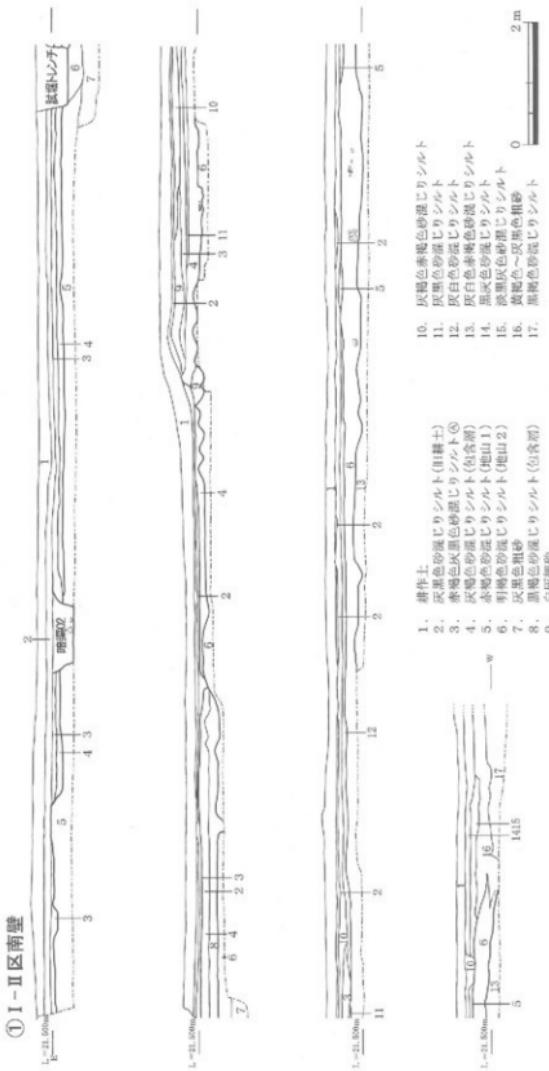
第90図 予備調査トレーンチ位置図 (1/2,000)

第91図 調査区割図、土層位置図（1／400）



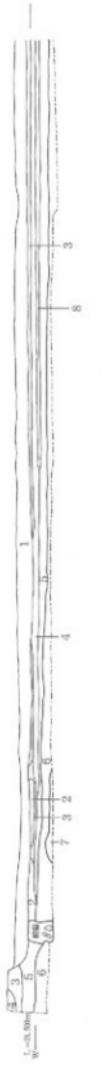


①Ⅲ区南壁



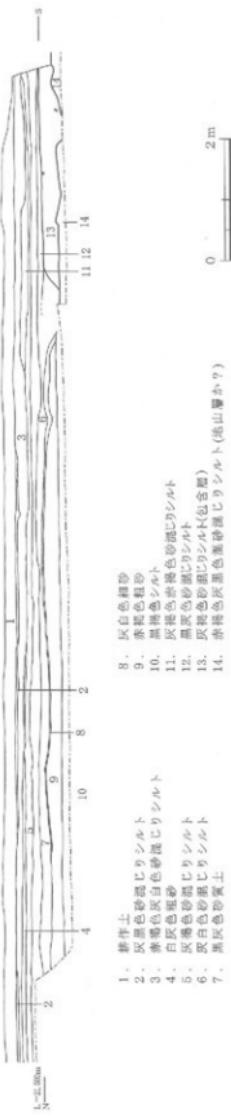
第92図 I~III区南壁土層図(1/80)

② II 区 北壁



- 1. 農作土
- 2. 花崗土
- 3. 淡褐色砂漬じりシルト
- 4. 帶褐色灰褐色砂漬じりシルト
- 5. 淡白色褐色砂漬じりシルト
- 6. 淡褐色砂漬じりシルト(包含層)
- 7. 淡褐色赤褐色砂漬じりシルト
- 8. 淡褐色砂漬じりシルト

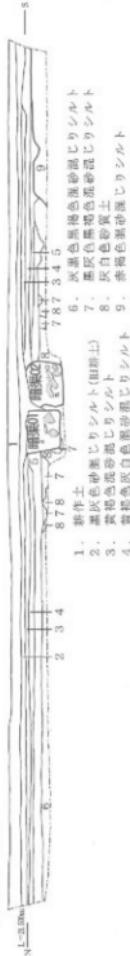
③ I 区 東壁



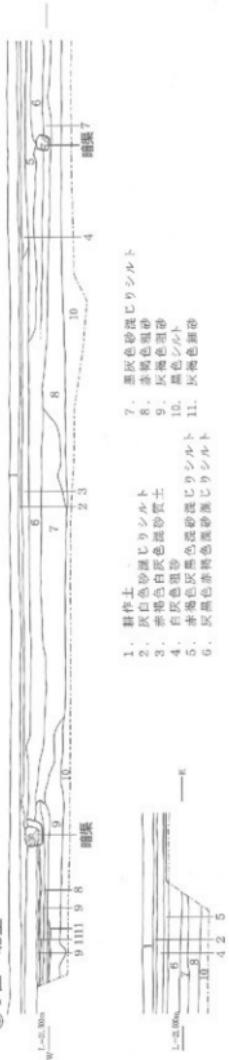
- 1. 農作土
- 2. 淡黑色砂漬じりシルト
- 3. 帶褐色灰褐色砂漬じりシルト
- 4. 白灰色風化
- 5. 淡褐色砂漬じりシルト
- 6. 淡白色砂漬じりシルト
- 7. 黑灰帶土
- 8. 淡白色粗沙
- 9. 黑褐色粗沙
- 10. 淡褐色砂漬じりシルト
- 11. 淡褐色砂漬じりシルト
- 12. 淡褐色砂漬じりシルト(包含層)
- 13. 淡褐色砂漬じりシルト(地山層か?
- 14. 淡褐色灰褐色砂漬じりシルト

第93図 II区北壁、I区東壁土層図 (1/80)

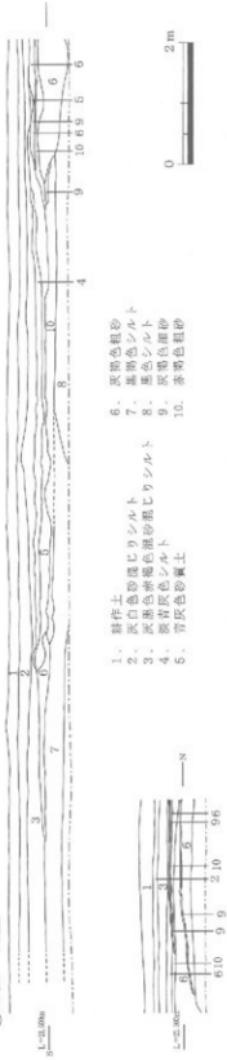
(4) II区 東壁



(5) I区 北壁



(6) I区 西壁

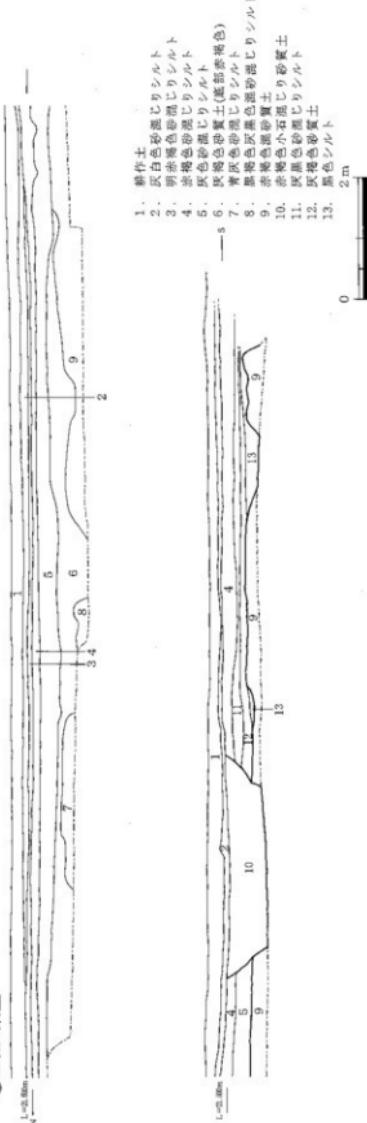


第94図 II区東壁、I区北壁、I区西壁圖 (1/80)

(7) III区 北壁



(8) III区 東壁



第95図 III区北壁、東壁土層図 (1/50)

### 第3節 基本層序

#### ① I～III区南壁土層（第92図）

調査区の南側の断面である。I区からII区へかけては緩やかに東へ傾斜するが、道を挟んだIII区は急激に地表面の標高が下がる。基本層序はI・II区はおむね1. 現耕作土 2. 灰黒色砂混シルト層（旧耕土層）3. 赤褐色砂混シルト層（ベース）が堆積し、I区ではその下部に明褐色砂混シルト層が入る。ベースの上部には遺物包含層である灰褐色砂混シルト層がI区の西端およびII区の東端を除いてほぼ全体に堆積する。包含層の堆積は西側（I区）で厚く東側で薄い。現地形では西から東へ緩やかに傾斜しているが、ベース面の標高はII区中央付近ではやや低いものの、ほぼ同一である。I区の西端では包含層を切って洪水砂の堆積が見られる。I区とII区の境付近では包含層の下部に溝が切り込まれている。道を挟んで東側に位置するIII区では現耕作土、青灰色砂質土（グライ化の進んだ旧耕土層か）が30cm程度堆積した下部に遺構面と思われる灰白色、褐色砂質土層があるが、いずれも不安定な層位である。

#### ② II区北壁土層（第93図）

II区北壁、調査区中央付近に当たる、東西方向の断面図である。基本層序は1. 現耕作土 2. 赤褐色砂混シルト 3. 灰白色砂混シルト 4. 灰褐色砂混シルト層（遺物包含層）である。4層は東側ほど薄く、東部1/3ほどの位置で消失する。ベースは西半部では赤褐色がかった灰褐色シルトであるが、東半部では不明瞭である。

#### ③ I区東壁土層（第93図）

微高地部分のはば中央部に当たる南北方向の土層のうちの北半分に当たる。基本層序はおむね他と同様であるが、包含層までの深さが64cmあり、他よりやや深い。南端部分では包含層の堆積が認められるが、南から3m付近から北側では洪水砂層の堆積に切れ、谷筋であったことがわかる。

#### ④ II区東壁土層（第94図）

微高地部分の東側の南北土層である。基本層序は他の土層図と同様、1. 現耕作土 2. 黒灰色砂混シルト（旧耕土）3. 黄褐色砂混じりシルト（床土）4. 灰黒色砂混じりシルト層で、ここでは包含層の堆積は認められない。ベースは南側では赤褐色砂混じりシルト層であるが、北側では不明瞭である。地形は南から北へ傾斜しており、南側では安定した微高地上を呈するが、北側では不安定である。

#### ⑤・⑥ I区北壁・西壁土層（第94図）

ともにI区東壁土層で観察できた旧河道の堆積が認められる土層である。基本層序はおむね1. 現耕作土・灰白色砂混じりシルト層（旧耕土）2. 白灰色粗砂（F e混）3. 赤褐色砂混シルト層 4. 灰黒色砂混じりシルト層 5. 黑灰色砂混じりシルト層 6. 赤褐色・灰褐色粗砂層 7. 黒色シルト層で、1～3層が確実に近世以降、6層以下は旧河道の堆積である。旧河道の堆積は上部に粗砂層、下部には暗褐色シルト層が堆積する。

#### ⑦・⑧ III区北壁・東壁土層（第95図）

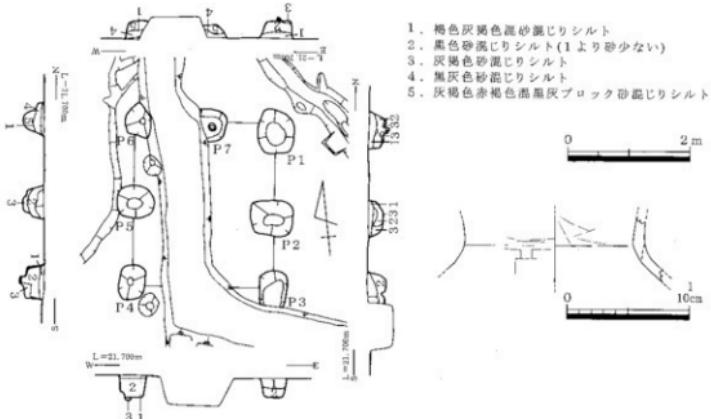
I・II区からは地盤が1段下がった水田面で設定した調査区の土層である。III区はI・II区より地表面は70cm程度低い。基本層序は1. 現耕作土・旧耕作土 2. 赤褐色砂混シルト層 3. 灰色砂混じりシルト層で、その下部でS R01を検出している。ベースは南側では赤褐色砂質土層であるが、北側では不安定な土層堆積状況になっている。

## 第4節 遺構・遺物

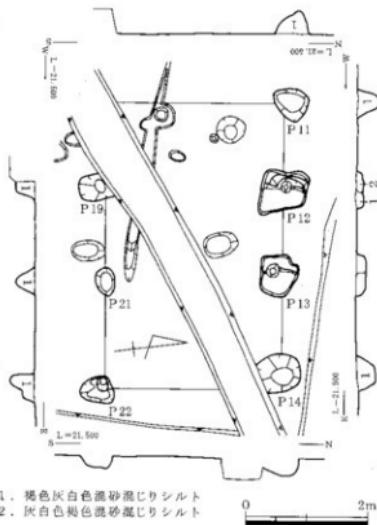
### 1. 弥生時代～古墳時代

S B01 (第96図、図版40・43)

II区西端部で検出した掘立柱建物である。桁行は2間(2.6m)、梁間は北側が2間(2.3m)、南側が1間(2.3m)で、主軸方位はN-7°-Eである。柱間は桁行は1.3~1.5m、梁間は1.1~1.2m/2.3mであった。柱掘り方は長方形～不整形で、1辺は40~70cm、深さ25~38cmで埋土はおおむね上部は褐色灰



第96図 S B01平・断面図(1/80)出土遺物(1/4)



第97図 S B02平・断面図(1/80)

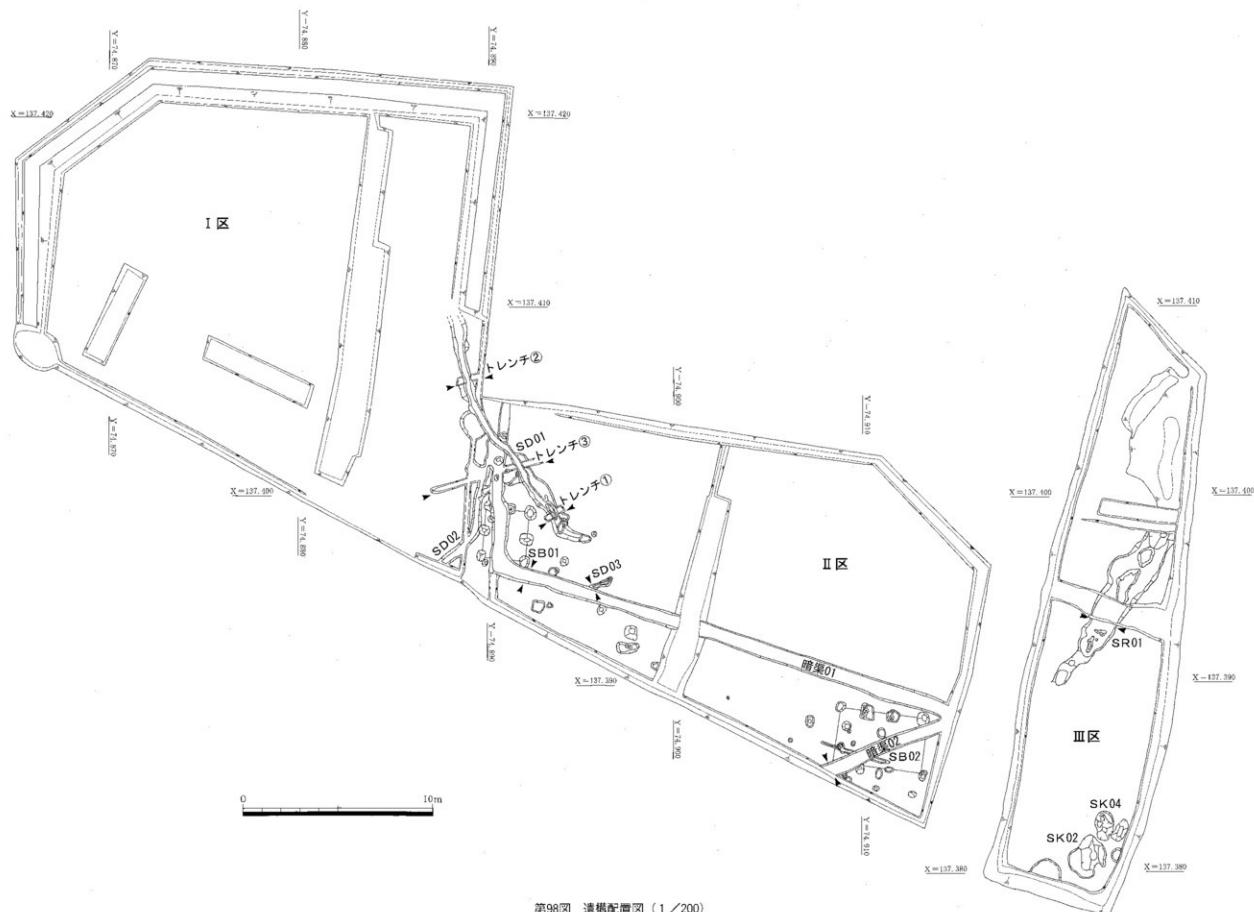
褐色混砂混じりシルト、下部は黑色砂混じりシルトである。柱痕があるものはおおむね直径10cm程度、北東隅のピットからは柱痕も出土した。S D01との切り合い関係は不明であるが、おそらくS D01より古いと思われる。

ピットからは弥生土器壺破片のほか、小破片が出土している。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

1は壺頸部。

S B02 (第97図、図版40)

II区南西隅で検出した掘立柱建物である。桁行は3間(4.6m)、梁間は1間(2.8m)で、主軸方位はN-80°-Wである。柱間は桁行は1.3~1.6m、梁間は2.8mであった。柱掘り方は方形～不整形で、1辺は30~70cm、深さ14~40cmで埋土は上部は褐色灰白色混砂混シルトである。柱穴からは土器の小破片しか出

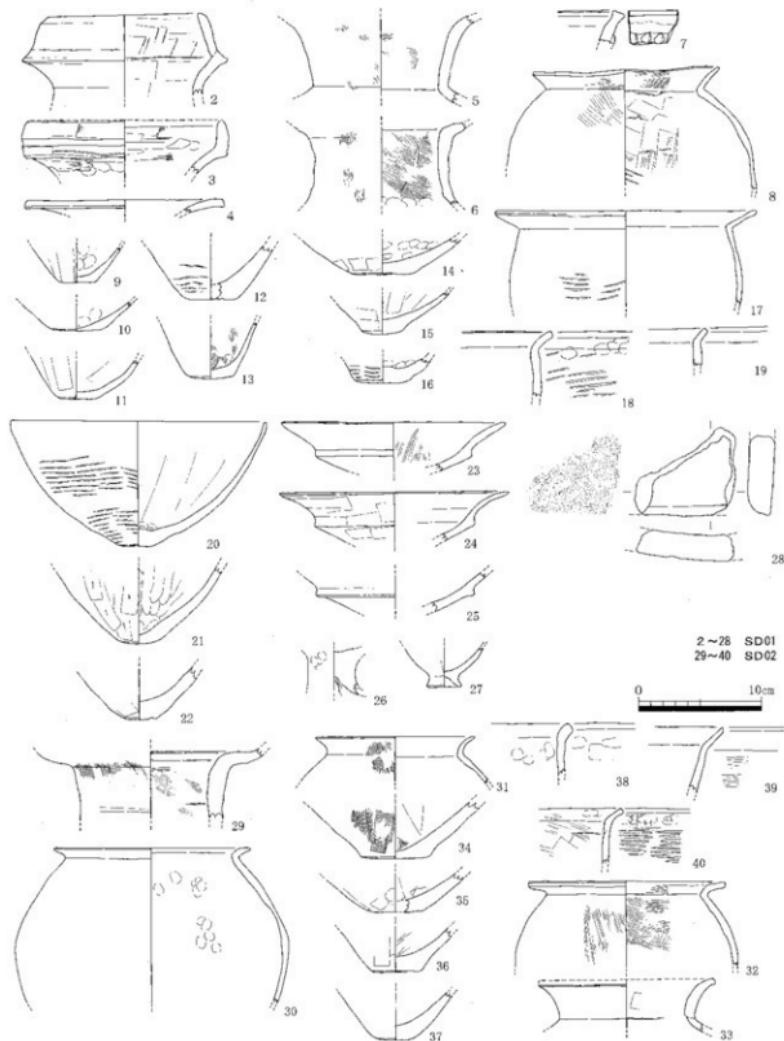


第98図 遺構配査図 (1/200)

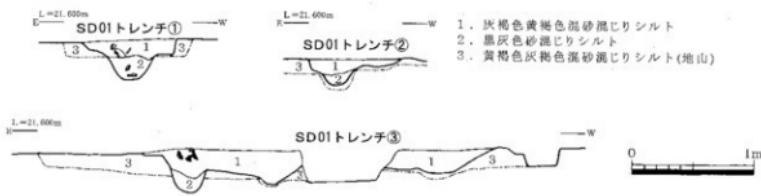
土せず時期は不明であるが、建物や柱穴の規模から S D01と同時期の可能性が高いと思われる。

S D01・02（第99～101図、図版44・45）

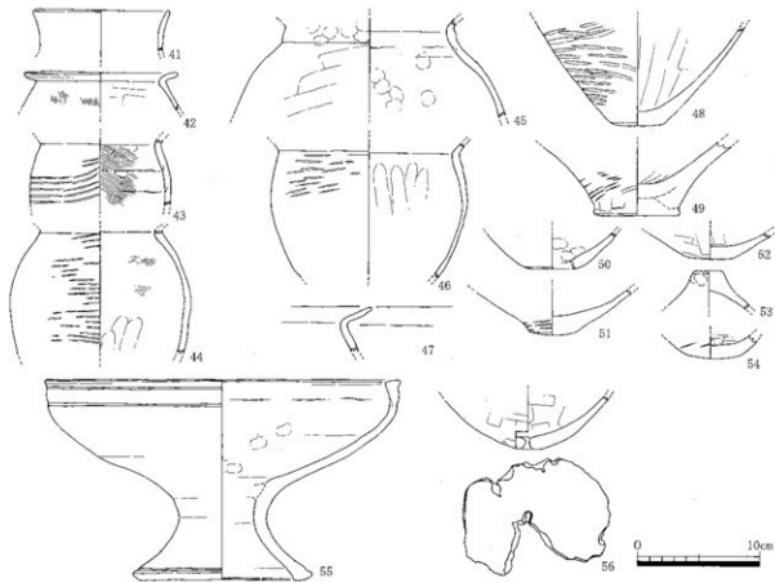
I区とII区の境で検出した溝である。谷筋に直交する方向で検出した。S D01は南東から北西方向へ流れ、北西側では谷筋と思われる旧河道により消失している。幅45～75cm程度、深さ20～35cmで、埋土は上



第99図 SD01・02出土遺物① (1/4)



第100図 SD01・02断面図 (1 / 40)



第101図 SD01・02出土遺物② (1 / 4)

層が灰褐色黄褐色混砂混じりシルト、下層は黒灰色砂混じりシルトである。断面形状は下層部分ではU字状を呈するが、上層部分は掘り方が崩れてなだらかな浅い皿状になっている。遺物は上層から出土している。

S D02はI区東端を南西から北東方向へ向くが、S D01と交差するあたりから延長部は不明となる。S D01とS D02が交差する部分では近世の暗渠01とも切り合っており、S D01とS D02が合流するのか、S D02の延長部は暗渠01によって壊されているのかは不明であるが、両者の埋土は共通しており、合流する可能性が高い。幅は40~60cm、深さ15cmで、埋土はS D01の上層と同じ層の単層であった。

2~28はS D01から出土した遺物である。2~7は壺。2・3は二重口縁の壺。2は頸部はほぼ完形で、頸部の立ち上がり部分に接合痕を残す。4は大きく開く口縁。5・6は頸部。5はやや外傾気味に、6は直線的に立ち上がる。7は口縁部小片。端部外面には剥離痕がある。頸部には押捺突帯がある。8は壺。体部は丸く、内外面ともにハケメ調整する。9~16は底部。17~22は鉢。17~19は口縁端部が屈

曲するもの。17・18は外面に叩き痕を残す。19は小片で傾きはやや不確か。20は楕型の器形。外面は叩き痕を明瞭に残す。21・22は鉢の底部と考えられる。21は外面にヘラ削り痕を明瞭に残す。23~26高杯。いずれも杯部底部と口縁部の境の屈曲が強い。23では内面に縦方向のヘラミガキを残す。26は高杯の脚部と杯部の接合部。27は製塙土器脚部。調整は摩滅して不明である。体部は丸みを持つものと考えられる。28は平瓦。須恵質の焼成。凹面には粗い布目痕を残すが、外面の調整痕は観察できない。上部包含層からの紛れ込みと考えられる。

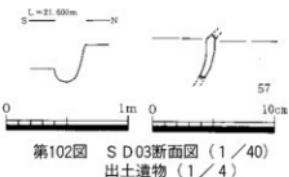
S D01の出土遺物の時期は7が弥生時代中期後半であることを除けば、おおむね弥生時代終末期~古墳時代初頭で、主体は古墳時代初頭と考えられる。

29~40はS D02から出土した遺物である。29は壺頸部。口縁部は丸みを持ちながら開く。30~33は甕。30は下川津B類土器。32は丸みを持つ体部で内外面ともハケを施す。33はやや長めの頸部を持つ。34~37は底部。38~40は鉢。いずれも口縁端部をやや外反させる。39・40は外面に叩きを施す。

S D02の時期もS D01同様弥生時代終末期~古墳時代初頭で、主体は古墳時代初頭と考えられる。

41~56はS D01とS D02が合流する場所付近で出土した遺物である。41は壺口縁部。口縁部はほぼ直立する。42~47は甕。43・44・46は体部に叩き目を明瞭に残す。43は小型で内面にはハケメと粘土紐の継ぎ目痕を明瞭に残す。48~54は底部。48・49・51は外面に叩き痕が残る。55は高杯。上面を覆う灰褐色混じリシルト層や上面精査、側溝掘り下げ時の出土遺物などとも接合関係にある。脚部は完形、杯部も1/2程度は接合した。脚部端部と口縁部からやや下がった位置に緩い凹線に入る。充填していた底部は剥離している。56は底部に焼成前の穿孔らしい孔がある。

出土遺物の時期は55が弥生時代中期後半であるほかは弥生時代終末期~古墳時代初頭と考えられる。



第102図 S D03断面図 (1/40)  
出土遺物 (1/4)

S D03 (第102図)

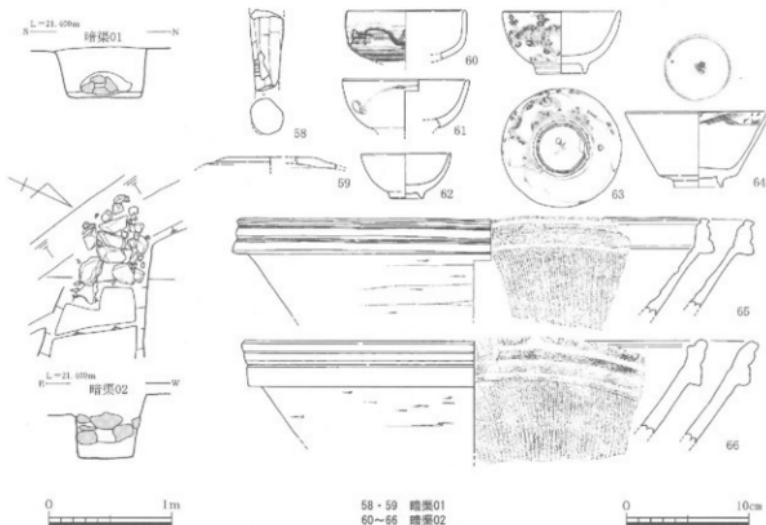
II区中央や西よりで検出した溝状遺構である。東北東から南南西の方向を指すが、暗渠01より南では検出していない。幅25cm、深さ30cmである。

57は鉢小片。弥生時代後期頃のものか。

## 2. 近世

### 暗渠01・暗渠02 (第103図、図版46)

II区で暗渠水路01・02を検出した。暗渠01は東から西へ向き、I区との境付近で北へほぼ直角に向きを変える。暗渠掘り方は幅74cm、深さ40cmで、埋土は黄赤褐色・灰黒色・灰白色混砂混じリシルト、断面形状はほぼ長方形である。暗渠本体は20~30cm大の川原石を側面と上面に積んで水路とし、下側には石は敷かない。上部の石の上側は木の枝で覆い、埋め戻し後に土砂が入らないようにしている。暗渠02は調査区南東部から出現し、東端で暗渠01と接して調査区外へ出る。両者の切り合い関係は不明であるが、同時存在の可能性が高いと考えられる。暗渠掘り方は幅62cm、深さ50cmで断面形状は長方形に近い逆台形である。暗渠本体は暗渠01と同様側面と上面に20cm大の川原石を使って水路にし、下面は素掘りのままである。



第103図 暗渠01・02平・断面図（1／40）出土遺物（1／4）

58・59は暗渠01から出土した遺物である。58は土師質土器足釜の脚部。59は須恵器蓋。頂部は回転ヘラ削りする。その他須恵器の小破片が出土している。

60～66は暗渠02から出土した遺物である。60は瀬戸・美濃系の陶器碗。体部外面下半に鉄釉、その他の部分には透明の釉をかける。腰錫碗。61～64は磁器。61は碗。外面に梅樹文を描く碗。62は小碗。無文。63はほぼ完形。外面に梅樹文を描く碗。釉が均一に掛かっておらず、釉のない部分もある。器表も荒れており、質が悪い。64は朝顔形碗。外面は青い釉を、内面は透明の釉を掛ける。見込みにはコンニャク印判を施す。65・66は堺または明石産擂鉢。ともに緩い片口部をもち、外面はヘラ削りする。暗渠02の遺物は18世紀第3四半期のものと考えられる。

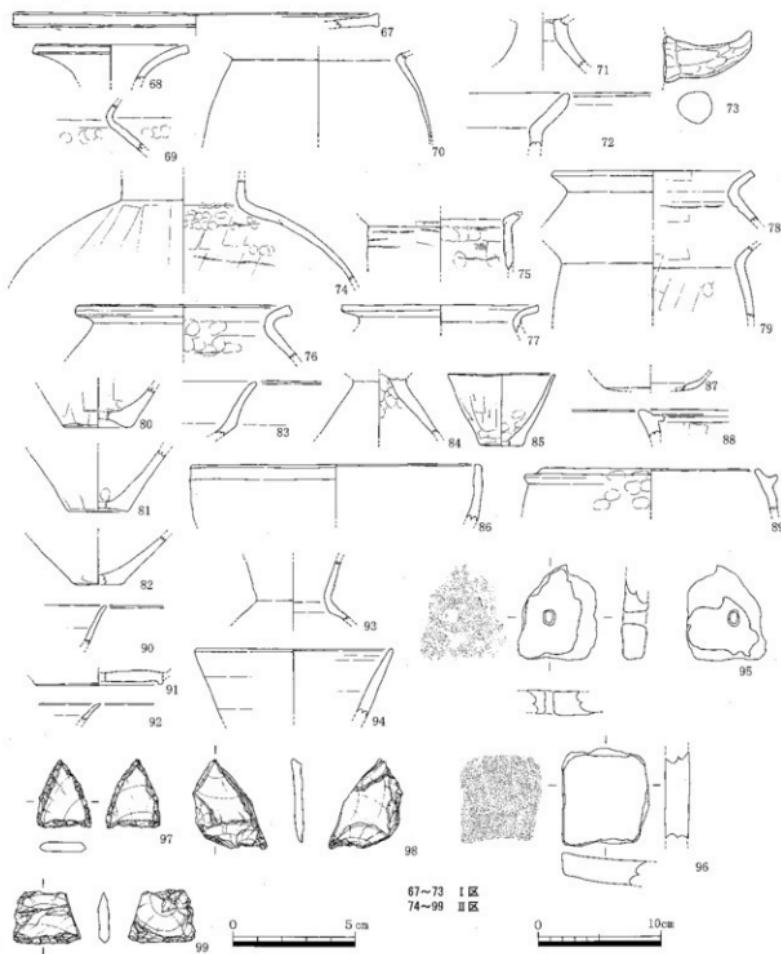
### 3. I・II区包含層、その他

#### I・II区灰褐色砂混じりシルト層（第104図、図版46）

I区南東部からII区に掛けて検出した厚さ約30cmの灰褐色砂混じりシルト層から出土した遺物である。この包含層は遺構の土層図からS D01・S D02の上面に堆積していたと考えられる。この包含層はI区西北側では洪水砂により押し流されている。

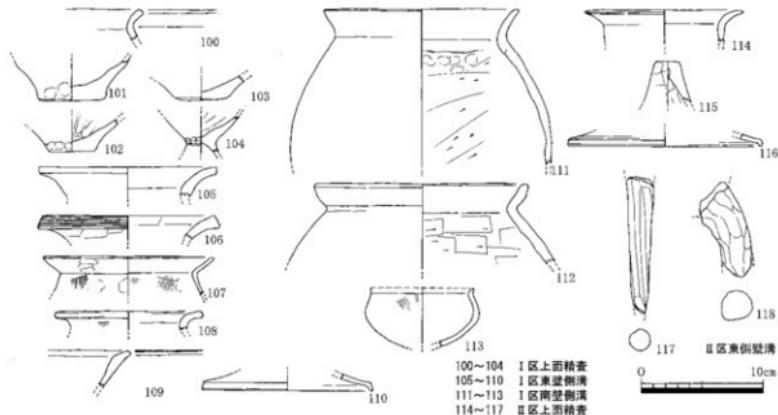
67～73はI区から出土した遺物である。67～71は弥生土器。67・68は甌。67は口縁部が大きく開く器形で、下川津B類。69・70は甌。71は高杯脚部。72・73は土師器。72は甌。体部は寸胴。9世紀頃。73は把手。甌の一部か。出土遺物の時期は弥生時代後期後半～終末期のものと9世紀前後のものがある。

74～99はII区で出土した遺物である。74～86は弥生土器。74・75は甌。74は下川津B類。直立する頸部に丸い体部が付く。75は体部に粘土の継ぎ目痕を明瞭に残す作りの粗いものである。76～79は甌。80



第104図 I・II区灰褐色砂混シルト層出土遺物 (1/4・1/2)

~82は底部。83・84は高杯。84は古墳時代前期に入るものの。85・86は鉢。85は楕型の器形。外面はヘラ削りする。86は弥生時代中期後半~後期初頭頃。87~89は土師質土器。87は杯D。88・89は足釜口縁部。いずれも口縁部の退化が著しい。外面は指押さえ痕または板ナデ痕を残す。90~94は須恵器。90は杯小破片。91は杯B底部。高台の退化は著しい。92は壺口縁部小片。口縁端部に段を持つ。93は壺頸部から体部。やや外形気味に聞く長い頸部と寸胴気味の体部が付く壺になると思われる。94は壺口縁部。95は平瓦片か。全体に摩滅が著しいが、凹面には一部に布目が残る。端部はきれいに調整していない。



第105図 I・II区上面精査・側溝出土遺物（1／4）

穿孔が1ヶ所見られる。用途不明。96は平瓦。凹面には布目が残るが外面には調整痕が残らない。97～99は石器。いずれもサヌカイト。97は石鎚。平基式。両面とも端部だけを欠いて刃にする簡単なつくりである。98は下部と1側縁のみ打ち欠いている。石鎚の失敗品か。99も下部と1側縁のみ打ち欠いて刃にする。

出土遺物の時期はI区同様おもに弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものと9世紀前後のものがあるほか、13～14世紀頃のものも認められる。

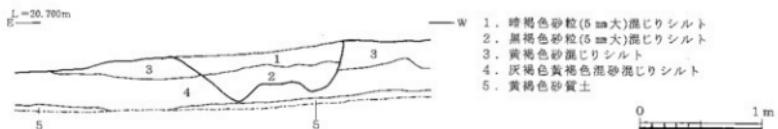
#### 上面精査・側溝出土遺物（第105図、図版47）

100～104はI区上面精査中に出土した遺物である。いずれも灰褐色砂混じりシルト層から出土した可能性が高い遺物である。すべて弥生土器。100は甕小片。101～103は底部。104は製塙土器か。脚部端は欠損する。体部は丸みを持つ。脚部と体部の接合部には指頭痕が残る。105～110はI区東壁側溝から出土した遺物である。105・106は弥生土器壺。106は口縁端部に3条の凹線を施す。弥生時代中期後半。107・108は弥生土器甕。109は鉢小片。口縁端部がわずかに屈曲する。110は須恵器高杯脚部。これらの遺物はいずれも破片が小さく、包含層から出土した可能性が高い。111～113はI区南壁側溝から出土した遺物である。いずれもSD02または包含層から出土した可能性が高いもの。111・112は土師器甕。いずれも内面はヘラ削りする。いずれも破片がやや大きめで、SD02出土の可能性が高い。113は小型壺。114～117はII区上面精査中に出土した遺物。いずれも包含層から出土した可能性が高いと思われる。114は弥生土器壺。115は弥生土器蓋。116は須恵器蓋。117は土師質土器足釜脚部。118はII区東壁側溝から出土した遺物。土師質土器足釜脚部。これらも同じく灰褐色砂混じりシルト層から出土した可能性が高い。

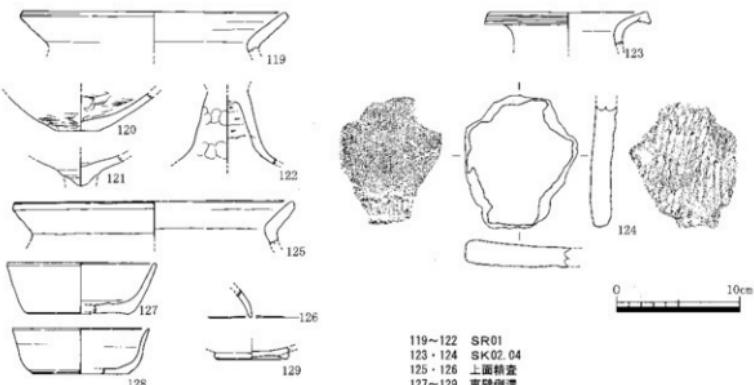
#### 4. III区の遺構・遺物

##### S R01 (第106・107図、図版47)

III区南から北東へ向く旧河道である。南部は途中で消失しているが、壁面の土層断面から南壁中央付



第106図 III区 S R01断面図 (1/40)



第107図 III区 S R01、SK02-04出土遺物 (1/4)

近から調査区外へ延びると考えられる。南から延びる谷地形に沿うものと考えられる。検出長は約10mで、幅1.5m、深さ40cmである。埋土は上層・暗褐色砂混じりシルト、下層・黒褐色砂混じりシルトである。

119~122はS R01出土遺物である。すべて土師器である。119は甕口縁部。120は底部。121・122は高杯。121は杯部底部近くで、脚部と接合するための出っ張りがある。122は高杯脚部。S R01の出土遺物はおむね古墳時代前期と考えられる。

#### 包含層・その他の遺物 (第107図 図版47)

123・124は南部の楕円形の落ち込み群 (SK02・04) から出土した遺物である。落ち込みの埋土は黒色シルトで、南壁断面からそのうちの1つは直径約2.0m、深さは45cm程度、断面形状はボウル状であったと考えられる。平面形状や埋土からこれらは同一の性格を持つと考えられるが、性格は不明である。123は弥生土器壺。口縁端部には2条の凹線を巡らせる。弥生時代中期後半。124は平瓦。凹面に布目、凸面に繩目を残す。端面はきれいに整形していない。須恵質の焼成。

125・126は上面精査中に出土した遺物。125は土師器壺。126は須恵器杯蓋。127~129は東壁側溝掘り下げ中に出土した遺物である。127・128は土師質土器杯。129は須恵器碗底部。内面に板ナデ痕跡がわずかに残る。

南部の落ち込み群から出土した遺物はいずれもI・II区の包含層遺物と同様の様相が見て取れ、その頃に形成されたものと考えられる。東壁側溝から出土したものはいずれも13世紀頃と考えられるもので、破片も他の包含層出土遺物と比べて大きいので、当該期の造構、落ち込み等があったのかもしれない。

## 第11章 まとめ

楠谷遺跡からは古墳時代初頭の溝2条と弥生時代後期と考えられる掘立柱建物2棟を検出した。また、遺構は検出されなかったものの、遺構を覆う包含層からは弥生時代中期後半の遺物が少なからず出土した。楠谷遺跡の南側約500mの丘陵裾部に立地する仲善寺遺跡に目を向けると、ここではまず弥生時代中期末～後期初頭の集落が出現し、引き続き古墳時代前期まで集落が継続する。楠谷遺跡とは水系が異なるが、同じ丘陵の裾部に立地する遺跡である。営まれる遺構の時期は近接しており、同一の集落ではないにしても全く無関係ではないであろう。この丘陵裾付近では弥生時代中期後半頃から集落が見え始めるので、楠谷遺跡もそれらの動きに連動したものと思われる。また、仲善寺遺跡では南北方向に流れる庄内併行期の溝群が掘削され、周辺地域の開墾が始まっている結果とされている。楠谷遺跡で検出した2条の溝も古墳時代初頭頃のもので、緩い尾根線上を切る方向の溝である。これらも周辺地域の開発行為と関わってくるものであろう。しかし、調査区の北西部およびⅢ区では楠谷川の氾濫原が確認されており、不安定な土地であったことがわかる。遺構密度が低いのは低丘陵に挟まれ、楠谷川の氾濫により、安定した土地の面積が狭いからであろう。また、調査地の西側および東側の丘陵地で実施した予備調査で古墳が認められなかったことからも付近での開発行為はあまり盛んではなかったと考えられる。

### 参考文献

- 『大内町史』上巻 大内町 1985.12.
- 『平成15年度香川県土木部道路整備事業に伴う発掘調査報告集 五条遺跡 八丁地遺跡 仲善寺遺跡』香川県教育委員会 1995.3.
- 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要 平成9年度』香川県教育委員会他 1998.3.

大山遺跡  
觀 察 表

## 凡 例

1. 土器・陶磁器の名称は以下のようにそれぞれ略して記載した。

縄文土器：「縄文」	弥生土器：「弥生」	土師質土器：「土質」	瓦質土器：「瓦質」
須恵器：「須恵」	黒色土器：「黒色」	吉備系土師器：「吉備」	東播系須恵器：「東播」
瓦器：「瓦器」	中国産：「中国産」	備前：「備前」	瀬戸・美濃：「瀬戸・美濃」
2. 胎土は含有鉱物の種類を略号で表記した。「石」は石英・長石、「雲」は雲母、「角」は角閃石、「黒石」は黒色石粒、「赤」は赤色粒を示す。また、全体の砂粒密度を「粗」・「やや粗」・「中」・「細」・「微」の5段階に分け、それぞれの含有鉱物における粒径を「大」(2mm以上)、「中」(1~1.9mm)、「小」(0.9mm以下)、その含有量を「多」・「普」・「少」に区分した。こうした分類に基づき、その組み合わせで胎土を観察した。「粗；石小少・雲中普・赤大多」とあれば、素地の砂粒密度は粗く、含有鉱物としては0.9mm以下の粒径の石英・長石が少量、1~1.9mmの雲母が普通、2mm以上の粒径の赤色粒が多く混じる胎土ということになる。
3. 焼成は全体を「硬」・「やや硬」・「良」・「やや軟」・「軟」の5段階に区分した。但し、磁器・施釉陶器に関しては、記載を避けた。
4. 色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年度版』を参照した。その記載方法としては、土師質土器・瓦器・瓦質土器等に関しては、内外面色調をそれぞれ記載し、釉薬を認める陶磁器については、胎土の色調を内面色調欄、釉薬種類とその色調を外面色調欄にそれぞれ記載している。
5. 残存率は完形品に対する実物の割合を8分割で記載し、それ以下については「小片」と記載した。
6. それぞれの土器・陶磁器については、下記の文献に依拠した。

弥生土器：大久保1990・1995	瀬戸・美濃系陶器：藤澤1993	中国産磁器：横田・森田1978
和泉型瓦器：尾上1983	吉備系土師器：山本1993・1997	東播系鉢：森田1995
土師質土器：佐藤2000a・片桐1994		

固有番号	別名普通種名	名称	法長 (cm)	胸高	地土	色調・内面(底土)が外側色則	外因影響	内因影響	備考
1	1区 基本園芸系Ⅰ群	萬葉・薄林	□; 26.2	2.8	やや軟 組: 石小~中多、微小少	に少い褐色のYR7/4 に少い赤褐色の5YR6/4	柔軟又 に少い赤褐色の5YR6/4	干硬地 に少い褐色のYR7/4 に少い褐色の5YR6/4	急傾斜 な傾斜面で、表土を失し、 地盤が崩壊する事 がある。
2	1区 基本園芸系Ⅱ群	萬葉・薄林			口端部 1.8	やや軟 組: 石小~中多、微小少、赤 少	に少い褐色の5YR6/2	に少い褐色の5YR6/4	有毛葉 有刺葉
3	S001	先生・櫻	■; 4.4	延 8.8	やや軟 組: 石少、微小少	に少い褐色の5YR6/4 に少い褐色の5YR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上: ひびき <sup>1~4</sup> 地面上: ひびき <sup>1~4</sup> 地面上: ひびき <sup>1~4</sup> 地面上: ひびき <sup>1~4</sup> 地面上: ひびき <sup>1~4</sup>	地面上の表面をひく伝 感装置の測定
4	S001	先生・桜	□; 16.0	胸 3.0	口端部 1.8	良 やや硬 組: 石中多、微小量、赤 少	に少い褐色のYR7/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup>	口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup>
5	S001	先生・桜	□; 9.1 高: 7.0 幅: 3.7	5.8	やや硬 組: 石少、微小少	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上の表面をひく伝 感装置の測定	
6	S001	先生・桜	□; 4.1 高: 5.7 幅: 1.2	7.8	やや硬 組: 石少、微小少	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup>	口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup>	
7	S001	先生・桜	□; 11.7 高: 6.5 幅: 1.2	5.8	やや硬 組: 石少、微小少	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup>	口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup> 口端部: 直角 <sup>1~4</sup>	
9	S001	先生・桜	□; 14.1 高: 11.1 幅: 4.2	4.8	やや硬 組: 石少、微小少	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
10	S001	先生・桜	□; 16.2 高: 8.4 幅: 4.8	7.8	良 組: 石小~中量、赤少	に少い褐色のYR6/3 に少い褐色のYR6/3 に少い褐色のYR6/3 に少い褐色のYR6/3	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
11	S001	先生・桜	□; 23.5 高: 17.6 幅: 5.3	6.8	やや軟 組: 石少、微小量	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
12	S001	先生・櫻	□; 16.4	2.8	中等軟 組: 石少、微小量	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
13	S001	先生・櫻	□; 13.2	7.8	良 組: 石少、微小少	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
14	S001	先生・櫻	延: 4.5	延 5.8	やや軟 組: 石少	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
15	S001	先生・櫻	□; 14.9 高: 21.0 幅: 4.2	5.6	やや硬 組: 石小~中多、微中量	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
16	S001	先生・櫻	■; 4.2	胸 5.6	良 やや硬 組: 石小~中量、微少、 微小少	に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色のYR6/4 に少い褐色的YR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
17	S001	先生・櫻	□; 10.3 高: 16.7 幅: 3.3	5.8	やや硬 組: 石少、微中量、微中少	に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
18	S001	先生・櫻	□; 13.7 高: 15.1 幅: 3.1	5.8	やや硬 組: 石少、微中量、微中少	に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
19	S001	先生・櫻	延: 5.6	延 5.8	良 組: 石少	に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
20	S001	先生・櫻	□; 13.0 高: 23.5 幅: 4.7	7.8	軟 組: 石少、微中量、微中少	に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
21	S001	先生・底片	茎: 4.6	通 8.6	良 やや硬 組: 石少、微中量、微中少	に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4 に少い褐色的YR6/4	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
22	SP02	土壤・小粒	□; 6.6 高: 0.9 幅: 5.2	2.8	やや硬 組: 石少、微中量、微中少	に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
23	SP23	土壤・小粒	□; 0.9 高: 1.4 幅: 7.1	1.8	やや硬 組: 石少、微中量、微中少	に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	
24	SP23	土壤・研	□; 13.8 高: 10.8	1.8	やや硬 組: 石少、中量	に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3 に少い褐色的YR6/3	体前半: 乾燥→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→ 体後半: 潤滑→ 頭部: ナメル→	地面上を歩き上げ他の 種子の性上位を競い 走行	

學文番号	別名	学名	高さ (cm)	葉形	葉質	葉土	色調-外面 (赤茶)	色調-内面 (赤茶)	外側葉脈	内側葉脈
25 SP23	土質-坪	石質-小草	高さ: 8.8	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	に少く、黄褐色 5YR 7/4	口輪葉：回転子 1/4	口輪葉：回転子 1/4	口輪葉：回転子 1/4
26 SP23	土質-坪	土質-草	高さ: 9.5	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
27 SP24	土質-小草	口: 7.2 高: 10.6 寸: 6.2	2 / 8	楕圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
28 SP24	土質-坪	口: 12.1 高: 3.3 寸: 9.5	高さ: 4.8	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
29 SP24	土質-坪	高さ: 6.9	足延 6.8	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
30 SP24	土質-坪	口: 12.1 高: 3.3 寸: 9.5	高さ: 4.8	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
31 SP58	土質-坪	口: 14.5	1 / 8	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
32 SP58	土質-小草	口: 8.9	1 / 8	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
33 SP65	土質-個ない葉	口: 12.7	小片	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
34 SP74	土質-小草	口: 6.8 高: 1.0 寸: 5.6	橢圓形 2/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
35 SP74	土質-坪	口: 12.2	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
36 SP79	土質-坪	横行長: 3.3 前大傾: 1.1 孔径: 3.5	小片	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
37 SP80	瓦踏-坪	口: 12.7	口輪葉 1/8	口輪葉 1/8	口輪葉 1/8	口輪葉 1/8	口輪葉: 黄褐色 10YR 6/3			
38 SP90	土質-小草	口: 9.0 高: 1.0 寸: 7.3	1 / 8	楢葉形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
39 SP90	土質-坪	口: 14.4 高: 3.0 寸: 9.8	橢圓形 3/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
40 SP96	土質-小草	口: 7.8 高: 1.1 寸: 7.0	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
41 SP125	瓦踏-坪	口: 6.6	1 / 8	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
42 SP126	瓦踏-坪	口: 6.6	1 / 8	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
43 SP200	瓦踏-坪	口: 14.4	小片	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
44 SP203	瓦踏-坪	口: 14.4	小片	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
45 SP227	土質-坪	口: 8.2 高: 1.1 寸: 7.2	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
46 SP248	土質-小草	横行長: 2.4 前大傾: 2.6 最大幅: 1.37	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
47 SK107	瓦踏-坪	高さ: 6.7 寸: 3.9	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
48 SK13	土質-坪	口: 10.0 高: 1.2 寸: 7.8	1 / 8	中や細、石小-中草、葉少	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
49 SK17	土質-小草	口: 12.6 高: 1.5 寸: 6.4	橢圓形 2/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
50 SK17	瓦踏-坪	口: 5.6	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
51 SK17	瓦踏-坪	口: 10.0 高: 1.2 寸: 7.8	1 / 8	中や細、石小-中草、葉少	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
52 SK17	瓦踏-坪	口: 12.6 高: 1.5 寸: 6.4	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
53 SK18	土質-小草	口: 10.0 高: 1.2 寸: 7.8	1 / 8	中や細、石小-中草、葉少	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上
54 SK18	土質-坪	口: 12.6 高: 1.5 寸: 6.4	橢圓形 1/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
55 SK18	土質-坪	口: 6.0	橢圓形 2/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上
56 SK18	土質-坪	口: 6.0	橢圓形 2/8	良	中や細、石小-中草、葉少	同上	同上	同上	同上	同上

地文番号	地名	面積	高さ (cm)	生存率	土	外観	外見診断	内見診断	備考
57 SK16	土質・野沢	面：8.7	脚：8.7	脚根部8.8	良	中：石小～中等、赤小～少 細：中等	赤葉色(0YR8/3)	淡黄色(7.5YR8/3)	手形・内面(赤土)、色斑・外底(赤土)
58 SK16	瓦踏・桜	口：15.5		口播部1/3	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色4/4	白褐色5/5	台形・直立形
59 SK16	瓦踏・桜	口：14.0		1/6	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色2.5/7.5	口播部・直立形
60 SK16	瓦踏・桜	高：5.2		2/6	良	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色2.5/7.5	手形・直立形
61 SK16	瓦踏・桜	高：5.0		底部2/6	良	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色2.5/7.5	手形・直立形
62 SK31	土質・小豆	口：7.7 高：1.5 幅：5.6	1/8	中等	中：石中少、赤小 細：中等	黑褐色7.5YR3/1	灰褐色7.5YR5/2	口播部・直立形	内面全周に薄茶色の 付着物有り、直立形で 少し倒伏する場合有り
63 SK31	土質・小豆	口：6.4 高：1.6 幅：6.2	2/6	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色10YR8/4	灰褐色(0YR8/4)	口播部・直立形	(7.5YR7/2)
64 SK31	土質・桜	口：13.5		口播部1/8	良	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色7.5YR7/2	灰褐色7.5YR7/4	手形・直立形
65 SK31	土質・桜	口：16.0		口播部1/8	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色10YR8/3	灰褐色(0YR8/3)	西面5/5～直立形
66 SK31	瓦踏・桜			底部2/8	良	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色10YR6/2	灰褐色10YR6/2	口播部・直立形
67 SK32	土質・桜	高：6.2		中等	中：石少、赤中等 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	口播部・直立形	上方で2つ倒伏
68 SK32	瓦踏・草			口播部1/8	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	内面側に保護層
69 SK33	土質・桜	高：8.7		2/8	中等	中：石小～中等、赤小～少 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	直立形
70 SK33	土質・桜	高：6.7		中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	直立形	直立形
71 SK33	土質・土種	瓦踏・5.4 番大福1.5 瓦踏・5.5		小片	中等	中：石小～中等、赤小～少 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	直立形
72 SK34	瓦踏・草	口：6.6		口播部1/8	良	中：石少、赤中等 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	直立形
73 SK34	土質・桜	口：12.2		口播部1/8	中等	中：石小～中等 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	直立形
74 SK34	瓦踏・桜	高：7.1		1/8	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	直立形
75 SK34	瓦踏・桜			口播部1/8	良	中：石少、赤中等 細：中等	灰褐色5/5	灰褐色5/5	直立形
76 SK34	瓦踏・桜			小片	良	中：石少、赤中等 細：中等	灰白色5Y8/1	灰白色5Y8/1	直立形
77 SK34	中等・青苗・桜	口：14.8		口播部1/8	中等	中：石小～中等 細：中等	灰褐色7.5Y6/1 (赤色10Y6/1)	外見：青苗 内見：青苗	直立形
78 SK34	中等・2版・桜	高：7.1		1/8	良	中：石少、赤小 細：中等	土上：灰褐色5.5Y7/1 (赤色10Y7/3)	内見：青苗	直立形
79 SK302	土質・桜	口：14.2		1/8	良	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5Y8/3	灰褐色5/5Y8/3	直立形
80 SD007	土質・小豆	口：8.7 高：1.5 幅：5.4	4/6	中	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5Y8/4	灰褐色5/5Y8/4	口播部・直立形	直立形
81 SD007	土質・小豆	口：8.0 高：1.0 幅：5.9	4/8	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5Y8/6	灰褐色5/5Y8/6	口播部・直立形	直立形
82 SD007	土質・小豆	口：7.8 高：1.3 幅：5.4	3/8	良	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5Y8/7	灰褐色5/5Y8/7	口播部・直立形	直立形
83 SD007	土質・小豆	口：8.0 高：1.4 幅：6.7	口播部2/6	良	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色10Y6/2	灰褐色10Y6/2	口播部・直立形	直立形
84 SD007	土質・小豆	口：8.7 高：1.5 幅：6.6	底部2/8	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色5/5Y7/6	灰褐色5/5Y7/6	口播部・直立形	直立形
85 SD007	土質・小豆	口：17.8 高：1.0 幅：6.0	3/8	中等	中：石少、赤小 細：中等	灰褐色10Y6/4	灰褐色10Y6/4	口播部・直立形	直立形
86 SD007	土質・小豆	口：8.2 高：1.3 幅：5.8	4/6	良	中：石小～中等、赤小 細：中等	透葉色10YR8/3	透葉色10YR8/3	直立形	直立形

植物学名	俗名	高さ(cm)	葉の形	葉の表面	葉の裏面	花の色	花の表面	花の裏面	備考
87 SD007	土質・小葉	口:8.4 高:1.3 幅:6.3	3/8	真	中:石小~中質、葉小少	に少く薄緑色(0YR5/2)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
88 SD007	土質・小葉	口:8.8 高:1.5 幅:7.5	1/8	やや硬	中:石小~少	に少く薄緑色(0YR5/2)	底部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
89 SD007	瓦器・鉢	口:10.0 高:2.2	2/8	真	細:	灰色N 4/	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
90 SD007	瓦器・鉢	口:9.3 高:2.0 幅:5.1	4/8	やや硬	細:	灰色N 4/	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
91 SD007	土質・小葉	口:15.1 高:2.3 幅:11.0	2/6	真	細:石少少、葉少少	浅黄褐色(0YR8/1.3)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
92 SD007	土質・小葉	口:12.8 高:1.2 幅:8.0	底面2/8	真	中:石小~中質、葉小少、赤少	に少く薄緑色(0YR5/2)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
93 SD007	土質・小葉	口:13.0 高:3.1 幅:8.6	底面2/8	真	中:石少少、葉少少、赤少	浅黄褐色(0YR8/1.3)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
94 SD007	土質・小葉	高:9.2	2/8	真	細:葉少少、葉面にくり、赤少	に少く薄緑色(0YR5/2)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
95 SD007	土質・小葉	口:14.0	3/8	硬	細:石少少、葉少少	浅黄褐色(0YR8/1.3)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
96 SD007	土質・小葉	口:15.2 高:4.4 幅:5.7	3/6	真	中:石小~中質、葉少少	浅黄褐色(0YR8/1.2)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
97 SD007	土質・小葉	口:14.0 高:4.8 幅:6.6	口緑部1/8	やや硬	細:石少少、葉少少	浅黄褐色(0YR5/2)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
98 SD007	土質・小葉	口:15.6	2/8	やや硬	中:石小~中質、葉少少	浅黄褐色(0YR8/1.3)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
99 SD007	瓦器・鉢	口:13.6	2/8	やや硬	中:石小~中質、葉少少	浅黄褐色(0YR8/1.2)	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
100 SD007	瓦器・鉢	口:8.4 高:4.3 幅:4.2	1/8	やや軟	細:	灰色N 6/	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
101 SD007	瓦器・鉢	口:14.5 高:2.1 幅:4.1	1/8	やや軟	細:石少少	底部:白地緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
102 SD007	瓦器・鉢	口:16.0	1/8	やや硬	細:葉少少	底部:白地緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
103 SD007	瓦器・鉢	口:14.7	2/8	やや軟	中:石少少	底部:白地緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
104 SD007	瓦器・鉢	口:16.6	口緑部1/8	やや軟	中:石少少	底部:白地緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
105 SD007	中質・白緑・液	茎:5.2	2/8	硬	細:	底部:白地緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色	口緑部:白地緑色 底部:暗緑色
106 SD007	東海系山茶樹	1/8	やや硬	幹:	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色
107 SD007	瓦器・鉢	口:10YR 8/1	1/8	やや硬	枝:	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色
108 SD007	瓦器・鉢	口:10YR 8/1	1/8	やや硬	葉:	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色
109 SD007	瓦器・鉢	口:10YR 4/1	1/8	やや硬	葉:	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色
110 SD007	土質・小葉	口:10YR 5/2	1/8	硬	葉:	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色	底部:白地緑色

同文書名	前引書籍名	名称	法量(cm)	操作量	地質	外観色	外観色(底土)	外観色(表面)	外観色(表面)
111 SD09	土質:小屋			泥灰 8	中:石小~中 細:石小~中 粗:石小~中	に古い褐色(0YR4/1) に古い褐色(5YR4/1)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)
112 SD09	土質:小屋	□:7.9 高:1.4 厚:6.1	選土 2/8	良	中:石中大、赤小 細:石中大、赤小 粗:石中大、赤小	に古い褐色(7.5YR7/4) に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)
113 SD09	土質:小屋	□:8.3 高:1.4 厚:6.3	4/8	中:石中大、赤小 細:石中大、赤小 粗:石中大、赤小	に古い褐色(7.5YR7/4) に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)
114 SD09	土質:小屋	□:8.2 高:1.4 厚:6.2	1/8	中:石小、赤小 細:石小、赤小 粗:石小、赤小	に古い褐色(7.5YR7/4) に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)
115 SD09	土質:小屋	□:8.0 高:1.1 厚:7.3	1/8	中:石中大、赤小 細:石中大、赤小 粗:石中大、赤小	に古い褐色(7.5YR7/4) に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)
116 SD09	土質:小屋	□:16.0 高:3.5 厚:10.4	4/8	良	中:石中大、赤小 細:石中大、赤小 粗:石中大、赤小	に古い褐色(7.5YR7/4) に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)
117 SD09	瓦器:板	□:14.8		口輪部 1/3	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	灰白色 2.5Y 7/1	底色 N 5/5	底色 N 5/5	底色 N 5/5
118 SD09	瓦器:板	板:5.0		2/8	良	中:石小 細:石小 粗:石小	に古い褐色(7.5YR7/4) に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 に古い褐色(7.5YR7/4)
119 SD09	土質:櫻			小片	中:石中大、赤中少 細:石中大、赤中少 粗:石中大、赤中少	に古い褐色(7.5YR6/4) に古い褐色(7.5YR6/4)	口輪部:底色7.5YR5/2 に古い褐色(7.5YR5/2)	口輪部:底色7.5YR5/2 に古い褐色(7.5YR5/2)	口輪部:底色7.5YR5/2 に古い褐色(7.5YR5/2)
120 SD10	土質:小屋	□:8.4 高:1.1 厚:5.9	2/8	良	中:石中少、赤小 細:石中少、赤小 粗:石中少、赤小	浅黄褐色 10YR4/4	口輪部:底色7.5YR8/4 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR8/4 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR8/4 底色 N 4/4
121 SD10	土質:小屋	□:8.6 高:1.1 厚:6.8	2/8	良	中:石中少、赤小 細:石中少、赤小 粗:石中少、赤小	浅黄褐色 10YR4/4	口輪部:底色7.5YR8/4 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR8/4 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR8/4 底色 N 4/4
122 SD10	土質:小屋	□:8.0 高:1.2 厚:6.3	7/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	に古い褐色(7.5YR7/3) に古い褐色(7.5YR7/3)	口輪部:底色7.5YR7/3 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/3 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/3 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/3 底色 N 4/4
123 SD10	瓦器:皿	□:8.8 高:1.6 厚:7.2	5/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 6/1	底色白 5Y 6/1	口輪部:底色7.5YR7/3 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/3 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/3 底色 N 4/4
124 SD10	土質:小屋	□:13.9 高:3.1 厚:9.1	5/8	中:石小~大 細:石小~大 粗:石小~大	浅黄褐色 10YR8/3	底色白 5Y 6/1	口輪部:底色7.5YR7/2 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/2 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/2 底色 N 4/4
125 SD10	土質:櫻			1/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	に古い褐色(7.5YR7/2) に古い褐色(7.5YR7/2)	口輪部:底色7.5YR7/2 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/2 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/2 底色 N 4/4
126 SD10	瓦器:板	瓦器:板		小片	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 7/1	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
127 SD10	瓦器:板	瓦器:板		1/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 7/1	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
128 SD10	土質:瓦屋			脚付片	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 7/2	底色白 5Y 7/1	底色白 5Y 7/1	底色白 5Y 7/1
129 SD10	打輪:石頭			脚付片	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 7/2	底色白 5Y 7/1	底色白 5Y 7/1	底色白 5Y 7/1
130 SD11	土質:小屋	□:7.9 高:1.05 厚:6.0	1/8	良	中:石小~中 細:石小~中 粗:石小~中	に古い褐色(7.5YR7/4) に古い褐色(7.5YR7/4)	口輪部:底色7.5YR7/4 底色 N 5/5	口輪部:底色7.5YR7/4 底色 N 5/5	口輪部:底色7.5YR7/4 底色 N 5/5
131 SD11	中質:白質:板	□:5.9		1/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 7/1	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
132 SD12	土質:小屋	□:8.0 高:1.1 厚:7.1	1/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 7/1	底色白 5Y 7/1	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
133 SD13	土質:小屋	□:1.69 高:1.2 厚:6.0	1/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 6/6	底色白 5Y 6/6	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
134 SD13	土質:小屋	□:1.69 高:1.2 厚:6.0	1/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 6/6	底色白 5Y 6/6	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
135 SD13	瓦器:板			小片	中:石小~中 細:石小~中 粗:石小~中	底色白 5Y 6/6	底色白 5Y 6/6	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
136 SD13	土質:泥塗			小片	中:石小~中 細:石小~中 粗:石小~中	底色白 5Y 6/6	底色白 5Y 6/6	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
137 SD15	土質:小屋	□:8.0 高:1.0 厚:7.1	4/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 6/6	底色白 5Y 6/6	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
138 SD15	土質:小屋	□:1.62 高:1.05 厚:7.0	1/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 6/6	底色白 5Y 6/6	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4
139 SD15	瓦器:皿	□:0.9 高:1.7 厚:6.2	1/8	中:石中大 細:石中大 粗:石中大	底色白 5Y 6/6	底色白 5Y 6/6	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4	口輪部:底色7.5YR7/1 底色 N 4/4

留文番号	留出者種類名	名前	法量 (cm)	残存率	性状	鉢土	鉢	外観評定 (内外部状況)	内部調査	備考
140	S015	瓦器・鉢	口: 8.6 底: 8.6	1/8	良	細	底色 N 5/6 底色 N 6/6	底色 N 5/6 底色 N 5/6	口縁部: 黄褐色 底部: 淡灰色 内面: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
141	S001	瓦器・鉢	口: 28.0	口縁部 1/8	良	細	底色 N 6/6 底色 N 6/6	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
142	S001	土質・瓦	鉢形: 小	少や軟	中: 石小~大粒、泥小少 中: 石小~中粒、泥少少	粗	底色 N 6/6 底色 N 6/6	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
143	S005	土質・瓦	口: 14.3 底: 3.8 高: 10.0	実物 9/8	良	細	底色 N 6/6 底色 N 6/6	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
144	1 区区分金 〔基本分析用〕	土質・小皿	口: 8.6 高: 0.9 底: 6.4	口縁部 6/8 底: 8	良	細	底色 N 6/6 底色 N 6/6	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
145	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・小皿	口: 8.4 高: 1.3 底: 6.4	口縁部 3/8	良	細	中: 石小~中粒、泥小~中少 中: 石小~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
146	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・小皿	口: 9.0 高: 1.65 底: 7.0	3/8	良	細	中: 石小~中粒、泥少少 中: 石小~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
147	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・小皿	口: 8.7 高: 1.7 底: 6.5	6/8	良	細	中: 石小~大粒 中: 石中~中粒	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
148	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・小皿	口: 8.3 高: 1.13 底: 6.0	口縁部 4/8	良	細	中: 石小~中粒、泥小~中少 中: 石小~中粒、泥小~中少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
149	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・小皿	口: 8.6 高: 1.13 底: 6.8	2/8	良	細	中: 石小~中粒、泥小~中少 中: 石小~中粒、泥小~中少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
150	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・小皿	口: 8.2 高: 1.4 底: 6.8	2/8	良	細	中: 石小~大粒 中: 石小~大粒	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
151	1 区区分金 〔標準分析用〕	瓦器・皿	口: 9.0 高: 1.7 底: 7.7	4/8	やや硬	粗	底色 N 6/6 底色 N 6/6	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
152	1 区区分金 〔標準分析用〕	瓦器・皿	口: 8.4 高: 1.6 底: 7.4	4/8	やや軟	粗	中: 石小~中粒、泥小~少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 5 Y 5/1 底色 N 5 Y 5/1	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
153	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	底: 5.0	底: 2/8	良	細	中: 石小~中粒、泥小~少 中: 石小~中粒、泥少少	底色 N 5 Y 6/2 底色 N 5 Y 6/2	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
154	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	口: 9.0 高: 8.6	3/8	良	細	中: 石小~大粒、泥小~少 中: 石小~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
155	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	口: 14.0	1/8	やや軟	粗	中: 石小~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
156	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	口: 15.0 高: 3.2 底: 9.5	4/8	良	細	中: 石中~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
157	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	口: 14.8 高: 3.2 底: 10.9	2/8	良	細	中: 石中~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
158	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	底: 9.5	底: 7/8	良	細	中: 石中~大粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
159	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	口: 15.3 底: 3.2	底: 2/8	良	細	中: 石小~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
160	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	口: 13.4 高: 3.1 底: 10.3	4/8	やや軟	粗	中: 石小~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
161	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	底: 7.2	底: 1/8	良	細	中: 石中~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
162	1 区区分金 〔標準分析用〕	土質・板	底: 7.9	底: 3/8	良	細	中: 石中~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
163	1 区区分金 〔標準分析用〕	瓦器・板	口: 17.0	口縁部 1/8	小片	やや硬	中: 石中~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
164	1 区区分金 〔標準分析用〕	瓦器・板	口: 16.2 高: 4.3 底: 4.6	2/8	良	細	中: 石中~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
165	1 区区分金 〔標準分析用〕	瓦器・板	口: 14.6	口縁部 1/8	良	細	中: 石中~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底
166	1 区区分金 〔標準分析用〕	瓦器・板	口: 14.6	口縁部 1/8	良	細	中: 石中~中粒、泥少少 中: 石中~中粒、泥少少	底色 N 6/6 底色 N 6/6	口縁部: 黄褐色 底部: 黄褐色	底出漏れ直前割 1 個 底

学文番号	別名等漢名	名前	高さ(cm)	根付生	根成	茎土	色斑・内面(地土)	外因形態	内因形態
167 (基本形序基原)	瓦管・柄	□:14.2	口袖部2.0	板	粗:	灰土	灰白色2.5Y7/1 灰色5Y7/1	口縁部・指輪部	灰入込・平行筋状 灰上端部直3間
168 (基本形序基原)	瓦管・柄	■:5.0	1/8	やや透 透:	透:	灰土	灰色5Y5/4 灰色5N/4	口縁部・指輪部	灰入込・平行筋状 灰上端部直3間
169 (基本形序基原)	瓦管・柄	□:5.0	2/8	やや透 透:	透:	灰土	灰色5Y4/4 灰色2.5Y7/2	口縁部・指輪部	灰入込・平行筋状 灰上端部直3間
170 (基本形序基原)	中筋・白筒・子	□:5.2 高:1.7 幅:1.3	1/8	口袖部1.0	板	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
171 (基本形序基原)	中筋・白筒・固	□:9.9 高:2.6 幅:4.3	1/8	口袖部1.0	板	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
172 (基本形序基原)	中筋・青筒・固	□:15.0	1/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y7/1 (灰白色5Y7/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
173 (基本形序基原)	中筋・白筒・透	□:15.0	1/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y7/1 (灰白色5Y7/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
174 (基本形序基原)	常・透	小片	やや透	透:	石:小こぐ少	灰土	灰白色5Y6/2 (灰白色5Y6/2)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
175 (基本形序基原)	透筋・絲	小片	やや透	中:石:小・中筋	透:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
176 (基本形序基原)	土・透	□:5.0	1/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
177 (基本形序基原)	土・透・透	□:5.0	1/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
178 (基本形序基原)	土・透	□:5.0	1/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
179 (基本形序基原)	透・絲	小片	良	中:石:小・中筋・透:小透	透:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
180 (基本形序基原)	土・絲?	□:5.0	1/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
181 (基本形序基原)	土・透・透	□:5.0	1/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
182 (基本形序基原)	土・透・透	□:5.0	1/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
183 (基本形序基原)	土・透・足	□:5.0 高:15.5 幅:2.6 細:	6/8	透筋部2.0	透:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
184 (基本形序基原)	土・透・特形式2型	□:3.4	小片	やや透	透:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
185 (基本形序基原)	透・圓筒透合・透	□:3.4	小片	やや透	透:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
186 (基本形序基原)	透・透合	□:3.6	1/8	透:	透:	灰土	灰白色5Y6/1 (灰白色5Y6/1)	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
187 (基本形序基原)	透・透	□:8.5 高:1.75 幅:6.4	小片	透:	透:	灰土	灰白色5Y6/1 灰透部5Y4/1	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
188 (基本形序基原)	土・小透	□:7.6 高:1.4 幅:6.2	2/8	やや透	透:	灰土	灰白色5Y7/4 灰透部5Y4/1	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
189 (基本形序基原)	土・透・小透	□:8.2 高:1.5 幅:7.0	2/8	やや透	透:	灰土	灰白色5Y7/4 灰透部5Y4/1	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
190 (基本形序基原)	土・透・小透	□:8.2 高:1.5 幅:7.0	2/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y7/4 灰透部5Y4/1	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
191 (基本形序基原)	土・透・小透	□:8.3 高:1.5 幅:7.0	2/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y7/4 灰透部5Y4/1	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
192 (基本形序基原)	土・透・小透	□:8.3 高:1.5 幅:6.7	2/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y7/4 灰透部5Y4/1	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
193 (基本形序基原)	土・透・小透	□:8.2 高:1.25 幅:6.4	2/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y7/4 灰透部5Y4/1	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角
194 (基本形序基原)	土・透・小透	□:8.6 高:1.35 幅:6.6	2/8	口袖部1.0	板:	灰土	灰白色5Y7/4 灰透部5Y4/1	口縫部・指輪部	灰透び・穿孔部内面角